

# ドリームマガジン

二次元

cover illustration by  
MISS BLACK

2016 **08** Volume.89  
1,080  
[税込] yen

悪の根城に潜入した烈女を襲う  
快楽調教の罠!!

# 女捜査官

今号の  
Special Fetishism Series  
特集

試し読み版

※紙&ピンナップレシカカード  
応募者全員サービス

【カラーピンナップ】

由浦カズヤ

MISS BLACK / 孤裡精

【えっちマンガ&4コママンガ】

ふみひろ

『白の妖精とマジカルススカ』

ばふえ / 夜与  
天海雪乃 / 嘉納あいら

新連載  
new series

ノクタンノベルズ  
コミック化!!!!  
発の  
人気小説が

【連載&読み切り小説】

新連載  
冬野ひつじ × sasana

『欲望特急 スレイブパーサー搾精捜査』

最終回  
天草白 × 宮代龍太郎

『幻想戦姫フェアリーフレア』

18  
未 満

ほいまい × みやねあき  
酒井仁 × 桐島サトシ  
蒼井村正 × 秋月からす  
上田ながの × ゴールデン

ウナル × 虫けらホイホイ  
江口ヒロヨシ × ひなくま  
千夜詠 × MISS BLACK

エルフの国の宮廷魔導師になれたので  
姫様に性的な悪戯をしてみた  
時丸 原作:磯貝武連





小説 せんやよみ 千夜詠  
NOVEL  
挿絵 ILLUSTRATION MISS BLACK

潜入捜査官

セリア

淫薬の宴

潜入先の館で待ち受けていたのは  
豊満な肉体を蝕む  
薬漬けの快樂地獄!



応接室のソファアーに向かい合つて座っている三十代と思われる美婦人と壮年の紳士。

女性はマダムSと呼ばれるこの館の十五代当主である。日頃から真つ赤なイブニングドレスを纏い、胸元の露出は高く、脚部のスリットは腰位置までと深い。黒髪を背中まで伸ばし、切れ長の妖艶な瞳は、常に相手を値踏みするかのようになり、舐め回す。

男性はアンドラゴラ製薬の新薬開発部の責任者だ。名は、クラウスという。細面で髪に白髪が混ざりだしているが、欲望の塊のようなギラギラとした瞳をしていた。

「それで、例の薬は……、効果の程はいかがなかしら？」

「マウスでの実験結果は上々ですよ、マダム。牝に投与したのですが、数十匹の牡が最後には逃げ回るくらいに……ね。牡を取り上げた途端、狂つたようにガラスケースに体を打ち付けていましたよ。ですが、まだ、人には使つていません。どうです、立候補してみますか？」

「大変興味深いご提案です。でも、まあ、止めておきましょう。こう見えても、慎重ですよ」

「それは、残念です」  
扉がノックされた。二人は一端会話を止め、ドアの向こうにいる相手に入室の許可を出す。

「失礼致します」  
輝くような金髪に碧眼をした美人のお手本のようなメイドであった。

ほお、と溜め息混じりにクラウスは小さく声を漏らした。メイドの髪の本から、指先までを丹念に見詰め、全身から溢れてくる牝の雰囲気を感じ、顔立ちは清楚というより、生真面目といった表現の方が似合う。一言にするなら、できる女、である。

地味な濃紺のメイド服の上からでも、肉感的なラインが明らかで、まるで男を悦ばせる為に作られた

かのような。なのに、ガードが堅そうで、冷めた印象すらあった。

「お茶をお持ちしました」  
「ありがとう、そこに置いて下さいな」  
「はい、奥様」

テーブルに丁寧なポットとカップを置いていくメイドに、クラウスはまた鼻を鳴らした。そんな様子にマダムSは面白そうに瞳を細める。

一礼して退室していくメイドから、クラウスは最後まで目を離さなかった。

「んふふ、気に入りました？」  
「ええ、女肉の匂いがありました」

男のスーツの股間は隠す事なく膨らんでいる。

「彼女は、最近雇ったばかりですよ。名前は、セリア……といいましたかしら」

「うむ、実に健康そうで……」  
「美味しそうでしょ」

笑う。劣情を込め、約束された肉欲の解放の時を予感しながら。

\*  
忍ばせた盗聴機からの声に耳を傾けながら、セリアはふんつと鼻を鳴らす。

——やはり、アンドラゴラ製薬とマダムSは繋がっていた。

違法薬物をベースに使用したドラッグの売買がここ、マダムSの館で行われているとのタレコミがあり、当局の下した判断は潜入調査だった。

選ばれたのは、捜査官の中でも若きエースと呼ばれるセリア。元々、マダムSの館には、政財界の人物が出入りしているとの情報があり、賄賂の温床になつていくとの噂があった。

バックに大物が控えているのであれば、確実な証拠がない限り、検査は難しい。だからこそエースの投入。マダムSから崩し、腐敗した政治家や利権

を独占する輩を一斉に潰せると上は期待していた。メイドとして雇われ、一月、ようやく館の全容を把握する事ができた。

マダムSとクラウスの会話から、何かを彼女が受け取ったのは分かったから、まずはそれを確かめる。セリアは、深夜になると、メイド服からアクションスーツへと着替えた。黒いライダースーツのような物で、収縮性が高く、肉体にピッタリと張り付く。

女性でも溜め息が出るようなボディラインが露わになり、釣鐘状の豊満な乳房から引き締まった腰回り、そその官能的な臀部の形状は、男性なら生唾を飲み込むだろう。

下着姿の上にそれを着込んだセリアは、メイドの部屋から直接屋根裏に登った。マダムSの保管庫に入る事のできる唯一のルートがこれなのだ。

暗視ゴーグルを掛けて、腹這いで進む。そこにはネズミの一匹もいない。何故なら、屋根裏に設置されたセンサーが感知するとすぐさまレーザーが発せられ、対象を焼くからだ。

それを避けながら慎重に進まねばならない。ゆつくり、確実に——。

一月掛けて、センサーの死角を探り当て、とうとう唯一のルートを見つけたのが昨晩。それを完璧に頭に叩き込んでいる。

「ふう、あと二つ、センサーが設置されていたら諦めていたけど、ケチるものじゃないわよ、マダム」  
保管庫の上に辿り着く。内部のセキュリティは事前に解除しておいた。防音も完璧なので、気兼ねなく、下りさせてもらう。

「案外、楽な仕事だったわね。それじゃあ——」  
金属製の柵の一つに手を伸ばしかけたその時、背後に気配を感じた。いや、殺意と言った方が正しい。風を切るような音と共に振り下ろされたのは、大きな肉斬り包丁。

振り返りざまに避けた。その碧眼に映ったのは、館の料理人。普段と様子が違う。虚ろな瞳、涎を垂らし、奇声を発する。

判断は、排除。情けを掛けている場合ではない。眉間に合わせたハイキック。脳天を揺らされた太つちよの男は、巨体をドスンと倒れさせた。

「これは……く……っ」  
不味い状況だろう。明らかに自分を待ち伏せた攻撃だったのだ。

次の判断——脱出。素早く、元の天井裏に登ろうとしたその時、倉庫に噴出される。

——ガス……っ!!  
即効性のそれに、体が痺れ、意識は簡単に暗闇に落ち込んだ。

\*  
感情が伴わなければ、それは甘美とも嫌悪ともいえない刺激だった。物理的な感覚は、しかし強烈に軋を揺さぶり、本質を露わに、反応を起こさせた。

——ここは……  
まだ頭がぼんやりとしながら、覚醒する。

「ん……っ!!」  
館内の一室。椅子に座らされ、身動きができなかった。両手は頭の後ろに、両脚は大きく開かされるように拘束されているからだ。

黒いアキシオンスーツは身に着けたままであったが、胸元のファスナーが下ろされ、メロン大の乳房の半分が露出している。下着は剥ぎ取られていた。汗ばんだ肌から、蒸れた香りが放たれ、鼻腔に届く。それが自分でも赤面するような卑猥さを醸し出している。

それ以上に、困惑するのが、下腹部だった。棒状が卑肉に食い込み、埋め込まれているのだ。アキシオンスーツの股間部には、用足しの為のファスナーがあったが、どうやらそこを一度開かれ、秘部に悪戯をされたようである。

——やだ、これ……太いわ。それに……  
肉裂を広げ、膣を抉り込んでいるそれを敏感に感じる。ファスナーは戻されているが、股座には、円柱状のシルエットが浮き出て、外観からも挿入されているのがはつきりと分かった。

男根を模した形状、太く、長く、子宮口に到達するほど奥まで埋め込まれ、セリアの牝芯は、悪質に女を責める莖部の無数の突起を感じていた。

「う……っ、きつ……、や、やめ……」  
目覚めを促した刺激の正体はこれだ。小刻みに速い揺れが、膣内の粘膜を細かく掻き、ゾクゾクと性感を湧き上がらせてくる。

「ふふ、お目覚めのようね」  
背後からそっと現われ、彼女は、セリアの前に立った。この館の女主人、マダムSである。そして、もう二人の男を連れて。

一人は、アンドラゴラ製薬のクラウス。もう一人は——。  
潜入捜査官は、マダムSを睨んでいたが、彼の顔を見ると、驚愕にその碧眼を見開いた。

「あ、貴方は……」  
その顎鬚を生やしたスマートな中年男性をセリアは知っている。この街の警察機構のトップ、レオナルドだった。

「やあ、セリア、久しぶりだね。うむ、実に素晴らしい姿だ。いやいや、妄想していた以上だよ」  
膨らんだスーツの股間を彼は隠そうとはしない。

「これは、どういう……」  
「なに、簡単な事さ。以前から、マダムには懇意にしていただいてね。新薬の実験体を手に入れたのだが、誰か良いサンプルはいないかと相談されたのだよ。女囚から選んでも良かったのだが、私は

以前から君に興味があった。推薦したら、マダムも大層気に入ってくれて、こうして、機会を作らせてもらったというわけだ」

「最初から、それが目的で……」  
「タレコミなんて、嘘さ。セキユリテイもわざと穴を作り、こうして、誘導、マダムが君の能力を知りたがっていたからね。楽しんでもらえたかな？」

「く……」  
悔しさに唇を噛む。だが、じわじわと下腹部がパイプの責めを受け続けていて、油断すれば、男を悦ばせる、甘い声を漏らしてしまいそうになってしま

う。  
——何とか、ここを脱出して、中央の総監に伝えないと……。

ニタニタと笑う三人の視線が体中を這い回る。徐々に性快楽に肉体が侵食されて、乱れていくさまを鑑賞しようというのか。

「こ、こんな、事で……、ん、ふあ……」  
継続的に刺激が続く、だが決して激しくはない。疼きが秘部から膨らんでいき、鮮烈な物を欲して、涎のように淫蜜が肉壺から漏れてしまう。

「貴女には、薬の実験体として、それと、お客様を楽しませる余興として、壊れるまで使用させてもらいますね」

「マダムS、次のパーティは？」

「明後日の夜、中央の官僚も大勢いらつしやるから、満足して帰っていただかないと」

「では、それまでに、仕上げるとなると、かなりハードになりますね」

「大丈夫でしょ、その為の、新薬、なのですからねえ、クラウスさん」

「壮年の男が一步前に出た。その手に、注射器を持つて。」

「美しい捜査官の表情が強張った。」

3 泊 4 日 クルーズトレインでの潜入捜査

物証と引き換えに望まない  
陵辱体験をするのは  
陵辱体験!!



小説 NOVEL どうの冬野ひつじ  
挿絵 ILLUSTRATION sasana

THE DESIRE EXPRESS  
**欲望特急**

スレイブパーサー  搾精捜査

【1日目 咲幌～波館】汚辱のチケット

流れゆく車窓の外を、茨戸<sup>ヒツト</sup>理緒<sup>リキョ</sup>は息を詰めて眺めていた。

陽光に照らされた家々の屋根は、彼女が普段見慣れている瓦葺きのそれとは全く違う。肩を寄せ合うようにして並ぶ北国特有の平らな板金屋根はいかに雪の多さを想像させるが、目線を少し上げた先に広がっているのは、抜けるような秋空だ。

（星南駅も定刻通りに通過した……このままだと、もうすぐこの先が海が見えてくる……）

北の大地で唯一の政令指定都市も、少し走ればあつという間に郊外へと抜けてしまふ。住宅街が途切れ、工場や倉庫がぼつりぼつりと現れ始めたと思ふ間もなく雑木林が目につくようになり、建物そのものが疎らになる。つい十数分前まで立っていた駅の喧騒が嘘のような、どこか寂寥感のある景色が広がりはじめた。

しかし、理緒の心はここにはない。

憂いを湛えた瞳に映るパノラマは、具現化されたダイヤグラムという以上の意味を持たないままに後方へと流れ去って行くだけだ。

（海岸線が見えるのは代市までだから、その間はこの展望車を中心に入りする乗客が多いはず……だから定石通りでいけば、ホシへの接触は似古駅通過後に決行でいい……）

頭に叩き込んだタイムスケジュールを確認しながら、これまで何百回も頭の中で繰り返してきたシミュレーションを、もう一度なぞり返す。

（サンブルについては、波館駅で受け渡し後速やかに検査に回すよう手筈は整っている……）

視界の先には、空のものとは違う青色が小さく見えてきていた。日本海特有の群青色だ。陽を浴びて輝きを見せながらも奥底に鉛を抱いているかのような、深い深い青――。

ダークアイアンの瞳は、ようやく瞬きをする。（大丈夫、今のところ何も問題は無い……あとは私がミスさえしなければ、この作戦は成功する）

線路沿いに並ぶ木造家屋の向こうに水平線がぐんぐんと伸び始めた。

（うーん、絶対に成功させなければいけない……！）魚群でも来ているのだろうか、芥子粒のような鷗達が激しく上下しながら飛び交っている。汽笛を高らかに鳴らしながら、列車はカーブを駆け抜けた。

（この列車が、最初で最後のチャンスなのだから）大抵の乗客ならば否応なしに旅情を駆り立てられているひとときであろう。

だが、展望車に佇むユニフォーム姿の乙女の白い頬は、強張ったままだった。

（もう、後戻りはできない!!）

青い列車は、凪いだ水面を走る木の葉のような滑らかなさで線路をひた走る。

### 『渡嶋』

これが、理緒が乗り込んでいる超豪華寝台列車だ。同時に現存する日本で唯一の青い寝台列車でもある。

先頭で牽引するディーゼル機関車といい、その先頭で誇らしげに輝いているヘッドマークといい、その雄姿は一見すると正統派のブルートレインそのものだが、実はハイブリッド動力を本格的に導入した国内初の商用列車でもある。客車部分においても空間を最大限に確保する事でオール二階建てとし、居住性を格段に向上させた。その先進性ゆえに渡嶋は『ネオブルートレイン』の呼称を与えられたのだ。

その呼び名には、鉄道ファンの懐古と共に、巨額の赤字を抱えた地元鉄道会社の起死回生への願いもまた込められていた。

『凄いわ、全然揺れないし、本当にホテルみたい』華やいだおしゃべりが近付いて来て、理緒は慌て

て身体向きを変え、正確に三十度の角度でお辞儀をする。

『まさか日本にいてこんなオリエント急行みたいな列車の旅ができるなんてね』

楽しげに笑い合ひながら、着飾った小太りの婦人達を通り過ぎた。誰もがその名を知っているが誰もが買える訳ではない高級香水の香りが鼻先を掠める深みのあるムスクの芳香は琥珀色のニュアンスを纏ったこの異空間によく合っている。

渡嶋は定期運行されている現役寝台列車でありながら、終点到着までに三泊四日を要する。乗車料金はヨーロッパ旅行と同じか、下手をすればそれ以上だ。だが、それに値する他に類を見ない豪華さがこの渡嶋の名声を国内外に轟かせていた。

向き合う二頭のエゾシカのシンボルマークを筆頭に、列車のデザインは内装から小物の一つまでを海外の有名ブランドが手掛けている。北の自然を基調とした流線型のモチーフは、オールヌーボー建築の傑作とされるプラハやブダペストのホテルを髣髴とさせる。海外の雑誌にも度々紹介されているため、外国人の乗客も多い。

贅を尽くしているのは大理石やマホガニー材を多用した装飾だけではない。乗客数を極端に少なく設定し、一人あたりのプライベートスペースを拡張する事で高級ホテル並みのラグジュアリーな空間を謳っている。また、ディーナーで提供される道産食材のみを使用したフレンチコースはグルメ垂涎の的だ。特区構想によって実現した車内カジノも、簡易ではあるがクオリティの高さが好評で、ルーレットやポーカーを一通り楽しめる。

しかし、渡嶋の全容はマスコミには明らかにされていない。そのために、VIPならではの特別なサービスがある、政財界の有力者に割り当てられている限定乗車枠があるらしいといった真偽の定かでない

限定乗車枠があるらしいといった真偽の定かでない

い噂が、まことしやかに囁かれていた。

（本部長が各方面に手を回してくれたとはいえ、この列車に乗り込めたのは奇跡ね……）

前代未聞の豪華列車に相応しく、乗客達の世話をするパーサー達も、国内外からプロフェッショナルが集められていた。容姿はもちろん、知性教養の豊かさや語学力の高さによって選りすぐられた者達の経歴は、海外ホテル勤務や国際線CAと多種多様だ。そしてその中の一人に、中央捜査局の現役訓練生がいた——それが理緒だった。

中央捜査局とは、犯罪のグローバル化や専門化に対応するのが目的の、県境を越えて捜査が可能な国直属の捜査隊の名称だ。

自治体警察と連携を取りながらの捜査が掲げられているため日本のFBIとも称されるが、逮捕権を持っている事により、実際の権限はFBIよりも強力だった。

（やれる準備は全てやった……）

理緒はガラスに映る自分の姿を改めて覗き込んだ。柔らかな髪が揺れて石鹸系の香水が、ほんのり香る。ブルーの制服は、ややクラシカルなデザインだが、それが彼女の持つ美貌と合わさる事で凛とした雰囲気を出している。肩まである巻き髪も、タイトなスカートからスラリと伸びた脚のラインも、まるで渡嶋のために挑えたかのような完璧さだ。イメージポスターの撮影中だと言われても信じてしまいそうになる程に、優美な空気と調和している。

だが、理緒本人にとっては、普段と違う自分の姿は何度見てもまだしっくり来なかった。

（アイツ好みのメイクにしたのはいいけど、パーサーにしてはちょっと派手な気がする……いや、やっぱりこれくらいで丁度いいのかな……？）

気品を失わないギリギリまで女性らしさを強調し

たメイクは、自分で見てもハッとする程に目を惹くものに仕上がっていた。ピンクの入ったアイシャドウに、やや垂れ目気味になるよう乗せたマスカラ下唇にだけ入れたグロスには、男性に強くアピールするためのものだ。

（……アピール、か）

全ては振り向いて欲しい相手のための装い。だが、その対象は、自分がこの世で最も憎んでいる男——

（私が母さんの仇の好みの顔になって誘惑する……母さんの仇を取るために……）

残酷な皮肉に、制服の美女はぐっと拳を握る。

特定の女性達をモデルに細部まで計算し尽くされたメイクも、そして渡嶋のパーサーという偽りの身分も、全てはある極秘潜入捜査のためだった。

（でも、これである男は私に興味を持った……あとチークをはいた頬が、その色を一際濃くした。

（待ってなさい！ 絶対にお前の精液を採取してみせる……！）

先程顔を合わせたばかりの男に心の中でそう宣言すると、麗しき訓練生は臙脂色のカーペットの上で踵を返し、展望車を後にするのだった。

豪華列車にパーサーとして潜入し、乗客である被害者の精液を採取する——。

それはあまりにも突拍子もない任務だった。国内でも指折りと謳われる難関試験を何度も潜り抜けて来たはずの理緒も、最初にそれを告げられた時には、直立不動のまましばらく二の句が継げないでいた。

「ジョイフル証券の件は君も知っているな？ 一昨日、首都警からウチへ緊急捜査協力依頼が来た」

ジョイフル証券とは、十年ほど前に設立された金融商品を取り扱う会社である。富裕層を中心に金融商品の販売していたのだが、高利益を謳った新商品の購入後、突然連絡が取れなくなったという顧客達の問い合わせが金融庁に殺到していた。

「高飛びされる前に社長の黒岩を、別件でただちに逮捕せよとの上からの厳命だ」

選挙対策か、はたまた焦げ付きを抱えてしまったどこかの代議士の個人的な要請か。そんな考えが一瞬脳裏を過るが、真相などどうせ分かるはずもない。知らなくてもよい世界というものが確実に存在し、そこに敢えて踏み込めばどうなるかという事くらいは弁えは持ち合わせているつもりだ。

「しかし……別件とは一体……？ そもそも何故自分が呼ばれたのでしょうか？」

窓辺に観葉植物の鉢が置き去りにされた部屋。コーヒの香りに煙草の匂いが混ざっているのは前に来た時と同じだったが、今日は一際煙草の匂いが濃い。

「……本部長？」

長い沈黙の後で、捜査本部長はようやく口を開く。「黒岩の周辺では過去に複数の強姦や強盗事件が発生していて未解決のまま……そして、思い出させるのも酷な話なのだが……十年前の君のご両親の事件……いわゆる貿易商強盗事件……あれとどうやら関係があるようなのだ」

「……っ？！」

全く予想もしていなかった一言に打たれて、若き訓練生は言葉を失った。

「そ、それは、どういう……？」

「新しい証言が幾つも出て来た……だが、時間が無い。このまま高飛びされれば迷宮入りだ」

血の気を失いながらも、理緒は今自分が人生の岐路に立っている事をひしひしと感じていた。



「貿易商強盗事件……被害者の名前は麻生正彦・千鶴夫妻……私の、お父さんと……お母さん……」

忘れようにも決して忘れる事のできない名前を、胸の中で何度も復唱する。

「その男が……黒岩が、麻生家に押し入った犯人の一人なのは、ほぼ間違いないんですね？」

平静を装っているつもりでも、唇は僅かに震えた。「状況証拠からして99%間違いない……後は、新たな物証が揃えばいいのだが……」

「物証……」

「お父さんはあの時殴られて今も昏睡したまま……そしてお母さんは……アイツらにレイプされた」

リビングの壁にもたれかかる母の裸体が、フラッシュバックした。

「そしてそのまま病院に入院させられた後……窓から飛び降りた……！」

父が抵抗する間もなく殴られたため、犯人の血液などは採取できなかった。母の胎内と外に撒き散らされた夥しい量の精液を除いては――。

「黒岩は頭の切れる奴のようで、とんでもなくガードが固い。詐欺の証拠も一つ残らず消し去っていて、そっちのルートでは正直お手上げだ」

唸るような声で告げる初老の男の顔もまた、強張っている。

「だからこれは君が仇討できる最後のチャンスでもあると、そう思っただけは君に白羽の矢を立てた……つまり、現場に残されていた体液と照合するために、黒岩のDNAを……精液を、採取して欲しいのだ」

理緒は大きく目を見開いた。

「……強要はしないよ」

「……強要はしないよ」

「……強要はしないよ」

「……強要はしないよ」

ちろんこの方法も捜査に採用されている。

（他に方法は……?!）でも、確かに授業で教わった通り、このケースだと対比サンプルが古くて毛球中DNAによる鑑定では精度が期待できない……）

「君にとって過酷な任務なのは分かっている。しかし……今言ったように、様々な意味で君が適任なんだ……その、君の過去の件だけではなく……女性でなければ今回の任務は遂行できないという、特殊な点も含めて……」

《特殊》という言葉に忌まわしい情景が重なり、首筋が粟立つ。

（嫌だ……だって、相手はお母さんをレイプした男なのに……そんな男とセックスなんか……ましてやキスから先なんてした事ない……どうやって相手をその気にさせればいいのかも分からない……）

拒絶なら、今すぐにでもしたい。

だが、それ以上に強い衝動が理緒の胸の内でも戦っていた。

（あれからずっと、私は待つてたんだ……）

事件をきっかけに家族は離散し、ずっと続くと思っていた少女の幸せな世界は崩壊した。

捜査官を志したのは当然と言えは当然だった。

（絶対に犯人を捜すと誓ってこの道に進んだ……そして、今こうして私は犯人にすぐ手を伸ばせる場所にいる……!）

身の毛もよだつ任務だが、同時にそれは待ち焦がれていたチャンスでもあるのだ。

「……強要はしないよ」

「……強要はしないよ」

「……強要はしないよ」

「……強要はしないよ」

「……強要はしないよ」

## ■ 9・50 渡嶋待合室

渡嶋の専用待合室は、駅舎の北端に設けられている。入口に掲げられたシンボルマークが目に入らなると、そのまま通り過ぎてしまいそうになる程にシンプルな外観だ。

しかし、ほの暗い室内に足を踏み入れると、そこはもう日常の雑踏からはかけ離れた世界だ。渡嶋と共通の内装が施された細長いフロアにはテーブルセットが幾つも配置され、抑えたポリウムで流れるクラシックと乗客達のさざめきの中、ゆつたりとした時間が流れている。

そんな中、新人パーサーは立ったまま幾つもの視線に射抜められていた。

「ほう、キミが我々の専属パーサーの茨戸君か」フロアの突き当り、男達の中心で一人掛けのソファにどっかりと腰を下ろしたロマンズグレーの男が理緒を見上げる。

（コイツが、社長の黒岩譲治……）

「はい、終点までジョイフル証券の皆様のお世話をさせていただきます」

身長はさほど高くはない。だが、日焼けした顔の下で暗く輝く瞳は、粘着質でありながら同時に酷薄さを覗かせて、相対する者を威圧するには十分だった。

（でも、この目……犯人かどうかは分からないけど……犯罪者の目をして……!）

働ながら有名私大の二部を卒業後、様々な職を経験し、数年のアメリカ留学の後に小さいながらも自分の会社を立ち上げた――というマスコミが報じている経歴は、しかし全てが嘘だ。実際には留年を繰り返した挙句に大学を中退し、実家に帰る事もなくギャンブルで食い繋いでいた。その時期に知り合った非合法な人脈を頼りに詐欺や窃盗を繰り返して、

やがて犯罪行為のカモフラージュのためにジョイフル証券というダミー会社を作ったという所まで調べは付いている。

（私の名前を聞いても何も思い出さなみたい……そうよね……自分の犯した女の娘の名前なんて、覚えていないわけないものね）

理緒の胸元のプレートには『ジョイフル証券ご一行様専属 茨戸理緒』の金文字が刻まれている。海外のVIPも利用する豪華列車に捜査官を潜入させるのに際して唯一鉄道会社側が譲らなかつたのが、捜査官の身元の保証であつたのだが、それに関して言えば叔父の養子になつて苗字が変わつていた事は様々な点で好都合だつた。

（それと、この幹部達……格好は置いておくとして、目付きがどうも一般人じゃないわ……）

蓋を開けてみれば黒岩の他にもジョイフル証券の幹部三人が渡嶋のチケットを買い、慰安旅行と称してこの列車に乗る事になつていた。

（どうする？ こつちもマークした方が……？）

三十代の男二人のうち、タブレット端末をずっと弄っている蛭間翔（ひるま しょう）という男は黒縁の眼鏡を掛け、チェックのシャツを着ている。

もう一人の三十代は、九鬼啓二（くき けいじ）。対照的に証券会社の幹部らしく頭の前から爪先までイタリア製品でコーディネートしている。

（それと、小暮龍吾（こまぐら りゅうご）二十九歳……スカジャンで渡嶋に乗るなんて、どういう育ちをしているのよ？）

つまらなそうな顔でコーラを飲んでる様子が、コンビ二前のチンピラとあまり変わらない。

思い思いの姿勢で寛ぐ男達の周囲には、注意しなければ気付かないような不穏さが漂っている。表に見えない生活の荒みゆえなのか、他人には言えない悪事を働いているゆえなのか、すぐには判断が付けたい類の凄みを理緒は感じ取っていた。

（いや、身元は本部で調べてくれるから、今は黒岩に集中しよう……どちらにしても、誰も私の正体に疑いを持つていないのはラッキーだったわ）

視線を痛いほどに感じながら、理緒はとびきりの笑顔振り撒き、獣達の渴望を煽る。

（となれば、まずはここでしつかりこの顔を黒岩に見せて、私に興味を持たせてやる……！）

周囲には他の乗客達もいる。それぞれに専属パーサーが乗車前の説明を行つてゐる所だが、黒岩は彼女達には見向きもせず理緒ばかりを眺めている。

（いいわ、この調子……銀座で口説いていたというクラブ嬢に似せてもらったけど、思ったよりも食い付きがいいかも……）

緊張のせいか嫌な汗が滲むのを感じてはいるが、思つていたよりは自然に接する事ができている。

（ただ、黒岩と二人きりになるには他の三人も上手くあしらつておかないと……チーフパーサーの鶴飼さんには本部長から話を通つてゐるからいいとして、だけど……新人という事になつてゐるのに、四人も相手にパーサーの業務が務まるのかしら……）

当面の不安は、付け焼刃で身に着けた接客術のせいで身分が露呈してしまう事態かもしれない。

（確かに初日でサンプルを採取という短期決戦のプランを立てたのは、身バレの恐れを減らす意味もあつただけけど……）

渡嶋のサービスの最大とも言える特徴は、専属パーサー制度にある。列車内にはコンシェルジュとパーサーが乗務しているが、コンシェルジュは乗客全員を担当し、それに対してパーサーはそれぞれ事前

に決められた顧客の専属として二十四時間体制で対応に当たる。スタッフや他の乗客の前で露骨に黒崎を誘惑すれば不審に思われるだろうし、かといつて終点までの時間は限られてゐる。のんびりチャンス

を待てる状況ではない。切羽詰まつてゐるからこそ

の今回の特殊任務なのだ。

（難しいな……どう動こう……？）

現場の判断は全て理緒一人に任されている。

（ダメだ……余計な事は考えない方がいい……あくまでも、サンプルの採取のために黒岩をどう誘うかをまずは考えなければ……）

誘惑した先に待つてゐるのは、これまで忌避してきた性行為だ。

どこかで先延ばしにしていた今回の任務における最大の課題を思つて、訓練生の脚は密かに震える。

小学校の宿泊学習から戻つた朝、何度チャイムを鳴らしても父も母も出て来なかつた。

鍵を開けて玄関からリビングに入った少女を迎えたのは、凄惨な光景だつた。

頭から血を流して床に横たわる父と、壁際に押し付けられるようにしてぐつたりと座つてゐる母。そしてその母を囲む覆面姿の男達――。

（お母さんは朝までずっとアイツらにレイプされてた……私の顔を見ても誰だか分からないくらいにおかしくされて……それで……）

長い髪も、白い肌も、まるでシャワーでも浴びたかのようにベツタリと濡れていた。それがどういふ事なのかは、幼い理緒には分からなかつたが、ただ、泣きながら縋り付いた母の瞳に自分がもう映つていないという事実だけはなんとなく理解できた。

（あの日のお母さんの姿は、絶対に忘れない……！）

母がその優しい声で理緒を呼んでくれる事はもう二度となかつた。

（お母さんは、あの後病院の窓から飛び降りて……死んだ……この男、黒岩が殺した……）

母を失つた悲しみはやがて怒りとなり、それが少女の人生を方向付けた。数十倍の倍率を突破して捜査官のバッジを手にし

製作進行中のコミカライズ版を  
特別に試し読み!!

そんな中  
ひよんな事から  
助けた相手が

エルフの国の  
お姫様!

国王様や  
有力者達から  
気に入られた  
ご主人は

セイムラッドの  
宮廷魔導師に  
大抜擢!

エルフなのに  
魔法が全く使えない  
お姫様

ナイア様

ときまるよしひさ  
漫画 **時丸佳久**  
【原作】 磯貝武連 【キャラクター原案】 成海クリスティアーノート

彼女に魔法を  
教えるという  
大役を授かったので  
ありましたのニャ!

エルフの国の宮廷魔導師になれたので  
姫様に性的な悪戯をしてみた  
THE COMIC

解説がヤ



要は  
ちよつどいい時に  
いいように  
使えそうなのが  
転がり込んで  
来たって話  
なんだろうな…

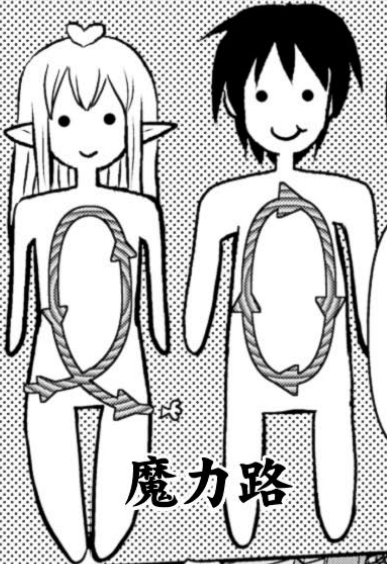
キース様？



あっなんでも  
ないですヨ？

—で  
昨日も申し上げ  
ましたが…

姫様の魔力路は  
異常形成されて  
おります



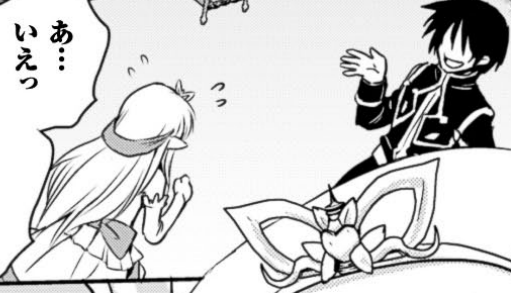
魔力路

これを矯正  
するためには

裸での治療が  
最も効果的  
なのですが…

魔力路とは  
魔力を体内で  
循環させる路みち

ご無理なよう  
でしたら…  
他の方法を  
考えてみます



あ…  
いえっ

大丈夫です  
やります

その路みちを  
流れる  
魔力を  
練り上げ

魔術なんかを  
発動させるの  
ですニヤ！

命の恩人の上に  
魔法まで教えて  
くださっているのに

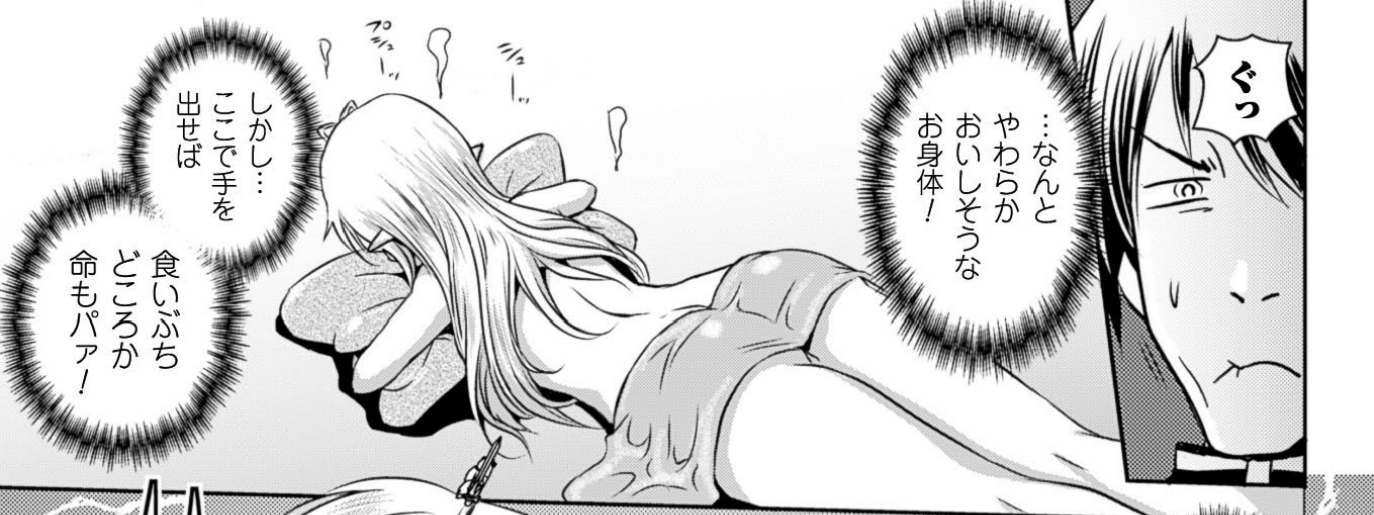
スッ

わがままを  
言つては  
いけません…

できましたあ

では  
始めましょう！





…なんと  
やわらか  
おいしそう  
な  
お身体!

しかし…  
ここで手を  
出せば

食いがち  
どころか  
命もペア!



ひゃっ

では…  
ちよっと  
ヒヤリと  
しますよ

ここはじつと  
ガマンの子だ  
キース!!

大丈夫…  
ですか?

えっ…ええ  
少し驚いた  
だけです…

# 人妻捜査官のあまの

ひとづまさうさかん

～気高い女をドラッグレイプ!～

惨憺な人妻捜査官を襲う奇烈なドラッグ地獄!



小説 / ウナル / 挿絵 / 虫けらホイホイ

NOVEL

ILLUSTRATION

むし

【シーン1…潜入・拘束】

「柘吾、ネクタイが曲がつているぞ。しゃんとしないか」

朝、会社へと出かけようとする夫のタイを柘瀬秋乃は手に取った。

「まったく、仕方がない奴だ♥」

文句を言いながらもその声は弾んでいる。夫、柘吾との朝の何気ないやり取りが秋乃には何よりの楽しみなのだ。（結婚してもうすぐ一年か…今更ながら不思議な気分だな）

部屋の姿見に映る自分の姿に秋乃は苦笑する。ラフなタートルネックのセーター。ズボンに女性用のデニムジーンズ。幾人もの男を誘い、情報を引き出して来た豊富な胸元はエプロンで覆い隠されている。

（まさか任務に関係なく、こんな服を着る日が来るなんてな）

彼との出会いはとある会社への潜入捜査を行った時だった。ただの潜入先と目立たないように過ごしていた秋乃を、何を勘違いしたのかやたらに面倒をみてきたのが柘吾だった。

しつこい男は嫌われると言うが秋乃は柘吾の世話焼きがどうにも心地良かった。そして、少しは仲の良い同僚を作っておいた方が良くかと距離を縮め、友人になった方が自然かと交友を深め、恋人にでも仕立てておけば何かに使えるかと付き合い始めた。

いた。

びつくりした。

自分でも意識しないほど自然にその状況を受け入れていたことに秋乃は驚いた。これからどうしよう、と途方にくれる秋乃だったが恥ずかしげにこちらを見つめる柘吾を見てるとどうでも良くなっていた。

ささやかな結婚式を上げて二人は一緒になった。それから一年、秋乃は人生で最高に幸せな日々を送ることができたのだ。

（…でも、少しだけ寂しいぞ）

慌ただしく草靴を履く柘吾の背中を見つめ、秋乃は目を細めた。

柘吾の勤める会社は結婚の後に業績が右肩上がりし始め、柘吾も目まぐるしい日々を忙殺された。それはとても良いことだと秋乃も思うのだが、夫とのプライベートの時間が持てないのは本当に辛い日々だった。

「じゃあ行つてくるね」

「ま、待つてくれ」

カバンを手に玄関へと向かう柘吾を呼び止め秋乃はその背中に抱きついた。むにゅつと胸元を押しつけてやれば、エプロン越しの乳房が彼の背中に広がる。柘吾の身体は石像のように硬くも可愛いらしく秋乃は思う。

「柘吾…その、今夜は」

「…ごめん。今日も残業で。それに明日から出張になるから多分会社から出張先へ行くことに…三日間」

「そ、そうか。いや、仕方ないさ。仕事は大事だからな」

「だ、だけど！」

振り返つた柘吾に強く手を握られる。その温かさは先程感じた切なさを容易く溶かしてくれた。

「この出張が終わつたら休暇が取れそうなんだ。それにもうすぐ僕達の結婚記念日だね？ だからその…ずっと放つておいてよかったからその理め合わせをしたいというか」

赤くなつていく柘吾の顔。それを見てようやく秋乃も夫の言いたいことを理解した。

「結婚するまでお互いを大切にしようつて約束して、でもそのまますれ違い続けて…だから出張が終わつたその夜を二人の特別な日にしたいんだ」

首から熱い血が登り詰め、秋乃の顔も真っ赤になつていた。もじもじと内股を擦り合わせ、恥じらいの声色のまま答えを返す。

「それは…う、嬉しい♥」

秋乃の答えに柘吾は目を細めた。秋乃もそれにつられてはにかんだ。

「それじゃあ、行つてきます」

「ん。行つてらっしゃい。貴方♥」

ちゅつ。

玄関に立つ柘吾と唇を合わせる。マシマロのように柔らかな感触に秋乃は頬をほころばせた。

の儀式だ。

名残惜しく唇を離す二人。糸を引く唾液が顎へと滴り落ちる。

手を振り出かけていく柘吾。その様を見えなくなるまで見送り、秋乃は部屋へと戻つた。

扉を閉め、鍵をかける。

壁にできた朝方の濃い影に背を預け、秋乃は愛しい人と思う。

（もう少し…したかったな…）

唇に残る夫の感触にそつと指を触れる。熱い感触がじんわりと自身の身体に混じつていくのがわかる。

その熱さに導かれるまま、下腹部に手を伸ばしていた。一年間の疼きが噴出したような熱さに苦笑する。

（キスだけでこんなに…本番ではどうなつてしまうんだ…）

自分でも信じられないほど昂つた身体が慰めを求める。その気持ちをもつと抑え、秋乃は自室へと向かった。

柘吾にも教えていないタンスの中の扉。そこに隠された黒いタイツを手に取り、秋乃は大きく息を吐いた。

「…行くか。この世から外道達を絶やすために」

ポニーテールの紐を解き、腰まで届く長髪を背に広げる。再び瞳を開いた時、その眼光は戦場の兵士と変わらぬ鋭さを湛えていた。

入捜査官。それが秋乃のもう一つの顔だった。

特殊犯罪捜査部。特捜といえは思い当たる人も多いだろう。違法薬物や組織犯罪など通常の捜査では手の届かない危険な案件を扱う機密組織。

噂こそ耳にしても、その実態を知ることには困難を極め、世に出回る情報ほとんどが想像力を駆使した創作物にすぎないといういわくつきの組織だ。

そんな組織だからこそ、所属する人間も並ではない。知力・体力・精神力全てに優れ、過酷な審査をくぐり抜けたスペシャリスト達。その中でも秋乃は危険な潜入捜査を行うエリート中のエリートだった。

「カテドラルの支部を発見した」

数日前、対策部長から聞かされたのはそんな話だった。

カテドラル。世界を股にかけて活動する巨大犯罪組織。違法薬物の製造、人身売買、武器の密輸に至るまで世界規模の犯罪の裏には必ずその存在があるという。

「なるほど。私を選ばれたのはそういった理由でしたか」

「その通りだ。君はかつてカテドラルの支部を一つ壊滅させている」

「私は潜入捜査をしただけです。手に入れた情報の一部が事件の解決に繋がったにすぎません」

「その力を発揮して欲しい。何せこの一件はトランスに関わることだ」

「トランス？」

聞き慣れない単語に秋乃は眉を顰めた。

「犯罪者が求める物はいつの時代でもそうは変わらない。金、武器、そしてドラッグだ」

「……違法薬物、ですか」

「それもとびきりのな。何せヘロインの数倍の快感を約束するというふれこみだ。カテドラルも鼻息荒く、そして慎重に開発しているようだ。おかげでその実態はまるで掴めていない」

「ヘロインの数倍……それは確かに」

薬物の王と呼ばれるヘロインは、耳かき一杯の量で一生分の快感を得ると言われている。そのヘロインよりさらに強力なドラッグとなればもはやその快感は想像すらできない。

「そんなものをばら撒かれるわけにはいかん。そのためにも本格的な生産が始まる前に捜査のメスを入れなければならぬのだ。そこで」

「私とその支部に潜入し、トランスについての情報を得てくる、と」

上司は深く頷いた。

「無論、危険が伴う任務だ。もし見つかれば身の安全は保障できない。それにトランスには未だ謎が多い。ただの薬物ではない、何か特別な作用があるという情報もある」

「問題ありません」

明瞭な秋乃の答えに上司は豪快な笑い声を上げた。

「君ならそう言うと思っていたよ。し

かし残念だ。君ほどの人間がここを去ってしまったとは」

「もう決めたことですから。次の仕事で引退をする」と

左薬指にはめた指輪の感触。それを確かめ秋乃はわずかに顔を緩める。

「確かにいつまでも危険な仕事はできません。子供はいつだね？」

「……部長。セクハラです」

冷たく言い放ち、秋乃は書類を手にした。

（待っていてくれ。柊吾）

そして数日後、作戦決行の日には来た。奇しくもそれは、柊吾が出張へと出かけるその夜だった。

「……柊吾が帰って来たらご馳走を用意しないと」

夜のビル風に身を晒しながら、秋乃は眼下のビル群を見る。その中心周囲のビルによって巧妙に隠された建物こそカテドラルの支部だ。

「柊吾、行ってくる」

左手を握り締めれば手袋越しに結婚指輪を感じ取れる。それだけで何だっでできる気持ちだった。

秋乃はアタッシュケースからワイヤーガンを取り出す。狙いはビルの屋上だ。そこに向かい、ワイヤーを撃ち出せば、空の道が生み出される。

「……よし」

最低限の装備を背負い、秋乃はワイヤーを伝っていく。

もし手が滑れば怪我では済まないが

秋乃の動きによどみはない。滑るような勢いでワイヤーを渡り切り、足音を立てずに排気口のダクトを指す。大の男でも一苦労するであろう重厚な蓋を持ち上げれば、ビル内部へと続く侵入経路が姿を現した。

（やはり、鈍っているか）

敵の本拠への侵入を前に、秋乃は痺れる指先をほぐした。

柊吾との幸せな日々、それが彼女の身体をわずかに衰えさせていた。無論それは誤差と言っていいほどの薄い変化だ。だが、最終的に物を言うのもこの変化だと秋乃は知っている。

（気を引き締めなければ、食われる。今は任務に集中せねば）

気を引き締め、秋乃はダクトへと身を躍らせた。しなやかに鍛えられた美身がぐねり、ダクトの中を進んでいく。

ビル内を迷路のように張り巡らされた通気口だが構造さえわかっければ迷うことなどない。

「おい。反町さんはどうした」

「ああ。今は例の装置の部屋に」

ときおり聞こえる話声に緊張感はない。潜入には気づかれていないと判断し、秋乃は奥に隠された部屋を指す。

「——警備は二人か」

蓋の隙間越しに目標の部屋を視認した。部屋の前には見張りが二人、どちらも胸元に銃を吊っているようだ。談笑こそしているものの、その佇まいに油断はない。

ちらりと時計の時刻を確認する。



「……三、二、一」  
爆発音。ビル全体を震わせる振動に見張り達も浮足立つ。別働隊が陽動をかけたのだ。

断続的に続く振動に見張りの一人が駆け出した。もう一人はその場を動かさなかったが敵が単独ならばやりようはある。

「な、お前は!？」  
通気口から飛び出した秋乃に目を白黒させる見張り。その後頭部にしなやかな右足が叩き込まれる。秋乃にとってこの程度の相手を制圧することなど、釘を打つより楽な作業だ。

すぐさま扉へと近づき、腰に装備していたサバイバルナイフを抜く。そのまま壁のパネルに切っ先を突き立て、鋼板をベニヤのように裂いた。露出した認証装置にモバイルコンピュータのケーブルを接続、開錠プログラムを起動して暗証コードをブレイクさせる。一分を待たずしてカテドラルの防壁は自ら口を開けた。

後は経験と勘だ。無数に存在する保管庫の中から当たりを探し当てねばならない。時間はわずか十分。それを過ぎれば兵士が戻ってくる。素早く、しかし慎重に書類の束を確認していく。「これか」

遂に見つけたトランスの文字。その文章を頭に叩き込みながら、素早く文章を読んでいく。

「……今日のドラッグは保育園でも作れるというが、これだけ簡単に製造

されては犯罪者が減らないわけだ。それにこの効能は——  
なるほど前評判は嘘ではなかったようだ。これだけの効果ならヘロインも過去の物にできるに違いない。

「……でも、まだ何か」  
そこに書かれた内容に違和感を覚える。どこか歯抜け。いや、重大な部分をわざと隠しているような印象だ。刻々と時間は過ぎていく。安全を期すならもう引き上げなければならぬ。

（……だけど、ここで終わるのは）  
左手に感じる結婚指輪の感触。それがわずかな欲を引き出した。これが最後と決めた仕事をやり遂げたい。胸を張って妻としての生活を始めたい。

三分だけと心に決めた。  
手早く保管庫を漁り、トランスの文字を探す。久々に感じる焦りの感情に手汗がにじむ。

嚴重に保管されたファイルが手に触れた。瞬間これだと確信する。秋乃はそれらをかバンに詰め部屋の扉へと向かう。三分は過ぎていなかった。

「残念だったな。秋乃」  
ぶしゅっ!

扉が突如閉まったかと思うと、霧吹きのような音が部屋中から聞こえた。しまったと思う間に身体が利かなくなり、秋乃は床に倒れ伏した。

「気分はどうだ? 棚瀬秋乃捜査官」

ガンガンと頭に男の声が響く。ひどい倦怠感のまどろみから意識が浮かび上がると、強烈なライトの光に目が眩んだ。

「ここは……、っ!？」  
動かない手足。むつとむせ返る雄の匂い。周囲から降り注ぐ下劣な視線に秋乃は現状を即座に把握した。

（怪我はさせられていないようだが、身動きが取れない。くっ、こんな奴らに!）

秋乃の身体は手術台のような器具に拘束されていた。両手足は軽く開いた状態で固定され、胸部と股間部を無防備に晒されている。

そんな秋乃の痴態を舐めるように見つめるのは拘束台を取り囲むゴロツキどもだ。値踏みするようなその表情がどこまでも憎らしい。

「……なんだここは。動物園か?」  
「へっ。威勢がいいな。気に入ったぜ」  
秋乃の一言に声をかけた男が嗤う。

サングラスをかけ、金の髪を逆立てた大柄の男だ。黒いジャケットの下には圧縮したゴムのような筋肉が浮かび上がっている。周囲の反応を見てもこの男がこちらのリーダーに違いない。

「反町さん、これからどうするんで?」  
「反町……だと?」

その名を秋乃も知っていた。ドラッグ部門を担うカテドラルの幹部の一人。そして底抜けに下卑た趣味を持つことでも有名な男だ。

「ほう。俺を知っているのか。流石は

政府のエリートスパイ様だな」

「ああ……最低のレイブ魔だとな」  
「そりゃ的確な評価だ! ならその通りの仕事をさせて貰おうか」

獣のように歯をむき出しにし、反町は顎をしやくつた。それに応じ、一台の台車が部屋へと運び込まれた。

白い布の上に並べられるのは見るもおぞましい拷問器具の数々だ。中には秋乃ですら使い道のわからない物もあった。

「情報を話すか? 全てを話すなら可愛がつてやるぞ?」

「死ね。変態が」  
「いい答えだ。俺が世界で二番目に好きなのは、お前みたいな強気な女だぜ」

鋭い敵意はあつさりといなされ、せせら笑うように台車へと向かう反町。並べられた器具を見せつけるように一つ一つ持ち上げる。たつぷりと時間をかけて反町は秋乃に相應しい器具を選り出す。

「そして、一番好きなことはそんな強気な女を雌に墮とすことだ!」  
反町が手にしたのは——

流腸器だったーシーン2 P82へ

注射器だったーシーン3 P86へ

## 【シーン2…排泄屈辱】

「お前のような女にはこいつがいい」  
そう言って反町が持ち上げたのは、  
ペットボトル大のガラス流腸器だった。

「そ、それは！」  
思わず感情を表に出してしまつた秋乃。その反応に反町の顔に深い皺が刻まれる。

「綺麗な女はお通じが悪いって相場が決まつてるんだよ。お前も澄ました顔していても、家じゃ便器に跨って緊張つてゐるんだらう？」

「な、なにを言つて！」  
強い声で言い返しながらも、秋乃の頬には朱が入つていた。この歳頃の女性にとつて便秘は頭を悩ませる問題だ。そして秋乃もまた数日間の便秘を抱えていた。

「さて、それじゃあそろそろ始めるとするか。捜査官様の脱糞ショーだ！」  
びりりっ！ ぶちぶちっ！  
タイツスーツの股間部を力任せに引き裂かれる。入り込んで来た冷たい外気に秋乃の腰がびくんと跳ねる。

「おいおいノーパンかよ。エロイねえ」  
開けられた穴の中に下着の姿はなく、汗の滴る肌を中心では陰唇とアナルがヒクついていていた。

そこは汗によつてしっとり濡れており、まるで男を誘う淫猥な花弁のようだった。

「敵地に潜入するつてのに下着もつけ

ないとは、捜査官殿はとんだ変態だつたつてわけだ」

「ち、違ふ！ これは機能性を重視しているだけだ！ 他の潜入捜査官も同じで、私が望んで履いてないわけではない！」

反町の言葉に慌てて反論する秋乃。そんな言葉に肩を竦めて、反町は侮蔑したように口元を釣り上げる。

「なら他の潜入捜査官の皆様も揃つてノーパンスーツつてことか。特捜の女は変態だらけだな！」

再び湧き起る嘲笑の嵐。自分だけならず命を張る仲間を馬鹿にされ、秋乃は歯噛みする。

「そら！ 物欲しそうにヒクつくアナルにたつぷりとご馳走してやれ！」

反町が流腸器を部下に投げ渡す。それを受け止めた部下が唇を舐めながら、秋乃へと向かつてくる。

ぐぶつ。  
流腸の先端がアナルへと押し込まれる。そのまま一抱えもある流腸のシリンドラーがゆつくりと押し込まれた。

「んあ……ああ……くっつ！」  
じゅるじゅるっ！ ぶじゅぶっ！  
わざと空気を混じらせ卑猥な音を響かせてくる。腹内に溜まっていく生温い感触。それが腸内に満ちた瞬間、まるで炎に変わったような熱さとなる。

「高いドラッグをふんだんに使つた特製ブレンドの流腸だ。それを尻穴で飲むのはキクだらう？」

(下、ドラッグだと!?)

途轍もない一言に秋乃は目を見開いた。腸の吸収率は非常に高い。そんな所に薬物を注ぎ込まれたらどうなるか。

「おいおい、あんまりぼうつとするな。次がつかかえてゐるんだからな」

「つ、次……？」  
見れば秋乃の前には流腸器を持つた男が列を作つて待つていた。その数は十を軽く超える。

「な、なっ！ ひぐっ！」  
驚く暇も与えず、先頭の男が流腸器を差し込んだ。

ぶちゅううっ！ じゅぶうううっ！  
「くうあ……あ……ああっ！」

先に入った分を押し込まれ多量の流腸液が追加される。目に見えて秋乃の腹部は膨らみ歪な曲線を描き出す。

「まだまだおかわりがあるぞ。しつかり食いな」

「ま、待て……っ！ 待つて……っ！ ぶぐううううっ！」

制止の声を押し潰すように次の流腸が注入される。その数が四本目に至り、秋乃は罵声すら上げられなくなった。

「ま、待てえ！ も、もう……入らない……は、腹が裂けるうううううっ！」

「お前も捜査官なんだから？ 媚薬流腸四本くらい余裕だよな？ やれ！」

「や、やめ！ おっほおおおおっ！」  
ぶじゅううううううううううっ！  
強い抵抗を示すシリンドラーを力づくに押し込まれ、四本目の流腸液が注ぎ込まれた。カッと目を見開き背を反らせる秋乃。

その全身は汗でびしょびしょに濡れ、スーツをぬらぬらと輝かせている。

「どうだ。ドラッグ流腸二リットルを飲み込んだ感想は。漏らす前に情報を吐いた方がいいんじゃないか？」

一転して優しい口調で語りかけながら、反町は秋乃の前髪をかきあげた。恐ろしい外見に反してその手つきは美容師のそのように優しい。

その心地良さにわずかに感情が揺れるものの、意地の一念で反町の甘言を拒絶する。

「だ、誰がお前なんかいいいいっ！」  
その言葉に反町は肩を竦め、部屋端に置かれたソファへ腰を下ろした。

「ま、精々頑張りな。我慢しすぎて破裂しないようにな」

「どれだけ持つと思う？ 俺は十五分に賭けるぜ！」

「俺は三十分だ！」

「大穴狙いだな。俺は無難に二十分だ」  
げらげらと笑いながら反町たちはアールコールのボトルを開け、タバコの上に火を点ける。そして流腸に悶える秋乃を肴に賭け事を始めた。

(人を賭けの対象にするなど低俗な！ 誰がこいつらなどに負けるものか！ 私は柘吾の所に帰るんだ！)

脳裏に浮かぶ柘吾の笑顔。彼の元に帰るといふ気持ちさえ持ち続けられどんな責め苦にでも耐えて見せよう。

「ひぐっ!!」  
ぎゅるううううっ！ ぐううううっ！  
決意も新たにした早々に、腹痛が津

麻薬取締官  
こいずみあつこ  
小泉敦子よ



なっ?!

薬物取締法  
違反の現行犯で  
逮捕する

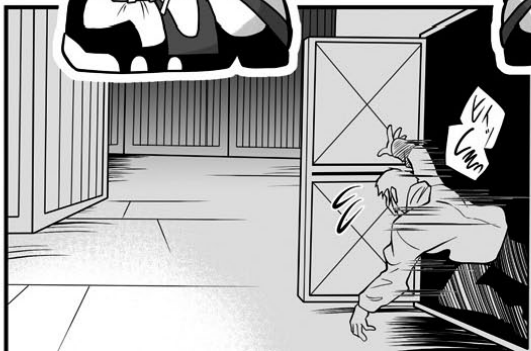
悪事を暴き、力で制す!

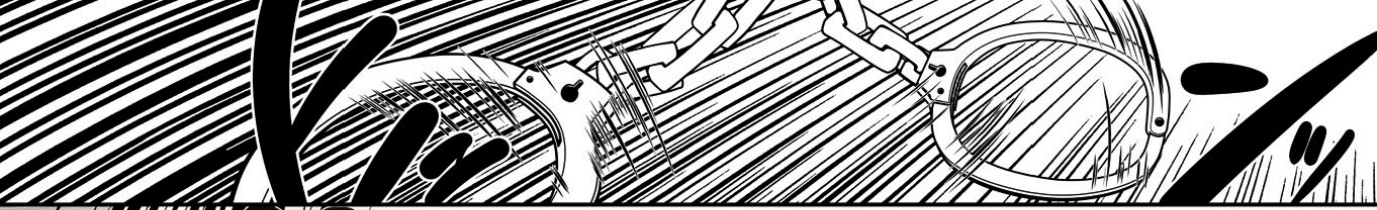
# 麻薬取締官 小泉敦子

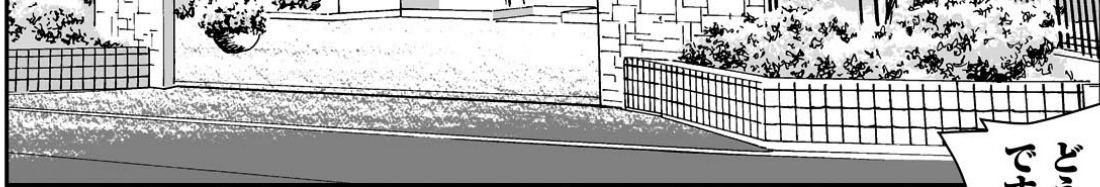
まやく  
とりしまりかん  
こいずみあつこ

漫画 **ぱふえ**

～恥辱の捜査～







どういふこと  
ですか!?



こんな早く  
釈放って!!



仕方ない  
じゃない…  
上が許可した  
んだから



でもさ  
聴取は  
もうすんだ  
んだし…

それで行方  
消されてちゃ  
大問題で  
しょうがッ



何をそんなに  
焦ってるの?

く…ッ  
あ焦って  
なんか!



結構です

ば

私一人で捜査  
しますから!

この私が  
製造元を  
押さえるしか  
ないわね…

服盛られた  
だなんて…

それ…も  
こんな

……ッ



は…  
はあ

密売ルート  
を  
辿って

く…ッ  
言えるわけ  
ないじゃない

ふざけた  
効果の…

奴が仕入れた  
人物は…

あ…  
へへっ  
金なんか  
よりもね

いくら？

まあその…  
出す物出して  
くれれば？

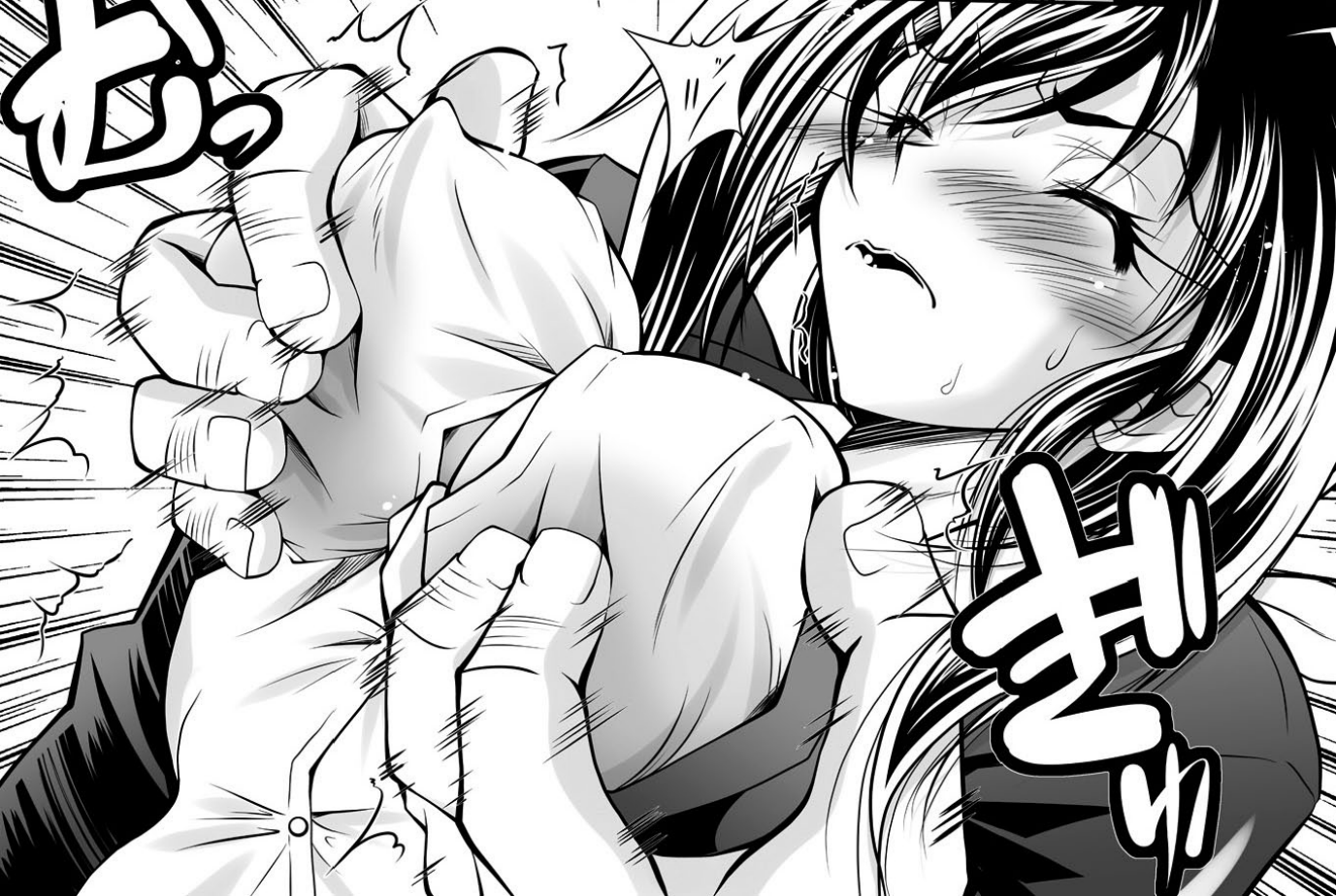
小泉サン  
また…  
情報ならもう  
教えたでしょ



あせ  
貴様!  
そついうのは  
NGだという  
約束だろ!

体で払って  
もらいたいん  
ですよわ

ああ  
でもよ  
双方合意なら  
いいかなって



お

あ

ぞん♡だっ♡

顔見りや  
わかるぜ  
ヤリたくて  
たまんねえ  
ってツラだ

はな…  
せえ

クスリの効果が  
強くなってる!?

私にこんな  
ことをして  
どうなるか  
分か…て…

まだした  
情報はないし  
今日は口だけ  
でいいぜ

は…あ♡  
力が入ら…  
な…ぐうッ

胸を触られた  
だけで…

こんなに感じ  
させられ…る  
なん…て…え

な何!?

いきなり  
この状況は!?







男を挑発する妖艶なボディースーツが  
美人捜査官の肉体を快樂の海へ誘う……！

潜入エージェント

PEIGA MISA THE SPECIAL AGENT

麗身美紗

裏切られた  
密着ボディースーツ

小説 NOVEL あおいむらまさ 蒼井村正 挿絵 ILLUSTRATION あきつき 秋月からす

濃厚な潮の香りを含んだ初夏の海風が、深夜の倉庫街を吹き抜けてゆく。

接岸した貨物船の荷下ろし作業で昼間は賑わっていた港の倉庫街も、今は閑散としており、オレンジ色のナトリウムランプが、赤煉瓦造りの壁を寂しく照らしていた。

「α、ポイント3に到着、対象周辺に警戒反応は見られず」

倉庫の屋根から、眼下の薄暗い路地を見下ろした彼女は、頭部に装着した小型カメラ付きインカムのマイクに囁いた。

彼女の名は、麗牙美紗禁呪封印局の捜査エージェントだ。

夜の闇を練り固めたかのような、艶やかな黒髪をポニーテールにまとめた、伶俐な顔立ちの美女であった。

美紗が身にまとっているのは、ボデイレインにピッチリと密着した、ラバーボンデージのような素材感のボデイレイン状コスチュームで、右手には特殊な麻痺弾を装填した拳銃を握っている。

闇に溶け込む色合いのスーツ表面には、プロテクターやベルトなどの外装部品が一切付いておらず、ボディペイントか？と疑いたくなるかのような密着具合で美女の肢体を包み込んでいた。

量感に跳んだバラストから細くくびれたウエストを経て、形良く張り出した骨盤から、見事に鍛え上げられた太腿へと続く優美なラインは、成熟した女性の色香と、野生的な肉体美をこれ見

よがしに誇示していた。

おそらく、ミリ単位の厚みしか無いであろう極薄生地は、重力に挑むかのように突出した釣形鐘型のバラストを真空パック状態で包み込み、芸術的な曲面で構成された乳房の輪郭とポリウレタン感を除いたせている。

過剰なほどに密着したボデイレイン素材は、乳房に劣らず肉感的な尻の谷間にも深く食い込み、鋭角に切れ込んだ股間にもミッチリと吸い付いて、秘めやかな部分の縦筋さえもあからさまに浮き出させていた。

「……倉庫扉前の見張りは二人。いずれも、サブレッツァ付きのアサルトライフルで武装しています」

周囲の様子を油断無く探りながら、フェティッシュな密着スーツ姿の美女は、淡々とした口調で追加報告を入れる。

感情の揺らぎや緊張感の欠片も混じっていない口調は、あくまでも事務的で、ややともしると機械合成された音声のようにさえ感じられてしまう。

「αに指令、速やかに見張りを排除せよ！」

「了解！ これより排除行動に移ります！」

極上の肢体を密着コスチュームに包んだ美女は、インカムから聞こえた命令に応答すると、フツ！と小さく息を吐き出しつつ、倉庫の屋根から無造作に身を躍らせた。

そのまま落下するはずの女捜査官の足裏が、倉庫の壁面にピタリ、と吸着

する。

重力の法則に反した不思議な挙動で壁に貼り付いた女捜査官は、まるで地を駆けているかのような、危なげの無い足取りで倉庫の壁面を駆け下りてゆく。これが、彼女が身にまとっている特殊スーツの能力であった。

スニークスーツ、『幻夜』と名付けられたコスチュームは、着用者周囲数十センチ以内の重力を限定的ながらも自在に制御する機能を持っており、垂直の壁面であっても、まるで地上を歩いているかのように移動することができるのだ。

男たちの真上に達すると同時に、美紗はフワリ、と宙に舞いつつ、空中で発砲した。

麻痺弾を撃ち込まれた二人の男は、一撃で意識を失い、糸の切れた操り人形のように倒れ伏す。

「見張り二名の無力化完了！ 突入チームはポイント3に移動せよ！」

意識を失った見張りを手早く武装解除して拘束しつつ、美紗は簡潔に指示を出す。

「了解！ 突入チーム、ポイント3に移動開始する！」

黒いタクティカルウェアに身を固めた集団が音も無くやってきて、素早く展開した。

「後はお任せします」

突入チームのリーダーに事務的な口調で告げる美紗の扇情的なボンデージボディに、突入班員からの盗み見るような視線がチクチクと突き刺さってくる。

る。

（まったく、こんな緊迫した状況でも、男たちは女の身体に興味を持ってしまふのね……。男って、本当に、度しがたい程に淫らな生き物だわ……）

豊かなバラストの奥から湧き上がってくる男性嫌悪の感情を押し殺し、つとめて無表情を装いつつ、美紗は思う。

密着度が強く、通気性の悪いコスチュームの内部に籠もる熱気と湿気を嫌って、美紗はスーツのフロントジッパーを下腹の辺りまで引き下げていた。深いV字型に開かれたフロントジッパーの狭間、肉の内側から白い燐光を放っているかのような女の素肌が垣間見えている。

過剰な果肉の圧力でジッパーを押し開いて、今にもこぼれ落ちそうになっている爆乳と、しなやかに鍛えられた腹筋の輪郭を浮き出させた色白な腹部の中央で、エロチックに窪んだ臍穴までもがさらけ出されていて、男たちの視線を強烈に誘引してしまうのだ。

特に今夜は蒸し暑かったので、美紗の色白な肌は桜色に上気してしっとり汗ばみ、明かりを艶めかしく照り返し、魅了の魔力でもかけたかのような色香を放っている。

（挑発しているように見えるかもしれないけれど、隠形術を使うと身体の内面に熱が籠もってしまうのよ！）

胸の内て言いつくす美紗。彼女が習得した隠形術の能力は、全身に不可視の結界を張り巡らせることによって、視覚や聴覚による探知はもち

ろんのこと、サーマルセンサーや監視カメラなどの機械でさえ探知できなくなるという高度な術だ。

今回も、その能力をフルに駆使して、倉庫街周辺に設置された監視カメラに欺瞞映像を流し、要所に配された見張りたちを排除して、突入のお膳立てを整えたのである。

しかし、隠形術の発動はオンカオフのみ、さらに、発動中は発汗や皮膚呼吸といった代謝機能までもが大幅に抑制される為、体内に熱が籠もってしまうという弱点もある。それ故、術の解除後は、熱中症のような症状を起こさぬよう、身体を早急にクールダウンする必要があるので。

隠形術解除後の美紗が、スニークスーツのフロントジッパーを大きく開いて肌を露出しているのも、少しでも早く肉体を冷やす為であった。

「……では、私は倉庫の屋根から周辺警戒を続けます」

大きく開いたフロントジッパーの内部にまで潜り込んでくる男どもの視線を振り払うかのように背を向けた女捜査官は、高々と跳躍し、倉庫の屋根から眼下を見下ろす。

「突入ッ！」

隊長の号令一下、ドアを打ち破って突入した部隊が、倉庫内にいた全員を瞬く間に制圧、確保するのを確認した女捜査官は、夜空に溶け込むかのように姿を消した。

その数日後、シックなビジネススー

ツに身を包んだ麗牙美紗は、禁呪封印局日本支部の廊下を颯爽と歩んでいた。

コソコソと規則正しい足音が廊下に響く度に、タイトスカートを丸く張り詰めた肉感的なヒップが左右にくねり、形良く盛り上がったスーツの胸元で、爆乳がその存在を誇示するかのよう上下に揺れ弾む。

「麗牙美紗、参りました！」

「入れ……」

カメラ付きインターホンの前で告げると、電子ロックと結界で二重に閉じられていた扉が開き、禁呪封印局のエージェントは室内に足を踏み入れた。

「早速だが用件を伝えよう。先日の作戦で捕らえた密売人から、有力な情報が得られた。デイスブレイを見てくれ」

美紗が社交辞令や余計な世間話を好まないことをよく知っている上司は、

デイスブレイに情報を表示しながら、単刀直入に用件を切り出す。

「……これは!? 大使館で、禁忌呪物の密売オークションが定期的に開催されている、ということですか!」

デイスブレイに表示された供述書の内容を見た美紗の目が、軽く細められる。供述書の内容はとある新興国の大使館で、親善パーティーに見せかけた呪物の闇取引が行われているという、

にわかには信じがたい情報であった。「信頼できる情報なのでしようか? 強硬手段に踏み切った後で、偽情報であると判明した場合、国際問題になると思われませんか?」

女捜査官は、あくまでも淡々とした

口調で懸念を指摘する。

「だからこそ、君の出番なのだ。スニークスーツの機能と、君の隠形能力をフル活用すれば、誰にも見とがめられずに調査が可能だろう?」

「……」

幾多の難任務を遂行してきた美紗は、無言で頷く。

「麗牙美紗、今夜、大使館で行われるパーティーに、外交官に同伴する通訳として潜入し、調査を命じる。命令書に目を通しておいてくれ」

「……任務、受理しました! 準備がありますので、失礼いたします」

携えてきたタブレットに命令書と大使館の間取り図等の必要な情報が転送されていることを確認した美紗は、敬礼し、クルリと背を向ける。

「あ、そうそう。もう一つ連絡事項があった。技術部からも、スニークスーツの強化調整が完了したという報告があった。今回の任務は、強化型のスニークスーツを着用してくれ」

退室しようとしていた美紗に、上司が声をかけてきた。

「スーツの強化調整を依頼した覚えはありませんが?」

眉を怪訝そうにひそめつつ、美紗は振り向く。

「技術部職員からの提案で、重力制御機能の強化と反応速度の高速化ヴァージョンアップを行ったそう。後で調整項目を確認しておけ」

勝ち気な女捜査官の挑発的なバストに視線を吸い寄せられてしまいつつ、

上司は少しきまり悪げに言った。

その夜、パーティー会場となった大使館には、男装の麗人を思わせるスニークに身を包んだ美紗の姿があった。

既に、スニークの下には、強化調整を終えたスニークスーツ、幻夜を着込んでいる。

(重力制御の強化なんかより、通気性をよくして欲しかったわ……)

密着度の強いコスチューム内部が既に蒸れ始めているのを不快に思いながらも、美紗は流ちょうな外国語を操って、通訳という、かりそめの役柄を見事にこなしていた。

頃合いを見てパーティー会場を抜け出した美紗は、隠形術の術を発動し、スニークスーツ姿になると、大使館の奥へと潜入してゆく。

(大使館の地下に、こんな秘密の地下施設があるなんて、怪しすぎるわ……)

彼女の存在にまったく気付かぬ警備員と共にエレベーターに乗り込み、地下階にやって来た女捜査官は、コンクリート打ちっ放しの殺風景な通路を進み、その先にある空間へと到達する。

(禁忌呪物取引の決定的な情報を掴んだら、突入依頼を出せば一網打尽ね……)

隠形術、まだまだ、余裕でもつわ) 身体の奥にジワジワと溜め込まれている熱気を感じつつ、美紗はオークション会場を一望できる舞台の上へと移動し、獲物を狙う牝豹のような四つん

這いの姿勢で待機する。

ることのない彼女だからこそ可能な、大胆極まりない待ち伏せであった。異変は、その数分後に起きた。

「ソッ！ 何……なの!!」

いきなり、身体がズンッ！と重くなり、美紗は四つん這いの姿勢から前のめりに突っ伏してしまふ。

床に押し付けられた乳房がギューンッ！とひしゃげ、尻の谷間もあからさまな豊臀を高々と掲げた、獣の交尾を思わせる体位のまま、身動きが取れなくなる。

「うっ……クッ！ まさか、重力制御機能の誤作動!! こんな重要な局面で！ だから強化調整なんて不要だって言ったのに！」

重要作戦遂行前に勝手なヴァージョンアップをした技術部の連中を罵りつつ、床に貼り付いてしまった身体を必死に引きはがそうとするが、暴走した重力制御の呪印は、たわわなバストを押し潰さんばかりの強さでコンクリート床に密着させて、女捜査官の動きを封じている。

「くは！ んぐ……んむうううッ！」

ピッチリスーツの美女は、粘着式のゴキブリ捕獲器に捕らえられた虫のような、無様な姿で苦悶する。

身悶える度に、床に押し付けられた爆乳が、むぎゆり、むぎゆりとひしゃげ、息苦しさと同時に妖しい痛快感を発生させた。

ボディペイントと見間違えてしまいそうな極薄のコスチュームは、乳先でツンと尖り勃った乳首を守ってくれず、

コンクリートのざらついた感触で、敏感な突起を責め苛む。

「胸……が、擦れて……くうううううソソソッ！」

普段の無表情さからは想像もできぬ、必死の形相を浮かべた美紗は、両腕に力を込め、腕立て伏せの要領で上体をどうにか引き起こすことに成功した。

過剰な圧迫から解放された爆乳が、ブルンッ！と胸板で揺れ弾む。

「く……ハアハアハア、ほっ、本部に緊急連絡！ スーツの機能にトラブル発生！」

四つん這いの姿勢で床に貼り付いたまま、緊急連絡を入れようとするが、インカムからの応答は無い。

「……インカムも通じない!! まさか、こつちも故障しているの？ 技術部の奴ら、この任務が終わったら、絶対にとつちめてやる！」

クールな美貌を歪めながらも、美紗はスーツの重力制御機能を解除しようと奮戦する。

しかし……

「……クウウッ！ 穩形の術が……もう、限界……こんな状態で術が解けたら……」

胸部を圧迫された不自然な体勢を脱する為に体力を消耗しすぎたせいなのか、予想していたよりも早く発動維持の限界が来ようとしていた。

すぐ側には、何人もの武装警備員が待機している。

格闘能力には自信のある美紗であったが、身動き取れない今の状態では、

文字通り、手も足も出せそうに無い。(身体が熱い……燃えてしまいたいそう)

スニークスーツの内部に籠もった熱気が、美紗の肉体を内部から責め苛む。

特に強い熱を帯びているのが、先ほどまで床に押し付けられて歪に変形させられていた爆乳であった。

極薄の生地越しには、コンクリート床に散々擦り付けられたせいで勃起を強要された乳首の尖りがあからさまに浮き出し、炎に炙られているかのような疼痛を発している。

(乳首……痛いの……疼くッ！ ダメ……精神集中を乱しちゃ、ダメッ！)

勃起乳頭から発する痛感の奥に、ゾクリとするような妖しい疼き感じながら、密着コス姿の美女は全身全霊を振り絞って穩形術を維持している。

苦悶すること数分、肉感的な女性の内側で渦巻いていた熱気が、導火線のように背骨を炙り焼きながら、ジリジリと頭部へと迫ってきた。

(ダメ……集中が途切れたら、術が解けてしまう！ 身体、動いて！ インカム、復旧して！)

祈りも虚しく、限界がやってきた。

「あ……あああッ！ 解けるッ！」

悲痛な声を上げた美紗の肉体を包んでいた不可視の結界が消失し、後背位の姿勢で床に貼り付いた密着ボディが人目に晒される。

「うお！ 何だ!!」

「女!! 侵入者か！」

官を取り囲んだ。「おやおや、もう、こんな所にまで潜入してましたか。さすがですね」

幾つもの銃口を突きつけられた美紗に声をかけながら歩み寄ってきたのは、ブランドもののスーツを着こなしした細面の男だった。

見た目の年齢は三十代後半。整った顔立ちをしてはいるが、瞳の奥には常に酷薄そうな光が宿っている。

「お前は確か……加羅見!!」

禁呪封印局の重要手配者リストで見たことのある男の顔を上目遣いで覗みながら、美紗は声を絞り出した。

「ハハハハッ！ ポクも随分有名になつちやつたようですね。それにしても、これは面白い獲物がかつたものだ。あなた、最近、闇社会で噂になつている、姿無き捜査官ですよな？」

加羅見の軽口には付き合わず無言のままの美紗は、状況を打破する策を練り続けている。

(スーツの機能は解除できず、外部との連絡は取れず、身体も動かさない……。今は、どんな辱めにも耐えて、逆襲の機会を待つしか無いわ！)

禁呪封印局の捜査官は、胸の奥から湧き上がってくるどす黒い不安を押し殺し、反撃の為の力を温存することを自分に誓う。

「それにしても、試作型スニークスーツ、『幻夜』なかなか興味深い製品ですね」

会話に応じてくれない美紗に、重要手配の男はなおも話しかけてくる。

「!? なぜ、そのコードネームを知っているの!?」

ごく一部の者しか知らぬはずの開発コードネームを聞かされた女捜査官は、思わず声を荒らげてしまう。

「ようやく話に乗ってくれましたね」

ニンマリと美紗に微笑みかけながら、加羅見は話を続ける。

「高伸縮性のハイテク強化擦糸に、分子レベルで呪印を刻み込んでコスチュームを作る……科学と呪術の融合した、実に素晴らしいアイデアですよ」

「幻夜の素材に組み込まれている呪印処置は、『重力制御』ですか? 何やら不調を起こしているようですが、そのおかげで神出鬼没のあなたを捕獲することができましたよ。麗牙美紗さん」

「私の名前まで……そう……内通者が居るのね!」

悔しげに唇を噛む美紗の中で、全ての事象が最悪の形で繋がる。

「幻夜の機能不全も、インカムの不調も、全て仕組まれていた? それなら、この状況も……まさか……!」

「それは、ご想像にお任せします。私たちの組織は、あなたを歓迎しますよ」優雅に一礼する加羅見が浮かべた笑みは、最上の生贄を前にした悪魔のようであった。

「さて、今夜のスペシャルゲストである美紗さんに、ウエルカムドリンクを差し上げようと思うのですが?」

加羅見が目配せすると、護衛の連中が数人の男性を連れてきた。

全裸の男たちの顔には、あからさま

な欲情の表情が浮かび、その股間では、恥知らずなまでに怒張したペニスが見え、天を仰いでいる。

「彼らは、あなたを陵辱する権利を事前のオークションで落札した男性たちです。しっかりと奉仕してくださいね」

サディスティックな光を強めた目で美紗を見つめつつ、ニヤケ面で告げる加羅見の背後では、いつの間にか運び込まれた撮影機材がセッティングを終えている。

「撮影までするつもりなの……くッ! ……ゲスどもッ!」

「最高の褒め言葉ですよ。皆さん、宴を始めようではありませんか!」

加羅見に呼びかけられた男たちは、飢えた野良犬のように鼻息を荒らげ、挑発的な密着コス姿で突っ伏した女捜査官を取り囲んだ。

「ほら、さっさと舐めるよ! お前にご奉仕させる権利を落札したんだ!」

密着コス姿で床に這った美女の鼻先に赤黒い怒張を突きつけた男は、高飛車な口調でフェラ奉仕を命じる。

「ん……あう……」

従うしか選択肢の無い美紗は、両手と膝が床に密着した四つん這い体勢のまま、突きつけられた怒張の先端に舌を伸ばしてゆく。

「歯を立てるんじゃないぞ! みんなによく見えるように舌を一杯突き出して、俺のチンポをヌロヌロと舐めろんだ! フヒヒヒッ」

セックスアピール満点の肢体をフェティッシュな密着コスに包んだ女捜査

官に強制フェラ奉仕させるという状況に興奮した男は、卑猥な含み笑いを漏らし、美紗の美貌を凝視している。

（今は恥を忍び、屈辱に耐えるしか無い。本部も私からの連絡が途絶えたことを不審に思っているはず。耐え抜けば、状況好転の可能性もきつとある!）

汚辱感を押し殺しながら突き出した、艶やかな薄紅色の舌先が、赤黒く張り詰めた亀頭に、びちゅ……と小さな音を立てて触れた瞬間、男の怒張と美紗の緊縛ボディがビクンッ! と同時に跳ねた。

「く……う……うう……ッ!」

汗の塩辛さと恥垢の苦みが混じり合った不快な味を舌先に感じ、恰に整った女捜査官の顔に、あからさまな嫌悪の表情が浮かぶ。

「美紗さん、その顔、実にいいですよ。その表情のまま、射精するまで舐め続けてください!」

突然、インカムに加羅見の声が飛び込んできた。

（インカムの通信周波数までハッキングされている!? 内通者もこの場にいる男たちも、絶対に許さないとんだから!）

怒りと屈辱に身を震わせながら、囚われの女捜査官は悪臭の塊のような男根にフェラ奉仕を始める。

「ん……く……びちゃ、びちゃ、びちゃ……んふ……びちゅるっ……」

苦しげな吐息混じりに舌をくねらせ、熱く堅くいきり勃つた陵辱者の生殖器を唾液で濡れ光らせてゆく。

（熱くて……硬い……それに、凄く嫌な味……これが男の……ペニス……大嫌いよ!）

極度の男嫌いである美紗は、男性器に奉仕するのはこれが初めてで、激しい嫌悪が、嘔吐感を伴って込み上げてくる。

「エロエロな身体してるくせに、舌使いが随分きこえないな、下手くそ!」

「だっ、黙りなさいッ! 黙らないと……舐めてあげないわよ!」

美紗は、嘲りの声をかけてくる男の顔を上目遣いで睨み付けて威圧する。

「う! わ、判ったよ。だっ、黙るか……っ、つ、続けるよ!」

抵抗できぬ女捜査官を甘く見ていた男は、本当の修羅場をくぐり抜けてきた女の怒気に圧倒されて口をつぐむが、その股間ではさらに勃起度を強めた肉槍がビクビクとしやくり上げて、愛撫の続行をおねだりしていた。

「さっきの啖呵はいいですねえ。美紗さんのキャラが立つてきましたよ。そのまま、ツンツン系のセリフで男を罵倒しながらフェラしてください!」

インカムから聞こえてくる加羅見の演技指導が、美紗の感情を逆撫でする。

（感情的になってはダメ! 今は無心になって、とにかく逆襲の機会を待つよ……）

感情を意識の片隅に追いやった女捜査官は、機械的に舌を使い、亀頭を集中的に舐める。

「く……お前たちの臭くて恥知らずなチンポ、私のお口で……しゃ、射精さ

せてやるんだから！ あふ……びちゃ  
びちゃびちゃびちゃッ！」

殺意と怒りを爆乳の内側に押し込め  
たクール美女は、醜悪な勃起を見ぬよ  
うに目を閉じ、がむしやりに舌を閃か  
せて亀頭舐めを続けた。

「くお！ 急に上手になりやがった。  
やればできるじゃねえか」

極上美女の口から突き出されたしな  
やかにくねる舌先が、亀頭を磨き上げ  
るかのように這い回る様を瞬きもせず  
に見つめながら、男は快感に声を上ず  
らせる。

（ンッ！ まだ硬くなるの？ 舌が触  
れる度にビクビク跳ねて、嫌な味のヌ  
ルヌルした汗が、先つちよのワレメか  
ら滲み出てくる……）

目を閉じているせいで、亀頭の卑猥  
な形状や淫熱、先端のワレメから滲み  
出る男の愛液の味がより明瞭に舌に感  
じられて、男嫌いなクール美女の恥辱  
感を煽る。

恥辱に頬を染めながらフェラ奉仕す  
る女の側に、複数のハンディカメラが  
近づいて来て、汗ばみ紅潮した美貌や  
四つん這いになったピッチリコスボデ  
イを様々な角度から舐めるように撮影  
してゆく。

（こんな恥ずかしい姿を撮影されるな  
んて……）

薄目を開けて周囲を確認した美紗は、  
新たな恥辱と怒りに身を震わせながら  
も、フェラ奉仕を続けた。

（何これ？ さつきよりも、舌触りが  
硬くなってきた……射精させないとい

けないのは判っているけれど、このま  
ま出されたら……）

ペニスの舌触りが変化してきたこと  
に気付いた美紗の胸中を、嫌な予感が  
ざわめかせる。唾液と先走りのミック  
ス液に濡れ光る亀頭は、今にもはち切  
れてしまいそうに張り詰め、ビクッ、  
ビクッ、と切羽詰まった震えを起し  
ていた。

嫌悪感に苛まれながらも、囚われの  
美女は、張り詰めた亀頭に舌を這わせ  
続ける。

「んっ、びちゅ、はふ……びちゃびち  
やびちゃびちゃびちゃ……」

奉仕を始めた頃のぎこちなさがウソ  
のように巧みになった舌先が、唾液の  
鳴る生々しい音を立てながら、敏感な  
裏筋から先端のワレメ周辺を掘り返す  
ように閃き、くねる。

「ンむううウッ！」

男の低く呻く声が聞こえた瞬間、唾  
液まみれの怒張が制御不能の脈動を起  
こした。

「アッ！ んくうウッ！」

「にっ、逃げるんじゃねえッ！」

反射的に顔を逸らそうとする美紗の  
頭部をガツチリと捕まえて固定した男  
は、悔しげに歪む色白な美貌に赤黒い  
怒張を擦り付けながら、欲望の煮詰め  
汁を噴出させた。

どびゆるるっ、ぐちゅっ、ぶびゆる  
っ、どびゅぶちゅるるるッ！  
激しくしゃくり上げる牡槍の先端か  
ら放たれた白濁粘液が、苦しげにしか  
められた眉と固く閉じられた目元に弾

け、鼻筋に沿ってドロリと粘り着き、  
真一文字に引き結ばれた唇にこつてり  
と塗りつけられる。

（熱いッ！ こんなに……熱くて……  
臭いなんて……）

息もできぬまま、人生初の顔面射精  
に耐える美紗の肉感的な股体が恥辱に  
わななく。

「ふううう、一杯出たぜ。だが、す  
ぐに二発目が溜まるからな、待つてろ  
よ！」

女捜査官の美貌に大量の精液をぶち  
まけた男は、捨て台詞を残して他の男  
たちに場所をゆずる。

「美紗さん、もつとペースアップして。  
今度は二本同時フェラ抜きにチャレン  
ジいつてみよう！」

加羅羅見がノリノリの様子で、インカ  
ム越しに演技指導してきた。

（こうして奉仕させられている間にも、  
私の救出作戦が進行しているはずだわ。  
今は耐えななきゃ……）

「ねえ、今度は、二人同時に来て……」

はう……んぶ……どつちのチンポも、  
臭いわ……あう……あむ、ちゅばちゅ  
ばちゅ……びちゃびちゃびちゃ……は  
ふ……ちゅるるっ」

逆襲の機会が来るまで屈辱に耐え抜  
く覚悟を決めた女捜査官は、顔にこび  
り付いた精液の不快感に耐えつつ、左  
右から突きつけられた男根にキスし、  
はしたない吸い音を立てながら舌を這  
わせて奉仕した。

「さすがは禁呪封印局のエージェント、  
物覚えがいいですね。凄くエロい舌遣

いですよ。その調子で、どんどんフェ  
ラ抜きしちゃってください！」

加羅羅見が定期的な声をかけてくるせ  
いで、無心になることができず、屈辱  
感だけがどんどん強まってゆく。

（加羅羅見……今のうちに、いい気に  
なるがいいわ。必ず、この報いを受け  
させてやるんだから！）

怒りの感情を舌先に込めた美紗は、  
復讐の算段をしながら、二つの亀頭を  
責め立てる。

「んふ、あふ……びちゃびちゃびちや、  
ちゅばちゅばちゅばちゅばっ！」

左右から突きつけられた醜悪な男根  
に交互に舌先を閃かせて亀頭冠を舐め  
弾き、敏感な先端部を小刻みについば  
んで、二人の陵辱者を射精へと追い込  
んでゆく。

「うほお！ 唇も舌も柔らかくて、積  
極的にしゃぶつてくるじゃないか！」

攻撃的なフェラ奉仕を受けた初老の  
男が、太鼓腹を揺らしながら快感の声  
を上げた。

「ンッ、ご奉仕続けて欲しかったら、  
だつ、黙りなさい！」

精液に汚された凄艶な美貌で男を見  
上げ威嚇した美紗は、さらに激しく舌  
先を閃かせ、唇と前歯を駆使した硬軟  
織り交ぜたフェラ奉仕を続行する。

「はふ……あむ、んふう……じゅばじ  
ゅばじゅばちゅるるっ……」  
甘くかすれた女の息づかいと、生々  
しい吸い音が、地下室に響いた。

「くお！ 強烈な吸引が気持ちいい  
ッ！ 出そう……ッ！」

私は麻薬取締局所属  
特務捜査官の  
ナターリアだ

憎き女捜査官を露骨に拷問にかけてハメまくれ!

禁止薬物の販売及び  
使用の罪で  
貴様を逮捕する

# 特務捜査官 ナターリア

Natalia the Special Agent

本誌  
初登場  
NEW FACE

漫画 夜与  
COMIC



はああっ!!

うごお!?



貴様が  
この組織の  
ボスだな?

ラッッ...  
た...タマが...



その生意気な  
女をやっちなえ!!

くそっ...  
お前ら!!



うおっ!!

特務捜査官を  
舐めるなよ!!

ふっ…

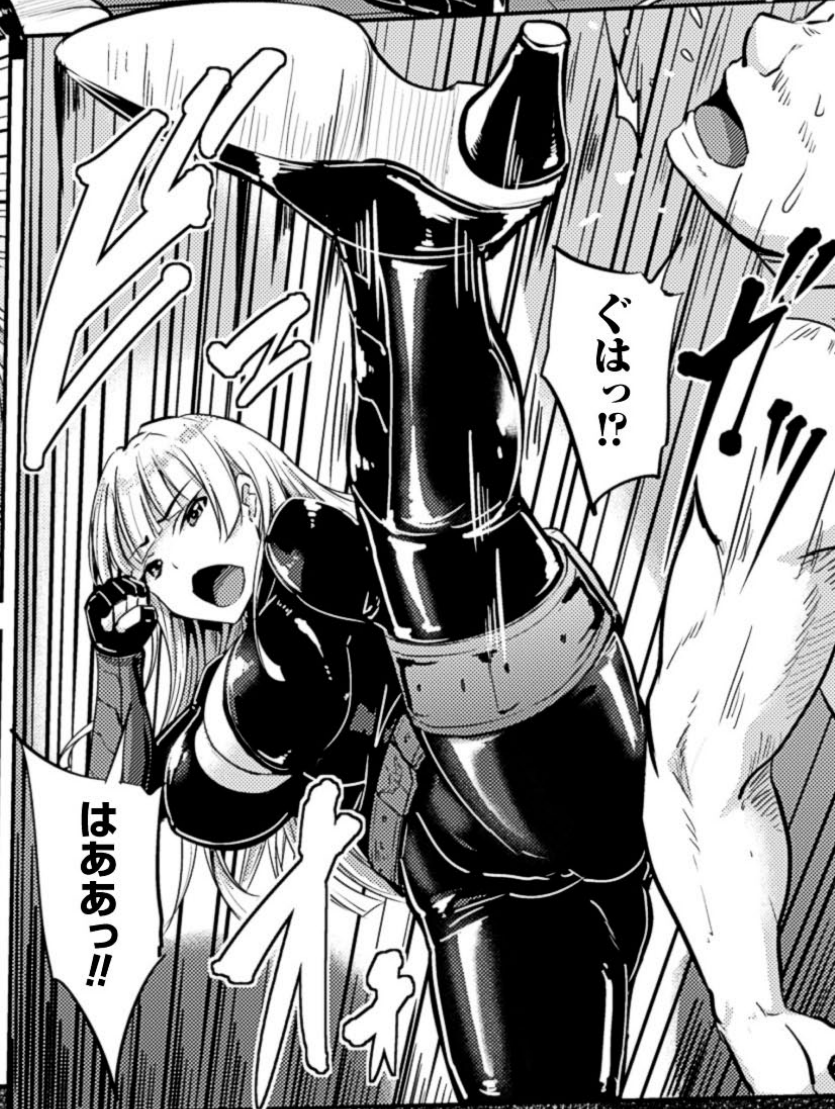
速い!?

ビュッ  
オオオオ



はあッ!!

うごっ!!



ぐはっ!?

はああッ!!



うぐ…

うぐ…

ふん…  
弱すぎるな



!!?





どうやら効いてきたようだな

なんだ… 体に力が入らない…!?

この部屋にはお前の追っている薬物「エクスタシー」が充満している

お前に気づかれないように極低濃度に調整してな



常用している俺達にはほとんど効かないが

耐性の無いお前が吸い続けたんだ

体の感覚が麻痺して動けない

この部屋から出て態勢を立て直さないと…



うぐっ!!

さっきの蹴りは効いたぜ…

やめろ…!! そんなもの…!!

こいつでたっぷりとお返しをやらせないとな

ヒビッ：  
いい格好だな  
捜査官サマよお

クソツッ：  
見るな下衆ども…

それにしても  
エロい身体してんな  
たまんねえぜ…

体が熱い…

薬さえなければ  
こんなヤツらなぞ…

さっき  
お前に打った薬は  
十倍の濃度の  
エクスタシーだ

この薬のすごさ  
今から味わわせて  
やるからな



性的快楽を感じる  
脳神経が  
敏感になりすぎて  
痛覚まで  
快感として認識  
しちゃうんだ

やめろ!!  
触るな!!!

あゝあゝあゝあゝ!!!

おい見ろよ

捜査官サマの  
デカパイご開帳だ♥

殴られて  
乳首勃起  
させてやがる

すっかり  
感じてるぜ  
このアマ

傷めつけられて  
感じるなんて  
マズなのか?

こりゃあとんだ  
変態捜査官サマだぜ

この状況で  
何強がってんだ?

クソツツ...  
貴様ら...  
殺してやる!!!

乳首いじられて  
喘ぎ声上げる  
くせによお

新  
星

江口ヒロヨシ

二次元展開を熟知した筆致に注目！

痴漢電車内で弄ばれる正義！  
捜査官の肢体が雄の欲望に翻弄される！

にくえつの  
肉悦の車両  
ハコ

# 痴漢捜査官 風吹悠

小説  
NOVEL  
えぐち  
江口ヒロヨシ  
挿絵  
ILLUSTRATION  
ひなくま

八月某日。深夜零時五分。某私鉄のホームに最終電車がゆつくりとすべりこんでくる。週末であることも手伝って車内はかなり込みあう。学生と思しきグループの周囲を気にしない喋り声が響き、酒臭さがぬるい空気の中に漂う。乗客のほとんどは携帯や音楽に意識を向けながらも誰もが早く到着しないかと苛立っている。風吹悠は車両を睨み、カツカツとローヒールのミュールの踵を鳴らしながら乗り込んだ。

背後でプッシュと扉が閉まる。  
(……さすがに混んでるわね)  
すし詰めの車内を縫うように移動するたび、男どもの舐めるような視線を意識した。しかしそれを責めるのは酷かもしれない。165センチの悠はローヒールといえども女性としては目立つ。彼女は今、グレイのスカートスーツ姿という地味な格好だが、そんなもので優婉で肉感的な肢体は少しも隠せない。今にもブラウスのボタンが弾けてしまいそうなくらい豊かな胸は歩みに合わせて豊感的に揺れ、くびれたウエストのラインから続く、ぐつと持ち上がった尻尻はただでさえびつたりしたミニスカートによつて逆ハートの形をありありと浮かび上がらせていた。

そしてスカートから伸びる足はというとページュのストッキングに包まれた、ぱんっと張り切った太ももからしなやかな脚線が形作られローヒールの黒いミュールへ吸いこまれていく。シートヘアに鉄筆で刷いたような柳眉

に切れ長の双眸。鼻の下を伸ばしている男たちも悠に睨まれた途端、そそくさと顔を背けてしまう。  
悠は魅力的でありながらも全身からただならぬ緊張感を醸し出していた。涼しげな顔立ちには良く言えばクール、悪く言えば冷酷にもとられる。だが彼女は周りにどう思われようとも構わないどころか恐れられることを誇りと思っている。彼女の中にあるのはこの世から弱い女性を狙う性犯罪を撲滅したいという正義の心。そう、風吹悠は性犯罪対策班に所属する捜査官だ。配属されてまだ一年だが、これまでに何人もの痴漢や強姦犯を摘発している。この電車に獲物がいる。それも長年追いつけている痴漢グループが摘発できるかもしれない。数週間前、ある痴漢犯を取り押さえた際、押収した携帯から一通のメールが発見された。

「所詮、上も男ばかり。本当に女性の苦しみなんて理解できないんだわ」  
職務なんて関係ない。悠は単独で乗り込んできたのだ。目的の車両には女性がいるはず。そしてその周辺にるのがおそろく犯人だろう。不審な素振りをした瞬間、その汚らしい腕をねじ上げ、跪かせる。パーティーというかには相手は複数犯だろうが心配ない。懐には特殊警棒がある。  
(待つてなさいよ、犯人どもつ)  
ふざけたパーティーが何号車で行われるかは、乗り込んでから間もなくメールで報された。  
(三号車……)  
人混みをかき分け、目的地に到着する。どこもかしこも立錐の余地もない有り様で、人熱れで頭がぐらくらした。視線を走らせるが、特に変わったところはなかつた。  
(もつと奥……?)  
半ばぐらいまで達した頃。急に背後から強い力で押され、向かつて左の扉側に押し出されてしまう。  
「あ、危ないでしょ……っ！」  
上半身を扉に押しつけられながら、ぐぐもつた呻きを漏らした。  
(もう、何なのよ……)  
悠は気を取り直して周囲を見回そうとするが、まともに身動きがとれない。少しでも車内を見渡せるように体勢を変えようとする——とお尻を何か

う、思い直す。しかしそれも束の間引き締まった桃臀に何かか押し当てられる。間違ひなく掌。身動きしても右臀に擦りつけられる掌の感触は消えない。その大胆さに手慣れていることが分かった。  
(こいつ、痴漢グループね……)  
それなら仲間も近くにいるはず。扉の窓ガラスを鏡のようにつかい、車内の様子を窺うが、怪しい人物は特定できない。もう少し引きつけ、こちらが都合の良い獲物と思わせ、正体を現したところで特殊警棒で鎮圧する。(私に手を出したことを後悔させてやる。全員一網打尽よっ！)  
悠はまさぐる手にわざとお尻を押しつければ相手は何の疑いも抱かず、腹ぺこの獣のように食いついてきた。  
「っ……」  
右尻の輪郭をさわさわとなぞるよう

うえ、見ず知らずの男に触られている生理的な不快感までも上積みされる。と、左の尻たぶを五本の指でゆつくりとなぞられ、背筋がざわついた。(きたわね……。これで二人目?)

指先が芋虫のように太いせい、触られたあともその感覚はいつまでも残ってしまう。

普通の女性ならば複数の痴漢に狙われたら恐怖で声も出せないだろう。再び扉の鏡越しに窺うが、ぱつと見ても怪しい動きは見られない。誰もが早く目的地に着かないかと思いいの格好で時間を潰している。この中に二人——いや、それ以上の卑劣な痴漢がいることを思うと、怒りが爆発しそうだ。(……落ち着くのを、悠。もう一人もう一人きたら……行く)

身体のサイズにぴったりのスーツなだけに布地越しにも指先の動きや触れあう硬い掌の触感が生々しく伝わる。罔と分かって受け入れても不愉快さは拭えない。

「んっ」

不意な刺激に声が漏れた。それまでの優しげなタッチから、不意に尻たぶを握られたのだ。

「……っ!」

迂闊にも声を漏らしてしまった情けなさと、周囲の乗客の視線を意識して、頬が赤らんでしまう。手は再び優しい愛撫へと切り替わっていた。犯罪者のしたり顔が想像でき、下唇をきつく噛みしめた。刺激にさらされ過敏になっ

ている桃尻をまさぐる手は左右別々のタイミングで這い回り、そうかと思えば指を食い込ませてくる。

長く刺激にさらされている蜜尻が火照りだしてくる。その熱は下半身全体にじわじわと広がっていくような気がした。それと共に痴漢犯の愛撫もより大胆になる。

愛撫に力が入り、臀肉が指の間からはみ出すよう。それはもはや愛撫ではなく、捏ねられているようだった。反射的に両腿をびっちりと同じ合わせたことで、より突き出すような格好になったお尻をさらに弄ばれる。

悠をじつと耐える健気な獲物と調子に乗り始めたかのように……

(こ、こいつら……)

三人目がいつ来てもいいように懐に右手を差し入れ、警棒を掴んだ。

把手を握る手はかすかに震え、指先も白くなる。身体は男たちによる人念な愛撫への反応を隠せなくなっていた。臀の頬を撫でられるだけならばまだいい。しかし尻たぶは指を伸ばせば容易に女の大切な部分、敏感な鼠径部に触れられる。自然、悠の意識もそこに集中してしまう。

一人の細い指先が触れるか触れないかのところで引けば、もう一人の太い指がねちねちと採み込みながら、軽く撫でるようにして去っていく。

(痴漢のくせしてどうしてこんな……)

悠はいっぱしの女だ。学生時代は恋をし、性の快感を知っている。そんな

肉体だからこそ、男たちの指先に焦らされると感じてしまうのだ。さらに男どもの手汗がスカートに染みこむことで、よりお尻への密着度は深まり、

「あ……っ」

指先が割れ目の浅いところまで達してしまう。表面だけに留まらない悪辣な指戯に身震いがつま先から脳天まで走り抜けてしまう。

(もう捕まえて、やるわっ)

悠は自分でも正体の分からない焦りに追い立てられるように動こうとしたその時。

「はあ……ッ」

不意打ちに思考が乱れ、声が漏れてしまう。びっちりと同じ合わせた腿が丹念なまさぐりによって緩んだところを見計らったかのように第三の手が股の間に割り込んできたのだ。

(う、嘘!?)

あまりに大胆すぎる手口に動くタイミングを完全に逸してしまうばかりか、警棒を取り落としてしまう。

(しまった……っ)

これまでのようにお尻ではなく敏感な内もも、それどころか秘処を守る下着にまで指先が密着してしまう。

(さ、触るな……変態イッ!)

心の中で叫んだ。散々、焦らされた挙げ句、火照りの源泉とも言おうべき場所への刺激。しかしそれも臀部の時と同じく、すべてが物足りない。まるで痴漢犯は悠が声をあげようというタイミングを知っているかのように指の動

き、握る力を憎らしいほど巧みに変化させる。やがて腿の間に割り込んでいた手がぐるりと半回転するや、ショートをそっと包み込むように採まれた。

「ああっ……」

(う、嘘……!?)

秘処の周囲で、じんわりと濡れる感覚がたちまち広がってしまったら両足を反射的にきつく、同じ合わせてしまう。それが股座に潜り込んできた指先との密着感をさらに強くしてしまうことと知りながらも両脚は否が応にも緊張してしまう。

「ん……ん……っ」

悠の瑞々しい唇は小刻みに震え、かすかに引き撃った吐息をこぼす。悠はそうとは分かっているが、それは明らかに悶えの発露だった。

身体は全く自由にならない。身動ごとすれば、身体の中に抱えている否定しがたい性感が今にも弾けてしまいそうな気がしたのだ。

「ひやあつ……んん……」

股座に差し込まれた指先がうねうねと蠢けば、過敏な性感帯が執拗な刺激に晒されてしまう。

(どうして、私……)

今、自分の身体が直面しているものが快楽だと信じたくなかったが、柳腰が揺れるような甘美が股の付け根を熱くした。

鼻にかかった上擦り声が漏れ、膝がかすかに戦慄く。

(あっ……)

蜜がこぼれ、下着を濡らしてしまふ。ひんやりした冷たさが幼児以来の失禁感覚を思い出させ、慄然とした。

(痴漢されて感じてる？ そんなことないっ！ 私は捜査官よ！ 今まで犯人に屈したことなんて一度もない！)

そう言い聞かせる今、自分を支配しつつあるのは恐怖にも似ていた。

自分がおかしくなってしまう感覚から逃げようとするように、悠は振り向こうと全身に力を入れるが、痴漢たちの手捌きは頑健な捜査官の理性を乗り越え、性感を確実に蕩けさせていく。

屈するまいと、こらえようとすればするほど心の隙間に男たちは忍び寄る。そして汗で把手を離してしまった瞬間、両腕の首首をそれぞれ、誰かに掴まれる。

「っ！」

強い力にとでも振り切れない。そうこうしているうちに、両脇から突き出した腕がジャケットのボタンを外す。

(な、何なの!?)

戸惑う悠を尻目に状況は目にもとまらぬ早さで展開する。

ブラウスのボタンに手がかかるや、三つのボタンがたちまち外され、黒いスポーツブラに包まれた豊満な乳房がこぼれてしまふ。

たまらず周囲に目を走らせた。どうやら突然、車内の一角で始まったストリップショーには誰も気づいていないようだった。しかし安堵などできるわけもない。両脇から突き出した二本の

腕がスポーツブラにかかったのだ。悠はこらえきれず、声をあげようとした。しかし声の代わりに出たのは、戦慄く吐息くらいだった。

(お、怯えている？ 私が？ そんなわけ、ない……っ！)

名も知れぬ不特定多数の痴漢の巢穴に囚われた捜査官は、それでも打開策を探ろうとする。しかしブラがまくりあげられればIカップの双乳がたぶたぶと波打ち、こぼれ出てしまふ。

母性の象徴としてあまりにたわわに実った豊胸は電車の振動に合わせて、いつまでも落ち着きなく弾んでしまふ。つやつやとした純白の肌の中で色づく桜色の乳首はツンと勃っている。

(嘘よ、こんなこと、ありえないっ！) 心で必死に今の自分を否定しようとするが、出入り口の窓に映り込んでいる姿に愕然としてしまふ。

公共の場所で強制的にストリップ姿を晒されている己の姿……。

それも、乳頭の反応からさも自分が喜んでいられるかのよう。

(違う、私はこんな連中に感じさせられてなんかない。こいつらは、社会の、女性の敵……それを私は……っ)

だが今や四肢を拘束されている状況ではその心の声も虚しいばかり。

「子鹿のように震えていますねえ、風吹悠」

突然、ねっとりとした嫌らしい声が鼓膜を揺さぶった。

「どうして私のことを……っ」

卑劣な犯人の嘯きに動揺するのも束の間、ブラを引つ張り上げた両手が乳房を下支えするかのようにつられてきた。直に触れられ、喉が戦慄く。

「あ、あなたが首謀者、なのね……っ」

「その通り」

男の手にもあまる量感を誇りながら、目には見えない糸で吊されているかのようにツンと上向く白磁の軟乳に、指毛の生えた醜悪な五指が問答無用とばかりに触れてくる。

「柔らかいおっぱいだ。こんなに目立つものをぶら下げて潜入捜査かい？」

「だ、黙りなさい……っじ、自分の立場を分かっているの……っ!？」

「……あなたこそ」

胸を刺激されている間も秘処やお尻はまさぐられ続けている。自分を追い込む動きが目の前の窓に映り込んでしまふ。見たくはないと思うのに顔を背けられない。

「んっ……ああ……っ」

「見えるかい？ きみのおっぱいが形を変えているだろう？」

乳丘を握りしめられ、揉みしだかれる。水風船のように撓み、蕩けながら、男の指にもみくちゃにされてしまふ。

(き、気持ち悪いのに何なの？ この、感じ……っ)

「ああ、とても素敵なおっぱいだ。私の手に吸いついてくるよ」

豊満な乳房を觸られるたび電流が脊髄を走り、脳髄をジリジリ炙った。

「……っ」

「声を我慢するのは無粋だよ。ほうら、アンアンと啼いてごらん？」

「ふ、ふざけないで……っ!？」

その憎たらしい指先は双丘を波打たせ歪ませ、玩弄するにもかかわらず突起には一切触れようとはしなかった。

痛いほどに癩った乳頭がヒリつく。まるでそこは今にも炸裂寸前の爆弾のように捜査官の理性を掻き乱す。

(負けちゃだめよ、悠。こんな気分になること自体、相手の思う壺なのよ!)

しかし身体の自由が利かない今、逃げることもかなわず、心身は急速に蝕まれていった。

「んっ……はあっ……」

「乳首がすぐく尖っているよ？ 見たまえ。このいやらしい勃起乳首を」

「……だ、黙れというのが、聞こえ……ないの……っ」

男に言われるまでもなく身体の変化は痛感している。それでも悠はそれを否定し続けていた。

だが男の言葉と巧妙な手管に、もはやそれも限界が近づいていた。太い指が乳暈を掠めるだけで、ビクンツと股体が大きく跳ねてしまふ。

「んんんんっっっっ!？」

戸惑い、懊惱する美形の捜査官を味わう痴漢犯ののっつきが想像できた。

(相手の策略ののっつきやだめっ、相手は私に欲しいと思わせる……っこっちはそんなの、お、お見通し……)

人差し指の腹が乳頭をかすかに圧迫してきた瞬間、



# 白の妖精とマジカルスズカ

white fairy and magical suzuka

漫画  
COMIC

ふみひろ

私の名前はスズカ  
こことは違う世界から  
来た魔法少女だよ

妖精ともにも戦う  
可憐な魔法少女！

彼女に隣りかかるとの恐ろしい災難とは……!?

またこちらの世界に来て  
数ヶ月の新人魔法少女だけど  
ある任務の為に頑張ってるの



そしてこの子は  
白の妖精プカブル  
私のパートナー

こっちなかな？

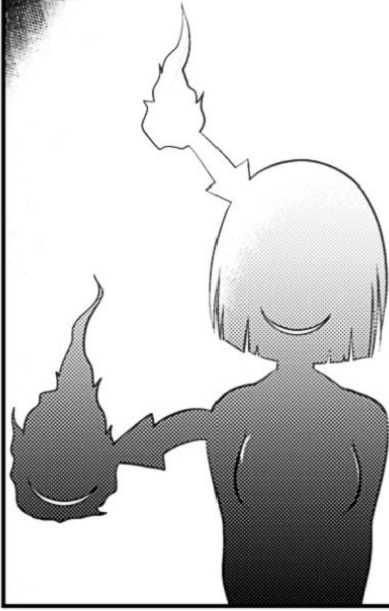
そしてこの世界での  
魔法少女の任務は悪意を  
撒き散らす黒の妖精の浄化

「黒の妖精」とは何らかの  
原因でこの世界に漏れた  
妖精の魔力が

人間の悪意に触れ変質し  
知性を持ったモノなんだ

白の妖精と違い実体が  
無いので存在を維持する  
為に人間に取り憑きその  
精神エナジーを喰らう

うん



おどろ

取り憑かれた人間は廃人  
になるまで精神エナジーを吸われ  
その間周囲に悪意を撒く

簡単に言うと  
私達魔法少女はこの世界を  
守るため黒の妖精を浄化する  
平和の使者って感じかな

のハズなんだけど

まさか浄化しきれず  
逃がすとは…

本当魔法少女  
失格だよねスズカ





全くスズカはそんなこと  
言ってるから黒の妖精を  
逃がすとかするんだよ



夜の森林公園って  
少し不気味だよ

ねえアカプル：  
探すの明日にしない？



大体スズカは  
魔法少女としての  
自覚が足りない  
この前も眠たいとか  
言ってる手を抜くし  
新人とはいえスズカは  
実力あるんだから  
本気を出せば



…アカプル？



もう…わかってるわよ  
クドクド言わないで

本当アカプルは  
親みたいなのに毎回毎回…



え？



な...なんで  
こんな一瞬に  
同化を...

うそッ  
プカプルッ

ゴキ  
ゴキ  
ゴキ  
ゴキ



逃げるんだ...スズカ  
コイツの悪意が君に  
向いて...いる

ゴボ  
ゴボ



消える...同化モ一瞬  
浄化モ...一緒

シロ...クロ...オナジ  
ヨウセイ...じようか  
されれば...一緒に



ヤメタ...ホウガ...  
イイゾ...

え?



待ってて  
今コイツを浄化  
するから

早くブカブル助けないと  
完全に同化されて分離  
出来なくなる…

俺…再生デ…  
腹減ってル

ドケ…  
…魔ホウ少女

時間がない以上  
もうこの方法しかない

私の精神エナジー  
食べなさい

私と同化したら  
ブカブル要らない  
でしょ

この体あけるから  
ブカブルと分離して

……フム

…それは…面白イ  
やはり…同化する  
ナラ…人型がイイ

く…っ

俺…人間イガイの  
精神エナジー…食うの  
ハジメテ…

魔法少女喰うハジメテ…

オマエのエナジー…  
どんな味すルカ楽しミ

黒の妖精は対象を徹底的に犯し心体に負荷をかけることで

精神エナジーを効率良く吸収しようとする

これを利用すれば  
プカブルを助ける  
事が出来るはず

ホウ…覚悟ノある  
目…ダナ…

心が…強いホド  
精神エナジーは  
美味にナル

ひうっ

ソノ目が快楽に狂ウ  
味を楽しませて…  
もらう…ソ

魔法服が吸収  
されて溶けてるッ



姫騎士捜査官

# ケイ

Katie the Princess Investigator



愛する国民を守るため……  
王女自らが取り締まる姫騎士捜査官！

「なんだてめえは」

ガルス大大陸中央に位置するハルネリア王国王都にて、強盗を行い逃げている最中の男の前に、一人の女が立ち塞がった。

銀色の髪に、寶石のように美しい金眼の女が……

女は騎士服に身を包んでいる。しかも、腰には剣を下げていた。

「何者だつて聞いてるんだよ!!」

怒鳴りつつ女を睨む。

「憲兵騎士隊のものだ。強盗の現行犯で貴様を逮捕する」

男の問いかけに女は胸元のポケットから紋章のようなものを取り出し、突きつけてきた。

日の光を反射して輝くりンドウの紋章——王国内の犯罪捜査を行い、治安を守る憲兵騎士隊の証だ。

憲兵騎士隊に所属するものはその名の通り騎士だ。しかし、彼らを騎士と呼ぶものはいない。彼らのことを皆が呼称するときはこう呼ぶ——

「そ、捜査官つ!!」

「抵抗はするな。大人しく私に従え」

ナイフの様に瞳を鋭く細めつつ、女はそう告げてくる。

同時に背後からも数人の捜査官と思われる男達が現れた。

「チッ」

これに対し、男は素早く反応した。「捕まってきたまるかよ!」

正面の女に向かって走り出す。女の身体は細い。小娘のようなもの

だ。女を排除する程度わけなくこなせるはずだ——男には自身があった。

ナイフを取り出し、構える。

「……クズめ」

けれど女は怯むどころか呆れたような一言を口にする。男に向かって走り出してきた。剣を抜きすらしめない。

「馬鹿か!」

その行動を小馬鹿にしつつ、切っ先を躊躇なく女へと向けた。

次の瞬間、男は宙を舞っていた。

突き殺そうとした勢いのままに、女によって男は投げ飛ばされていった。

(なんだ……これ?)

何が起きたのか理解できない。呆然としつつ、地面に叩きつけられる。凄まじい痛みが走った。

「あつぐ……がはあああ……」

息が詰まった。強烈なダメージ。動き一つ取ることができない。

「……公務執行妨害も追加だな」

そんな男に対し女の冷たい言葉が向けられる。

「なに……ものだ……お前……」

女の身からは想像もできないほどの体術……。意識が遠のいていくのを感じつつ、ぼつりと男は一言呟いた。

「私か……私はケイティIIファムドIIハルネリアだ」

問いかげに女は事も無げに名乗った。「ケイティ……は……ハルネリア?」

まさ……か……」

ハルネリア——国と同じ名だ。それにケイティという名も聞いたことがあ

る。確かこの国の王女……。

「な……ぜ……?」

王女が何故捜査官をしているのか? わけが分からない。まるで理解できない事態に呆然としつつ、男は意識を失った。

＊

「ようこそおいでくださいました姫様! このバヘリアIIハルムート……今日ほど喜ばしいことはありません!」

まさか……まさか王族の方が我が屋敷に行幸してくださるとは! ああ、なんとという誉れ!!」

屋敷前で馬車を降りたケイティに対し、王国貴族バヘリアIIハルムートが大仰な身振り手振りで挨拶してくる。

髪の毛が一切ない禿げ頭に、ブクブクと太った身体。特に暑いわけでもないのに全身汗だらけというまるで豚のような男だ。一見していいものばかりを食べていることが分かる。ここまで来る間に見た領民達は皆瘦せ細っていたというのに……。

「うむ」

不快感を覚えつつも、ケイティは王族らしく胸を張り、案内されるままに屋敷に向かって歩き出した。

このような不快な男の元にケイティがやって来たのは、視察の為である。王国が分け与えた領地を家臣がしっかりと治めているのかを調べるのは王族の務めだ。

ハルネリア王国第一王女としての公務である——というのが表向き理由

だった。

そう、あくまでも表向きの理由ではない。本当の理由は別にあった。

＊

バヘリアIIハルムートの屋敷にて違法賭博が行われている。国で認められている遊戯としての賭博ではない。実際の金銭授受を行う賭博が……。しかも、その資金を元にバヘリアは国の恥部とでもいべき裏シンジケートから違法な武器や傭兵達を買い集め、それを近隣諸国に売っているらしい。

という話をケイティに持ってきたのは王国の重臣、内大臣ストウルムIIバルバツハだつた。

元々ストウルムはケイティが捜査官業を行っていることに反対している人物である。王女には王女としてもつと別にすべきことがあるはずだ——というのがストウルムの意見だつた。

それはケイティだつて分かっている。ただ、それでも国民が困っていることを放つてはおけなかつた。だから憲兵騎士となったのである。

その思いをストウルムも多少は理解してくれたい。だから今回の捜査をケイティに頼んで来たのだ。

「現状ではバヘリアの犯罪に関する証拠はありません。その為取り潰せない。だから証拠を得たいのですが、捜査官を入れることもできない……」

犯罪を行っているからか、バヘリアはかなり厳しく領内に入る者の身分チェックを行っているらしい。向かわせ



た捜査官は皆それによって弾かれてしまった——とストゥルムは語った。

「そこで……不本意ですが姫様に行っていたかどうか考えた次第です」

王族の視察であればバヘリアも断ることはできない。それにまさか王族が捜査官などとは思えないしな。だろ

——というのが大臣の意見だった。そしてケイティはそれに乗った。

（我が国で違法賭博を行い、その資金で武器を買い集めて売ると……。戦渦を広げているようなものじゃないか。絶対に許さん）

（特段変わったところはないな。まあ、一目見て分かるような不正をする程甘い相手ではないか）

ハルムート屋敷にて開かれた晩餐会の主賓として食事をつつ、広間を見回す。

（豪奢なパーティーだな。それだけ税を取り立てているということか……。裏カジノや武器売買で得た利益を使っている可能性もあるな）

本当に犯罪が行われているのであれば、絶対に暴かなくてはならない——改めてそのようなことを考えていると、それにしても……馬鹿なことを致しましたね姫様

突然バヘリアが不遜とさえ受け取れる言葉を投げかけてきた。

「馬鹿なこと？ いきなりなんだ？」

「視察という名目での捜査のことですよ。クク……本当に愚かだ」

「……貴様……何故それを……」

「危ない橋を渡っていることは理解していますからね。王都に草の者を放つくらいのことにはしているということですよ。当然……貴女が捜査官だということも知っています」

「なっ」

慌ててケイティは立ち上がった。だが、脚がもつれ、転んでしまう。

「なんだ……力が入らない……」

「食事に葉を盛り添えていただきました。クク……その身体、その美貌……たつぷり楽しませていただきますよ」

ニタニタと笑うバヘリアが笑う。「き……さまあ……」

噂ではない。確実にこいつは犯罪を犯している——そのことを理解しつつ、ケイティは意識を手放した。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

躊躇うことなく頷く。（……犯罪の証拠が見つかることはないと考えてタカをくくっているのか？ その考えが甘いことを教えてやる）

そう考えながら、屋敷に併設されたカジノへと向かった。

まずは扉を少し開け、中の様子を窺ってみる。

まだ昼間。だというのにカジノは賑わっていた。大勢の人間が集まり、遊戯にいそしんでいる。

「なかなかの客足だな」

特に変わった様子はない。どこにもある普通の遊戯カジノだ。

「はい。こうして領民や他領の貴族の皆さんに楽しんでもらうことが私の喜びですから」

慇懃に頭を下げてくる。一々の言葉が胡散臭い男だ。丁寧な態度が逆に気に障る。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

姿というのはこの場にふさわしくない。場に合った衣装を身に着けるといのは大切なことですよ。もし姫様が今の姿で表に出たらどうなります？ お客様達は皆驚き、遊戯どころではなくなってしまう。それでは視察になりませんよ」

ジツとこちらの目を見つめながら、どこまでも丁寧な口調でそのように告げてきた。

黒々とした瞳。そんなもので見つめられていると——

（確かに……。この男がいうとおりかもしれない）

そう思えた。

（実際、私が姫として目立つのは捜査としてもあまりよくはない。この衣装は恥ずかしいが、客にカジノの使用人と思わせることができれば……）

隙だつて生まれるかもしれない。

「……分かった」

恥ずかしい格好などしたくはないが受け入れる。パニースーツを受け取り、着替えの為に移動しようとした。

「駄目ですよ。着替えの際はカジノの中……お客様の前でお願ひします。それが作法です」

「さ、作法!? ふ、ふざけたことをいうなっ!!」

「私はふざけてなどおりませんよ」

やはりこちらを見つめたまま、大真面目に告げてくる。

（なんだ……この目は?）

向けられる瞳——それが怪しく輝い

「……カジノの視察をさせてもらう」翌日、ケイティはバヘリアにそう告げた。

た気がした。

するとどうしてだろうか？

「そ……それもそうだな」

バヘリアの言葉に対する疑念が消えていく。

（おかしい。これは間違ってる。だが……いや、おかしいのは私の方か？）

寧ろ自分の考えに対する疑念を抱いてしまう。

「……わ、分かった」

気がつけば領いてしまっていた。

「それは何よりです」

ニコニコとバヘリアは笑う。

その姿に不快感を覚えつつ、バニースーツを受け取ると、扉を開けてカジノ内部へと脚を踏み入れた。

「おお！ 本当に来た。姫様だ」

「バヘリア公がいついていた特別な催し物って本当だったのか！」

「なんと美しい」

途端に客達がざわつく。

騎士服姿で客の前に出るのは不味い。だからバニースーツに着替える——というはずだったのに、一発で正体はバレてしまっていた。

だというのに——

（気づかれてはいないようだな……。早く感づかれる前に着替えなければ……）

何故か彼らの言葉が耳に入らない。捜査官として正体を隠さなければ——などと滑稽なことを考えてしまっている自分がいた。

その考えのままに、羞恥を覚えつつ

も騎士服に手をかける。

（恥ずかしい……だが、これも潜入捜査の為だ。だから……）

皆が手を止め、自分を見ている。それらの視線を感じつつ、身に着けていた服と下着を脱ぎ捨てて全裸を晒す。

客達が好色な表情を浮かべた。

（ああ、見られてる……）

視線だけで犯されているような気分になる。耐え難い恥ずかしさに悶えつつ、バニースーツを身に着けた。

「こ……これでいいか？」

胸の谷間や背中が大きく開いた衣装である。女の性を周囲に撒き散らすような衣装——恥ずかしすぎる。だが、犯罪を暴く為にも耐えねばならない。羞恥を隠すように必死に表情を引き締めつつ、できる限り平静を装ってバヘリアに尋ねた。

「はい。結構です……さて、それではバニールと化したからにはお手伝いをしてください。これも視察の一環です」

「で、手伝い？」

「ここでは出した精液の量に応じてチップに変えるというシステムを採用しています。ですから、お客様のちんぼからミルクを搾ってあげてください」

「なっ……そんなこと……」

「バニールがただ突っ立っているつもりですか？ それでは普段のカジノを知ることはできませんよ。貴女の仕事は視察ではなかったのですか？」

「それは……確かに……」

まともに思考することができない。

バヘリアの目を見ていると、彼の無茶苦茶な言葉こそが正しいのだと思ってしまう。

「わ……分かった……」

受け入れざるを得なかった。観念し、一人の客へと近づいていく。

「……その……だ、出せ……」

「それだけじゃ分かりませんよ。しつかりちんぼを出してください。奉仕させてください——と、使用人らしく丁寧な言葉遣いでお願いします」

「う……そ、そうだな。その……申し訳ありません。えっと……その、ち……ちんぼを出してくださいお客様。私が奉仕致しますので」

「ああ……よろしく頼むよ」

嬉しそうな笑みを浮かべながら、男性客は肉棒を剥き出しにしてきた。まだ何もしていないというのに、痛々しい程に勃起した肉棒を……。

（なっ！ こ……これが男性器!! ペニス？ ち……ちんぼ……？ なんて醜態な……）

初めて見る肉棒に身体が硬直する。膨れ上がった龟头。血管を浮かび上がらせる肉茎。それに嗅いでいるだけで咽せそうになる牡の匂い——すべてが不快だった。すぐにでも逃げ出したいほどに……。

（でも……やらなければ……使命を果たす為にも……）

自分に言い聞かせる。けれど、奉仕

といわれてもどうすればいいのか……。

「口でしゃぶるのです。ちんぼを咥え……ジュポジュポとね……」

バヘリアが説明をしてくれる。

「こ……こうか？ ん……んもっ」

躊躇いつつも、肉棒を咥え込んだ。

「もっふ……んふううっ……」

（臭い。それにしょっぱい……気持ち悪い……）

口内に牡の匂いが広がる。塩気を含んだ味も伝わってきた。耐え難い程不快である。

それでもやるしかなかった。すべては捜査の為。疑われるわけにはいから……。

「んじゅっぽ……じゅっぽ……」

バヘリアの言葉通り、頭を振り、ペニスを抜く。

「ああ……気持ちいい」

途端に男は心地良さそうにうっとりとして表情を蕩かせた。

（こんなものが本当に気持ちいいのか？ 私は気持ち悪いだけなのに……。だが、気持ちよくなればなるほど早く終わるんだろ？ なら……）

うる覚えの知識でそのようなことを考えつつ、肉棒への奉仕を続ける。

上目遣いで男の表情を観察しながらジュポジュポという下品な音色を響かせた。

「ただ頭を振るだけじゃない。吸ったりもしてくださいね」

そんな姫騎士捜査官に対してバヘリアが指示を飛ばしてくる。



ケイティはこれに素直に従った。  
「ふっじゅ……んじゅっ……ちゅずるるう……ふっじゅ……むじゅうっ」  
頬を窄めて肉棒を吸る。下品な音色が響いてしまうことも厭わない。これもすべて捜査の為だから……。  
慣れてはいない。だから実にごこない口淫である。それでも、濃厚な奉仕だった。

「ああ……で、出るっ！」  
そのお陰か、男が限界を訴えてくる。構わないぞ……んっちゅ……じゅゆるるる……出せ……沢山出すんだ」  
舌を激しく蠢かし、強く吸った。  
「おおおっ！」

どびゅばっ！ ぶびゅうっ！  
「あぶあっ！ ぶふうっ」  
精液が撃ち放たれる。ケイティ口内が白濁液で満たされた。

（これ……出てる。私の口に臭い汁が……。これが精液……なんて苦い……。不味い……）

味覚が痺れそうな程不快な味。自然と眉間に皺が寄る。それでもこれは捜査の為だと言いつ聞かせ、最後の一滴まで白濁液を受け止めた。

「では、どれだけ出たのか確認する為にここに吐き出してください」

「はああ……んおえええ……」  
バヘリアが差し出してきたグラスに精液を吐き出す。

「あつふ……はああ……なんて……量だ……こんなに……」  
グラスに溜まった精液の量は思った

以上に多かった。こんなものが自分の口に……そう考えると涙さえ零してしまいそうだった。

「さあ、次ですよ。お客様はまだまだいるのですからね」

だが、悲しんでいる暇はない。

大勢の男達が肉棒を剥き出しにし、先端をケイティに突きつけてくる。

（……これを全部？）

血の気が引く音が聞こえた気がした。

\*

「んっじゅ……じゅぼっ……おっぼ……んっんっ……ふじゅうっ」

自分を取り囲む男達に奉仕を行う。肉棒を口で啜え、両手でペニスを激しく扱いた。

「くおおっ！ 出るっ!!」  
この奉仕に歓喜の表情を浮かべながら、男達は射精してくる。

「あつぶ……ぶびゅうっ！ ふうっ」  
口の中に精液が広がる。手も精液でグシヨグシヨだ。いや、手だけではすまない。白濁液は肉体や髪にまで飛んできた。

（生温かい……気持ち悪い……）  
おぞましさに吐き気さえ感じる。

「休むな！ 次はオレだ！」  
が、男達は気を遣ってなぐれない。

容赦なく肉槍を突きつけてきた。

「んっちゅ……れるる……はふううっ……んっんっんっ」

突きつけられた二本の肉棒を舐め回し、時には「ああ……こんな……胸でなんて……」乳房でペニスを挟みながら

ら肉先を舐めたりなども行った。

「おら！ いくぞっ!!」

中には乱暴な男もおり、無理矢理口腔に肉棒を挿入してきたりもした。

「おぼおおっ!!」

喉奥まで肉槍で突かれてしまう。

「ごっぼ……にや……にやにを……しゅるううっ!!」

反射的に男を睨んだ。

「なんだその目は？ というかその言葉遣い……パニーガールにしては何か偉そうな気が……」

男が首を傾げてみせてくる。その言葉遣いや態度は実にわざとらしいものだった。こちらの正体を知っていて、なお惚けているかのような……。

「ふえ？ あ……ちが……しゅ……しゅみましえん。しよの……も……もうしわけありましえん……」

が、男のわざとらしさにケイティは気づけない。  
（バレルわけにはいかない。ここは……従わないと……）

必死に自分に言い聞かせ、肉棒を締めつけるように口唇を収縮させた。

「おお、いいぞ！ やっぱお前はただのパニーだな！」  
「しようでしゅ……ただの……おっぼ……あししゅたんとれ……しゅう」

「そっか……なら、こうしてもいいよな！ おらおらおらっ!!」

言葉と共に男はピストンを開始してきた。まるで膣を犯すような勢いで肉槍を叩きつけてくる。

「ごびよおおっ！ ぶっぼ！ おぼっおぼっおぼおおっ!!」

これに対し何もすることはできない。ただ玩具みたいに頭を前後に揺さぶられた。

「出るぞっ!!」

やがて男は射精を開始する。

「あつびや……ぶびよおおっ!!」

その射精量は尋常ではない。これまでの男達を遙かに超えるほどのものであり、頬が内側から膨れ上がった。しかも、それだけでは終わらない。鼻からも溢れ出してしまふ。

「ぼびよおおっ!!」  
鼻水みたいに精液を垂れ流しながら、肉棒の痙攣に合わせるようにケイティは肢体を震わせた。

\*

まさに地獄のような時間だった。ただ、そのような状況でもケイティは己の仕事の忘れてはいなかった。

フラフラになりながらもカジノの様子をしっかりと観察する。

（このカジノ……客の方が負けていることが多い。つまり、この状況じゃ得たチップを実際の金に換えることなんかできない。寧ろ客はチップを取られていくだけだ。これでは現行犯で逮捕はできない。まさか……私を警戒しているのか？ 私の本当の目的が捜査であることを知っている？ いや、そんなことはないはずだ。大丈夫。時間をかければ必ずポロだって出るはずだ）

そう考えることで必死に自分を支え

黒猫との戦い  
エンディングは……

前号までのあらすじ

蛇眼破壊の妄執に憑かれた黒猫、担任教師でもある彼女を救うため、睦月は黒猫とセツクスすることに。一方、先輩天使ラファに介抱されるエンジューは、不穏な言葉を耳にする。

FETUSが……  
消滅……？

そう聞こえた  
ような……

おや  
目が覚めましたか

web版コミックヴァルキリーでも連載中! <http://www.comic- Valkyrie.com/>

# 思春期なアダム

第23話

F U I L E Y E S

ヴァルキリーコミックス 巻 好評発売中  
あとみっく文庫 巻

あ……はい

……て

なんで  
入ってくるん  
ですかっ！

おっ

なんでと  
言われましても

眠っている妹を  
風呂に放置するほうが  
問題でしょう

身体は  
清め終わり  
でしたが

まだ一番大事な  
仕上げをして  
いませんからね

ええっ!?

か……  
身体洗ったの  
兄さんですか!?

はい  
よほど疲れた  
のでしょね

帰り道で  
眠ってしまって

そのままベッドに  
運ぶのもいささか  
躊躇ためらわれる有様  
でしたので



さ……  
仕上げと  
いきましよう



いまさら裸くらい  
気にする仲ですか

君の事は  
小さいころから  
知っている

……まあ  
そうですけど



今日は  
がんばりすぎです  
ケアをして  
おかないと



え……あの……  
大丈夫ですよ  
あたし別に

いけません

黒猫さんからの  
ダメージはともかく

蛇眼が引き出した  
力のせいで  
貴女の肉体フレストにかかった  
負荷は計り知れない

現に帰り道でも  
疲労で眠りこけて  
しまったでしょう？

命令です  
治癒を受けなさい

……はい

……なんで  
だろう……  
前は別に平気  
だったのに

恥ずかしい…

では  
始めましょうか

ズル…



.....あたたかい...

ぬる...

.....気持ちいい...

力が戻って  
くるよじな.....

思い出しますね  
昔もよく  
こうしたものです

はあ

ふー.....



# 幻装神姫 フレア

催眠に穢された聖性

あまくさしろ  
小説 **天草白**

第4話 宵徳と享楽の輪姦！ 変身ヒロインの陥落

みやしろりゅうたろう  
挿絵 **宮代龍太郎**

ついに最終回！ 苛烈な催眠陵辱によって  
人々の信頼を失ったフレアは絶望し、悪へとその身を染める……

「ふうっ」

放課後、校舎を出た桃香は全身を襲う脱力感に深いため息をついた。

怪人クラーケンエデンは一蹴したものの、エネルギーが尽きかけていたため、戦闘員を相手に予想外の苦戦を強いられたのだ。

それでも最後は男子生徒たちを守りたいという強い心にFEDライブが呼応し、その力で戦闘員たちを蹴散らすことができた。

そう、フェアリーフレアは勝利したのだ——それはずななの。

「なんだろう、この感じ……胸の奥がざわざわする」  
自分は本当に勝つたのだろうか。正義のヒロインとして大切な何かを失ってしまったのではないだろうか。

そんな漠然とした不安が心から消えなかった。

——桃香は気づいていなかった。

怪人に勝利したのは真実だが、その後の「戦闘員を蹴散らした」というのは、ドクターゴルバが催眠によって植えつけた偽の記憶にすぎないことを。

そして、その際に強いられた屈辱の肛虐や排泄を記憶から抹消されていることも——。

「ねえ、あの噂聞いた？ フェアリーフレアにはがっかりよね」

「ネットの掲示板で見たよ。私、懂れてたのになあ」

「正義のヒロインが聞いて呆れるよね」

校門に向かう途中で、女子生徒たちの会話が耳に入り、桃香は足を止めた。スマホを取り出し、慌ててネットの大手掲示板を検索してみる。

『正義の变身ヒロインとして有名なフェアリーフレアが陰で男子生徒を食いまくってる件』

「フェアリーフレアは糞ビッチのヤリマン」

『学校でおもらしするフェアリーフレアさん(笑)』  
『痴女だったなんて幻滅しました。フェアリーフレアのファン辞めます』

いずれも数日内に立てられたスレッドだ。内容もフェアリーフレアを嘲弄し、あるいは中傷するような書きこみが並んでいる。

「何よ、これ……」

桃香はかすれた声でうめいた。さらに検索すると似たようなスレッドは乱立している。まさに『炎上』状態だ。見るに堪えないとはこのことだろう。

自分は確かにブラックエデンを退け、人々を守ったはずなのに、いわれなき誹謗中傷を受けている——わけが分からなかった。

数日後。駅前の繁華街に悲鳴が響いていた。

「さあ、怯えろ人間ども！ 貴様らの恐怖が、絶望が——このケンタウロスエデン様にさらなる力を与えてくれるのだ、くくく……！」

パニックになって逃げる人々を追いながら、異形の怪人が哄笑する。

ケンタウロスエデン——人の上半身と馬の下半身を併せ持った、神話に出てくるケンタウロスのような姿の怪人である。

手にした弓で無造作に放った矢が、逃げ遅れた女子校生にまっすぐ飛んでいく。そのまま胸元を貫くかと思われた瞬間、横合いから飛んできた輝きが矢を弾き飛ばした。

「むっ!？」

「そこまでよ、ブラックエデンの怪人！」

異形の怪人の元に駆け寄った紅の髪の少女——桃香が颯爽と告げる。

「FEDライブ・イグニッション！ 顕現せよ、妖

精の衣——ブレイジングドレス・マテリアライズ！」

右手に掲げたペンダントがまばゆい光を放った。同時に、えんじ色のブレザー制服が光の粒子と化して弾け散り、桃香の美しい裸身が露わになる。

細く引き締まっていながらも、胸や腰に豊かな丸みを帯びた理想的な女体にレオタード状のボディーツが、アームスリーブやブーツが、そしてフェアリーフレアの象徴ともいえる胸元の宝玉が——次々と装着されていく。

「っ……!？」

ふいに、股間に疼くような違和感が走り抜けた。すでに何度となく行ってきた変身だというのに、今日はいつもと感触が違う。

(そうだった、今回から博士が新開発したFEDライブの補助装置を着けてるんだっけ)

下腹部に装着した装置は短い棒状で、一見してパイプレーターを連想させる淫靡なデザインだ。膈内に挿入して使用するため、装着すると、両足の付け根に甘い疼きを伴って響く。気にはなるが、今は戦いに集中するときだった。

光が晴れると、桃香はフェアリーフレアとしての変身を終えて、怪人の前に敢然と立っていた。

「あれって、噂のフェアリーフレアか……?」

「もう大丈夫よ、みんな！」

ざわめく人々に、フレアは凛とした顔で叫んだ。だが、人々の口から出た言葉は、彼女への感謝でも期待でもなかった。

「清纯そうだけど、ビッチって噂なんだろ……」

「ああ、ネットで見たぞ。毎夜、男をとつかえひつかえてやりまくってるとか……」

「へへ、俺もお相手してもらいたいぜ……」

彼らの声には変身ヒロインに対する明確な欲情がこもっていた。

(やつぱり、噂が尾を引いてる……ただけ!)

フレアは気を取り直して、迫りくる戦闘員を拳と蹴りで迎撃した。前回は思わぬ苦戦を強いられた戦闘員たちだが、通常のコンディションならば、しょせんフレアの敵ではない。

あつという間に十数名の戦闘員たちがノックアウトされ、地面に倒れ伏した。残りの戦闘員たちは恐れをなしたように後ずさる。

「次はあなたよ、ケンタウロスエデン」

「ふん、我が同胞の憎き仇、フェアリーフレアか」

怪人が憎々しげに変身ヒロインをにらんだ。

その視線を真つ向から見据え、フレアは突進する。今自分が為すべきことは一つ。誹謗中傷などにひるまず、ただ目の前の人たちを救うことのみだ。

「ギガフレイムガンバー！」

絶対の自信を持って放った必殺の斬撃は、しかし、

「無駄だ」

怪人が無造作に突き出した右手に、あつさり刃を突き込まれ、受け止められてしまう。ジュウツと音を立てて、怪人の手のひらがわずかに焦げるが、ダメージらしいダメージはその程度だ。

「そんな!？」

「くく、今までの怪人はその技で倒せたかもしれんが、俺は違うぞ」

ニヤリと笑い、刀身を放すケンタウロスエデン。

「俺に搭載された『F.Eドライブ(アポカリプスⅡ)』はドクターゴルバが新開発した改良型だ。出力は従来型のおおよそ五倍——お前の精神エネルギーでは俺を切り裂くことはできん！」

呆然と後ずさったフレアに、すかさず怪人が突進した。強烈な体当たりを受けて吹き飛ばされる。

「なんだよ、弱いじゃねーか」

「毎晩、男とエッチばかりして疲れてるんだろ」

失望したようなギャラリに、フレアは唇を噛みしめた。ネットの影響力は恐ろしいものだ。つい先

日まで正義のヒロインとして祭り上げられていた彼女が、今は侮蔑と欲情の対象に墮落してしまった。

「それでも、私はっ……!」

剣を杖に立ち上がると、ふたたびケンタウロスエデンに向かっていく。相手の怪人は強い。今まで戦った中でも最強クラスだろう。

「私は——負けない! 絶対に皆を守ってみせる」

叫んで、ふたたび地を蹴るフレア。

そのとき、股間から腰の深い部分にまで重く響くような疼きが走った。膣内の補助装置は常に軽く振動しているため、全力で突進すると腰の芯にまで響くのだ。構わずフレアは加速する。

「突進力の勝負でこのケンタウロスエデンに勝とうとは片腹痛い!」

振り下ろした聖剣の一撃は、怪人の前蹴りによつてあつさりと弾き返された。さらに繰り出された二発目の蹴りにふたたび吹き飛ばされてしまう。

地面に叩きつけられ、内臓が潰れそうなほどの衝撃が駆け抜けた。

「ぐっ……ごほっ……」

血を吐きながらも、フレアは剣を杖代わりにしてよろよろと立ち上がる。パワーの差は歴然だ。だけど、決して諦めない。

そんな意志に呼応し、手にした聖剣がまばゆくきらめく。いや、聖剣だけではない。胸元の宝玉も神々しいほどに輝いていた。

「お、おい、まだ戦うのかよ……」

「俺たちを守るために……?」

人々のざわめきから、いつの間にか侮蔑の響きが消えていた。彼女に向けられる視線も欲情を孕んだものから変化を遂げる。

「が、がんばれ」

確かに、聞こえた。彼女を応援する声。しかも、それは一つではない。

「負けるな、フェアリーフレア……!」

「俺たちを守ってくれ、たのむっ……!」

いくつもの声が傷ついた心と体を癒やし、支えてくれるようだ。

「安心して、みんな。私が奴を倒すから。倒して守ってみせるからっ……!」

「ふん、少しはいい面構えになったが……気持ち一つで勝てるほど、俺は甘くないぞ」

「あいにくね」

不敵に笑って、フレアは地を蹴った。

「気持ち一つですべてが変わる——それがフェアリーフレアの力よ! F.Eドライブ、全開!」

聖剣を大上段に掲げると、刃先が弧を描いてケンタウロスエデンに叩きつけられる。

「その技は通じんと言ったはずだ!」

「いいえ、今度は——切り裂けえっ!」

フレアの意志の高まりに応じて、聖剣の刀身が黄金の輝きに包まれた。

「がっ……!?! ぐあああああ……!」

受け止めようとした怪人の右腕が、血しぶきとともに切断される。

「『アポカリプスⅡ』の生み出すエネルギーフィールドを切り裂いただど!」

「これが私の——正義の心! その強さよっ!」

叫んでさらに剣を振るフェアリーフレア。

黄金の斬撃がケンタウロスエデンの左腕をも切断し、さらに返す刀で胴体を両断した。

「か、勝った……!」

はあはあと肩で息をしながら、フレアは聖剣をX字に振って血糊を飛ばす。補助装置を装着した股間がまたズキンと疼いた。装置の緩やかな振動が膠粘膜に心地のよい刺激を与え、秘孔の奥からヌルリとした愛液が垂れ落ちてくるのを感じる。

足元に横たわる怪人はすでにピクリとも動かない。視界がぼんやりとにじみ、全身からすうっと力が抜けた。その場に崩れ落ちそうになるのを、両足に力を込めて踏ん張り、なんとか踏みとどまる。さすがに新型の怪人を切り裂くだけのエネルギーは、フレアを極度に消耗させていた。

「ま、まさか、ケンタウロスエデン様が……」

残った二十人ほどの戦闘員たちが呆然とした様子でうめく。もはや戦意を喪失しているようだ。（だけど、油断は禁物ね）

前回、怪人を倒した後に、戦闘員たちに苦戦した記憶がよみがえる。フレアは油断なく聖剣を構えた。「ちゅ……ん……むむ……ふああ……お」

突然、頭上から卑猥な声が流れ出したのはそのときだった。

「えっ……!?!」

驚いて振り仰ぐと、ビルに設置された巨大な街頭モニターに何かの映像が映し出されている。薄暗い倉庫のような場所に集まった数人の少年たち。そしてその中心にいる赤い髪の美少女――

「あれ……は……!?!」

フレアの瞳が愕然と見開かれ、激しい狼狽で揺れ動いた。なぜという疑問と、どうしてという絶望感が同時にこみ上げ、全身を震わせる。

「ふあん……む……みんな、遅し……ちゅ、ぷう」

猛々しくいきり立った肉根。

それを艶めかしく唾えこむ赤い口。

さらに別の肉茎をさするしなやかな指先。

ぐちゅ、ぐちゅ、という唾液や体液の音。

モニターに映し出されているのは――男子生徒たちの前に跪いたフェアリーフレアが、彼らのペニスに口を含み、両手で扱き、フェラチオと手コキ奉仕をしている映像だった。

「くおおおつ、す、すげえテクニク……!」

「ふ、お……おお……チンポ、蕩けそうだっ……」

ぐちゅ、ぐちゅつ、と濁った淫音がひっきりなしに響き、少年たちの歓声と嘆息がこだまする――。

「お、おい、あれつてフェアリーフレアだよな……」

「やっぱり噂は本当だったのか……」

人々はざわめきながら、モニターの映像を見つめている。最初は驚きが、次に欲情が、彼らの瞳に浮かび上がった。

フレアもまた呆然とモニターを見上げていた。いつの間にか隠し撮りしていたのだろうか。

「ち、違うの、これは――」

「変身ヒロインのフェアラ、エロすぎだろ……」

「ああ、AV女優も顔負けだ。おまけに嬉しそうな顔でチンポを唾えたり、扱いたり……」

人々はフレアの反論を聞きもせず、モニターに魅入られているようだ。

「だから違うの! トレーニングなのよ!」

ふたたび叫んだが、やはりその声は彼らには届かない。映像のインパクトが強すぎるのだ。

そもそもFEDライヴのことを知らない彼らに、あれは訓練のための行為だと説明したところで信じてもらえるかどうかは疑問だった。

きつと彼らには、フレアが嬉々として男の肉棒を口や手で愛撫しているようにしか見えないはずだ。ネットの噂通り、変身ヒロインの正体はビッチだった――いったんはフレアを応援してくれた人たちの顔に、ふたたび失望の色が広がっていくのが分かった。

「お願い……信じて」

振り絞るように、フレアはうめく。

「そ、そうだな……さつきは俺たちを守るために、強い怪人と必死に戦ってくれたじゃないか!」

その声が届いたのか、観衆の一人が叫んだ。「言われてみれば、あんな映像は作り物かもしれない。俺はやっぱりフェアリーフレアを信じるぞ」

「そうだ、命がけで俺たちを守ってくれたもんな」

「悪の組織ならあんな卑怯な映像を捏造するくらいやりかねないだろうし……」

いったんざわめいたギャラリたちも、徐々にフェアリーフレアを信じるという気配に傾いていく。フレアは安堵感で心が軽くなるのと同時に、泣きそうなくらいの感動を覚えていた。人から信じてもらえる喜びが、全身を熱く疼かせた。

「ええ、信じてください。私は――」

言いかけて、ハッと顔がこわばった。

本当は捏造ではない。映像で流れている光景は実際にフレアが体験したことなのだ。

だがそれを告げれば、人々の自分に対する信頼は地に落ちるだろう。悟られてはならない。あれが真実だということ――。

「私は、悪に屈したりしません。あんないやらしいことをするわけないじゃないですか。全部、ブラックエデンの卑劣な罠なんです……!」

嘘をついていることの罪悪感が胸の芯をズキンと痛ませた。

「くっ……はあつ?! あ、ぐ、お……おお……」

突然、股間に強烈な痺れが駆け抜け、フレアはか細い声で喘いだ。膝から力が抜け、その場に崩れ落ちそうになる。

両足を踏ん張ってなんとか堪えるものの、秘所を襲う甘い痺れは津波のように第二波、第三波となつて次々と訪れる。かつんつ、と音を立てて、フレアの股間から何かが抜け落ちた。

「えっ、こんなものを着けて戦つたのか?」

地面に落ちたものを見て、人々が騒ぎ出した。それは、男根によく似た形状の淫具――バイブレーター

「……」  
「お、おい、今落ちたのって……パイプ……?!」  
「フェアリーフレアってやっぱり痴女……?!」

「実際はパイプそっくりの装置なのだが、事情を知らない人々から見れば淫具にしか見えないだろう。」

「……誤解しないで、これは……FEDライヴの出力を上げる……ほ、補助装置で……」

「フレアは慌てて説明しようとするが、パイプの強烈な振動に晒された腔内がまだ痺れていて、声にも体にも力が入らない。」

「それでも、この誤解はすぐに解かなければならぬ。地面に落ちているのは断じてパイプレーターなどではない。淫具をつけながら戦うなど、変態以外の何物でもない。」

「……フレアは気づいていなかった。単なるパイプレーターをFEDライヴの補助装置と思いこまされる催眠をかけられていることに。」

「そして怪人を倒したタイミングを見計らい、基地のモニターでそれを見ていたドクターゴルバが遠隔操作でパイプを作動させたことも。」

「あれ、パイプじゃないか……? あんなものを入れて戦ったのかよ……!」

「様子がおかしかったのも、それで……」  
「人々のざわめきが次第に大きくなっていく。周囲の雰囲気は、先ほどまでのフレアを擁護するものから、非難するそれへと変わり始めていた。」

「何が『信じてください』だよ」  
「さっきの観衆が叫んだ。」

「せつかく信じようとしたのに、裏切りやがって!」  
「なまじ一度は信じようとしただけに、それを覆された落差が大きかったのだろう。彼の声を皮切りに」

「失望と怒りの雰囲気の人々の間に伝播していく。」  
「嘘ついてたんじゃないか! 俺たちを馬鹿にするのめいがかげんにしろ!」

「やっぱりピッチなのかよ……!」  
「俺たちを守るために戦ってくれてると思ってるのに……ガツカリだ」

「あーあ、変身ヒロインがただの変態だったなんてな。幻滅したよ……!」

「うろたえるフレアだが、反論の言葉が出てこない街頭モニターで流れている映像も、股間にパイプ——実際には補助装置なのだが、彼らは信じまい——を入れて戦っていたことも、すべては事実なのだ。」

「何が違うんだよ! じゃあ、なんでパイプなんて入れて戦ってたんだ?」  
「ピッチのくせに今さらシラを切るな!」

「そうだ、この変態の雌豚が!」  
「集団心理というべきか、市民たちの罵詈雑言はいつたん加速し始めると、もはや止まらなかつた。」

「たちまちフェアリーフレアを変態だピッチだと糾弾する声があちこちから上がる。」  
「フレアはピッチ! フレアは変態! フレアは淫乱! フレアは雌豚!」

「市民たちの連呼がフェアリーフレアに容赦なく浴びせられた。なぜ、と声にならない悲痛な叫びが胸の中でこだまする。心が押し潰されそうだった。」

「私は今までもずっと、あなたたちを守るために必死で戦ってきたのに——」  
「ときにはブラックエデンの卑劣な罠にかかり、大切な処女を失ったり、そのショックで戦う力を失いかけたりもしたが、それでも挫けなかったのは、人々を守りたいという強い心があったからだ。だが彼らは今、そんなフレアを蔑み、拒絶している。」

「(どうして、信じてくれないの?)」

「目の前がぐるぐると回り出す。両足に力が入らず、まるで空を飛んでいるように全身がふわふわとした浮遊感に包まれる。」  
「現実感が失せていく。いや、これは本当に現実なのだろうか——」

「現実逃避しかけた意識を引き戻したのは、横合いから押し寄せた獐狂な雄たけびだった。ハッと振り返ると、怪人の一団が路地から現れる。」

「獅子や馬などの動物と人間を融合させたような半獣人タイプや昆虫を巨大化させたようなタイプ、あるいは触手を全身から生やした怪物やアメーバを思わせる不定形の異形まで、さまざまな姿を持つおぞましい怪人軍団だ。」

「ひいつ、化け物の集団……!」  
「先ほどまでフレアを糾弾していた市民たちも、さすがに顔をこわばらせた。」

「心配しないで、私が皆を守るから」  
「フレアは気を取り直し、凛と宣言した。」

「そうだ、自分を信じてもらうためには、悪と戦い市民を守る姿を見せることしかない——決意を胸に、フレアは聖剣を構える。」

「えっ……!」  
「その刀身が、まるで映像にノイズが走るようにブレてぼやける。もともと聖剣ブレイジングソードはフェアリーフレアの正義の意志を物質化したものだ。その具現化が薄れている——!」

「訝るフレアの前に怪人たちが歩み出る。」  
「我らが新たな幹部、フェアリーフレア様」  
「ブラックエデンの力とならんことを」  
「怪人たちはフレアの足元にいつせいに跪いた。」

「な、何を……言……?」  
「あまりのことにフレアは呆然と立ち尽くした。」

怪人たちはフレアに忠誠を尽くすように、跪いて深々と頭を下げています。

「お、おかしな真似はやめて！ 私はあなたたちの仲間になつたりしない——」

狼狼のあまり、言葉が上手く出てこない。「さあ、フレア様はお下がりでください。ここは我々が人間どもを駆逐してみせましょう」

「フレア様に人間どもの恐怖と絶望を捧げよ」

「恐怖と絶望を捧げよ！」

怪人たちや戦闘員たちが唱和した。

「違う……違うの、これは……」

あまりの出来事に頭がついていかない。さすがの彼女も惑乱し、その場に立ち尽くしてしまふ。

「さあ、狩りの時間だ！ 男は殺し、女は犯せ！」

怪人の一人が叫んだ。他の怪人と戦闘員たちの闘いの声がそれに呼応する。

「や、やめなさい！」

ワンテンポ遅れて、フレアが怪人たちを制止しようとして駆け寄る。だが彼女の前に、数人の怪人が通せんぼをするように立ちはだかつた。

「行かせませんよ、フレア様」

「幹部は軽々に動くものではありません。人間どもが殺され、犯されていく様をそここどご覧ください」

怪人たちはいずれもニヤニヤ笑いを浮かべながらフレアを諷める。

「ふざけないで！」

聖剣を構えたフレアは、怒りの声を上げて手近の怪人に斬りつけた。

いや——斬りつけようとした。

ガキン、と硬い金属を叩くような音とともに、聖剣があつさり弾き返される。怪人の防御力が高いのか——訝しんだところで、ハッと気づく。

「私の……力が……」

「純潔を奪われ、恥辱を味わわれ、お前の精神力

はすでに怪人と戦えるレベルにはないのだよ、フレア！

ふいに、頭上から愉快げな哄笑が響き渡つた。

「ドクターゴルバ！」

いつの間にか街頭モニターの画像が切り替わつている。画面の中では、悪の科学者が満面の笑みを浮かべていた。

どうやら、これはブラックエデンのアジトからの中継映像らしい。だが人々は混乱の真つただ中で、その映像に注意を向ける者はほとんどいなかった。

「精神が弱体化した今のお前に、もはや怪人を止める力などない。奴らが人間を襲い、辱める光景を黙って見ていくがいい」

「そんな……」

フレアが呆然と立ち尽くした次の瞬間、阿鼻叫喚の光景が始まつた。

「うわあああつ、ぎやあつ……」

「いやああつ、こないでええええつ」

怪人軍団の振るう拳が、蹴りが、爆弾さながらの威力で逃げ遅れた男たちを吹き飛ばしていく。怯えて立ちすくむ女たちは別の怪人たちに捕まり、押し倒され、服を破かれていく。

男たちの苦鳴と女たちの悲鳴が交錯する、まさしく地獄絵図だつた。

「やあああつ、だめつ……初めて、だからあつ……入れちや嫌……きやあああ、あ、ぐうつ……おお」

犬の怪人に組み伏せられた女子校生の悲痛な叫び声は、猛々しい剛直を秘孔に無理やりねじこまれ、付け根まで深々と潜りこんだところで掻き消えた。

言葉通り処女だつたのだろう、膣の縁からピンク色の鮮血が流れ、小さな肉孔は限界まで伸び広がつて怪物のペニスを啜えこまされている。

「ふひひひ、俺みたいな化け物が初体験の相手で残念だつたなあ。さすがに締まりがいいぜ、そらつ」

バージンを奪つた犬怪人は勝ち誇つた笑い声とともに、腰を振り始めた。ぐちゅ、ぐちゅ、と結合部から血とも体液ともつかない濁つた音が響く。

「いやああつ、来ないでつ！ 来ないでええつ！」

別の場所では、スーツ姿のOLが二体の怪人に引き据えられていた。一体は鳥の頭と翼を持った怪人、もう一体はウツボカブラを思わせる無数の触手を生やした植物型の怪人だ。

「おらつ、早くしゃぶれよ。もうギンギンなんだ」

「へへへ、俺は下の口で飲みこんでもらうぜ」

鳥の怪人が細長いペニスをOLの口に無理やり押しこみ、植物怪人の触手ペニスがスカートの隙間から潜りこみ、そのまま秘孔を貫く。

「ん、ぐ、おお……はぐ、うっ!? ん、ふああ」

上下の口を同時に犯されてカッと目を見開いたOLだが、すぐに快感がこみ上げてきたのか、トロンと蕩けた顔になつた。

「へっへっへ、ケツは初めてか、奥さん」

「や、やめてください、そんな場所……！ 主人にだつて、されたこと……ぐ、が、はあつ……」

さらに別の場所では、アナルの処女を奪われた人妻が、断末魔のような苦鳴を上げている。

「ずぼつ、じゅぼつ、といやらしく湿つた音を立てて、小さな菊孔に巨大な肉棒が抜き差しされていた。最初は嫌悪感をにじませていた人妻も、やがて性感を開発されてしまったのか、徐々に蕩けた顔を見せ始める。

「あああつ……お尻つ……おひ、りい……どうして、こんな……気持ちいい……ふああ、おおつ……」

「はははは、この奥さん、もうアナルでヨガつてやる！ いいぞ、もつとアクメしろおつ」

愉快げに叫んだ怪人はなおも腰を大きくグラインドさせ、人妻のアナルを犯し抜く。

「こんなの……だめえええつ」

「こんなの……だめえええつ」



夏の汗ばむ体育館、  
他の男の上で  
暑苦しく踊る巫女

小説 ぽいぽい  
NOVEL  
挿絵 みやねあき  
ILLUSTRATION

魔を祓う神巫

# 宮道京香の寝取られ退魔帖

くどうきょうかのねとられたいまちよう



## 登場人物紹介



### 宮藤京香

負けん気の強い退魔師で一族の掟である「初夜」を控えている。幼馴染みの遼拓に対して中々素直になれない。

### 御門遼拓

細かいことは気にしない竹を割ったような性格の好青年。京香とはよく喧嘩になるが戦闘での息はぴったり。

### 狭間君彦

京香のよき理解者である叔父。整体院を営んでいる。今は亡き京香の母に恋心を抱いていたが……。

### 前号までのあらすじ

秘術「神威」を扱う京香は一カ月後に迫った掟、「初夜」を気にしていた。できれば遼拓と……そう願うも一族の決め事には口を出せない。募る不安を胸に叔父を訪ねた彼女の身体は彼の手で穢され、快楽を拒めない身体へ変えられてしまった。

「うう……思い出しただけで、腰が抜けてしまいうだ……っ！」  
 退魔師としてのプライドを総動員して身体の疼きを鎮めようと躍起になる。  
 だがそんな京香の意に背いて身体は微かな衣擦れにさえ敏感な反応を示し、奥底まで挿入された雄根

の形を思い出しては、ショーツの裏で不浄の丸蕾がひくひくとももの寂しく蠢くのだった。  
 (う、ああ……おしり、ジンジンして……おなかの奥、疼くうう……っ)  
 次第に切れ長の瞳はトロロンと湧き、身体中を覆う甘い快感に京香はゆつくりと沈み込む。  
 浅く疼く肉雷を思い切り掻き塗りたい衝動に駆られ、淫らな想念が心の奥底から湧き出てくる。  
 (だめ、頭ふわふわして……変な気持ちに……っ)  
 ズボズボと君彦の肉棒で尻穴の奥をほじくり返された屈辱の記憶がまざまざと思い出される。  
 興奮のあまりぶつくり膨らんだ肉土手から愛液が溢れ、少女の太腿を伝ってシーツの上に乗るまで漏らしたかのように染みを広げていく。  
 若々しい女性の火照りは一向に冷めやらぬまま、京香はただただ布団の中で悶々と自らの身体を抱きしめるのだった。  
 \* \*  
 まとわりつく汗を洗い流して身体を清め、制服に着替えて家を出る頃にはだいぶ淫紋による疼きも収まりを見せていた。  
 通学路を歩きながら京香は思案に暮れる。目下の問題はいかに蛇鬼を討滅するかということだった。  
 (奴さえ倒せば、叔父さんは正気に戻るはずだ)  
 天才退魔師のプライドをかけて、叔父を魔の手から救えるのは自分しかない。だがその救うべき叔父が牙を向けてくる今の状況では……。  
 誰かに相談するべきだと冷静な思考は告げてくる。だがそう考えて真っ先に思い浮かんだ顔を、京香は慌てて頭から追い払った。  
 (いったいあいつに何と言うんだ……あ、あんな辱めを受けたなんて。こんな……如何わしい呪印を植え付けられたなんて……っ)  
 思い出すたびに制服の下で疼き始める淫紋の効果

暁色の雲間から微かな陽光が部屋の中に差し込む。いつもと変わらない清々しい朝の訪れ——。  
 新たな一日の幕開けに家人たちが起き上がる気配を感じながら、宮道京香は柔らかな布団の中で焦燥に駆られていた。  
 「はあ……はあ……んう……っ」  
 枕の上に荒い呼吸が零れ、肩が上下に波打つ。  
 「京香さん、朝ですよ」  
 襖の向こうからお手伝いさんの呼ぶ声が聞こえ、微睡む双眸を慌てて見開く。  
 もう朝？ 信じられない気持ちで布団を持ち上げようとして、隙間からスンと鼻をつく香りが漂ってくるのに気付き、思わず顔を赤らめる。  
 (くっ……昨夜の媚香が、まだ……っ)  
 昨夜遼拓との親を終えた後、訪れた叔父の家で起こった屈辱の記憶が甦る。  
 むわりと鼻腔をかすめる匂いと共に心音がトクトクと脈打ち、きゅうつとお腹の奥が火照った。  
 「熱い……っ」  
 我慢に我慢を重ねてこの夜を耐え忍んでいたというのに、たおやかなガラス細工のような指先がゆつくり吸い寄せられるように下腹へと伸びていくのを

止められない。  
 「くうう、んんっ……！」  
 汗でぐっしよりの白衣を掻き分け、素肌の上をほのかに指先が滑った瞬間、発情した子犬のような甘ったるい溜息が零れ、身体がぎゅつと強張る。  
 (なぞっただけで、こんな……っ)  
 恐る恐る布団を持ち上げ、敏感にすぎるその部位へ視線を下ろすと、可愛らしい下着と白衣の間で妖しげな光が瞬いているのが見てとれた。  
 淫紋——少女の美しい曲線を描く丹田の真上に禍々しく鎮座するその模様を目の当たりにし、京香は今更ながら悪夢のような昨夜の出来事が現実だったことを思い知らされる。  
 (まさか叔父さんが妖魔と結託するなんて……っ)  
 信頼していた叔父に裏切られた証を、京香は憎々しげに見つめる。  
 「んああっ……また、熱っ……っ」  
 それだけでも全身から汗が噴き出し、少女の喘ぎ声に色香が混じった。  
 「はあっ……はあっ……！ くうんんんっ……っ」  
 下腹が煮え立つように滾り、もじもじとこすり合わせる太腿の間で、じわあつと堰を切ったように淫らな染みが広がっていく。  
 (い、いけない……あのときの感覚が……っ)  
 媚香の芳しい匂い、施術と称した君彦の淫猥な手つき——そして、固くそそり立つ肉の銚をお尻の奥に突き込まれる言いようのない感覚。  
 「んん……くう……っ」  
 (うう……思い出しただけで、腰が抜けてしまいうだ……っ！)

の形を思い出しては、ショーツの裏で不浄の丸蕾がひくひくとももの寂しく蠢くのだった。  
 (う、ああ……おしり、ジンジンして……おなかの奥、疼くうう……っ)  
 次第に切れ長の瞳はトロロンと湧き、身体中を覆う甘い快感に京香はゆつくりと沈み込む。  
 浅く疼く肉雷を思い切り掻き塗りたい衝動に駆られ、淫らな想念が心の奥底から湧き出てくる。  
 (だめ、頭ふわふわして……変な気持ちに……っ)  
 ズボズボと君彦の肉棒で尻穴の奥をほじくり返された屈辱の記憶がまざまざと思い出される。  
 興奮のあまりぶつくり膨らんだ肉土手から愛液が溢れ、少女の太腿を伝ってシーツの上に乗るまで漏らしたかのように染みを広げていく。  
 若々しい女性の火照りは一向に冷めやらぬまま、京香はただただ布団の中で悶々と自らの身体を抱きしめるのだった。  
 \* \*  
 まとわりつく汗を洗い流して身体を清め、制服に着替えて家を出る頃にはだいぶ淫紋による疼きも収まりを見せていた。  
 通学路を歩きながら京香は思案に暮れる。目下の問題はいかに蛇鬼を討滅するかということだった。  
 (奴さえ倒せば、叔父さんは正気に戻るはずだ)  
 天才退魔師のプライドをかけて、叔父を魔の手から救えるのは自分しかない。だがその救うべき叔父が牙を向けてくる今の状況では……。  
 誰かに相談するべきだと冷静な思考は告げてくる。だがそう考えて真っ先に思い浮かんだ顔を、京香は慌てて頭から追い払った。  
 (いったいあいつに何と言うんだ……あ、あんな辱めを受けたなんて。こんな……如何わしい呪印を植え付けられたなんて……っ)  
 思い出すたびに制服の下で疼き始める淫紋の効果

を感じて、思わず憂鬱な溜息が口をつく。

「おはよう京香ちゃん、どうしたの？　なんだか元気なさそうだね」

いつの間にか学園の校門前に着いていた京香は、顔馴染みの同級生たちの挨拶で我に返った。

（ダメだダメだ、退魔業は退魔業、学業は学業だ。気持ち切り替えないと）

「ああ、なんでもない。少し考え事をしていて」

「ああ〜！　もしかして御門君のことかなあ？」

「な、な、な……！　どうしていきなりあいつの名前が出てくるんだ！」

「仲良さそうですよお二人、放課後なんかいつも二人で帰られてますし」

「そうそう、しょっちゅう痴話喧嘩してるし〜？　わかりやすいよね。付き合ってるの？」

「ないないない！　付き合ってるない！　帰るのもまたまた方向が同じなだけであって——もう、からかわないでくれ」

「ごめんごめん。京香って頭もいいし運動もできてまさに高嶺の花って感じなのに、なーんかちよっかい出したくなるんだよね」

「でもさ、京香ちゃんと御門君って幼馴染みなのは間違いないんでしょ？」

「う、うん……：だけども、あいつはただの……」

ただの幼馴染み。そんな風に思っていたのはいつ頃までだったろうか。

真つ暗闇のしとどに降り注ぐ滝の中、遼佑の射すくめるような視線がゆつくりと近付いてくる。冷たいような温かいようなあの唇の感触は、きつと一生忘れられないに違いない。

（いつからだだったっけ……あいつのこと、こんな気持ちで想うようになったのは……）

退魔師として生まれた女は、いつか家柄にふさわしい男と婚儀を結ぶ。そこに当人たちの意志が介在

する余地はない。

それでも京香は、たとえ今だけでもこの温かな気持ちを大切にしたいと思っていた。

「お、京香赤くなってるー！　ほんとわっかりやすいなあ」

「ち、ちがつ……！　私はただ……っ」

「京香にこんなな想ってもらえるなんて、御門君が羨ましいねえ」

そんな他愛もないガールズトークに花を咲かせる女学生の足が止まったのは、昇降口へ差しかかるうというところだった。

生徒用玄関の前に五、六人の生徒がたむろして、その中で一人の女の子が佇んでいる。

「やば、あれ三年の村瀬たちだよ」

周りの級友たちが揃って眉をひそめる。村瀬という名前は京香も聞いたことがあった。教師も手を焼く折り紙付きの不良グループのリーダーで、親が有力者なのをいいことに学園内で好き勝手しているという噂だ。

「裏口に回ろっか」

「だね、絡まれたら面倒だし」

クラスメートたちが一斉に踵を返す中、京香の視線は不良たちの中に注がれたままだった。

「あの女の子、なんだか嫌がってるように見える」

「うーん？　まあそう見えなくてもいいけど。ちよちよつと京香っ！」

おっかなびつくりの級友たちが見守る中、京香は堂々と不良グループへと向かって進んでいく。

「少しいいだろうか？　その子、嫌がっているように見えるのだが」

「ああ？　なんだ、お前？」

その場にいた男たち全員が剣呑な目つきで京香を睨みつける。制服をだらしなく着崩し、校則違反の染髪は当たり前、近寄ってみれば煙草の臭いさえ漂

ってくる。

「俺らはちよつとはかしくいつに説教してるだけだ。人が挨拶したら返すのが当然だろってなあ。わかったらとつとと失せろ」

「理由はわかったから私も言わせてもらう。その子をさっさと放して失せろ」

間髪入れず、あまりに悠々と言い放った京香の一言に不良たちも思わず言葉を失う。口を開いたのは、女生徒を抱いていた角刈りの男だった。

「お前、まさか俺たちのこと知らねえわけじゃねえよなあ？」

「知っている。学園で札付きの不良たちだろう？　それがどうした」

「んじやあ自業自得だな。これからなにが起こっても全部お前が悪いってことだ」

おそろく彼がリーダーの村瀬なのだろう。彼が顎をしゃくって指図すると、脇にいた不良の何人かが京香の身体を押さえ込んだ。

「馬鹿な女だな、村瀬さんに立てつくなんてよ」

「よく見りや結構イケてる身体じゃねーか。今すぐ土下座して俺らの女になるって許しを請うなら、その綺麗な顔は傷付けないでおいてよ——」

刹那、彼らの身体は地面から離れていた。

「ぎゃっ——!!」

へらへらと笑っていた男たちにしてみれば突然天地が入れ替わったように錯覚しただろう。京香のすらりとした脚が一瞬で彼らを薙ぎ払い、真つ逆さまに地面に叩きつけた。

「て、てめえっ！」

周囲で同じように薄ら笑いを浮かべていた不良たちの顔から一瞬で色が消える。

猪突猛進に突っ込んでくる相手など、京香にとつてはなんの脅威にも映らなかつた。

「ぐあああっ！」「痛ってええっ！」「クソ、なんだ

この女あつ！」

「みるみるうちに京香より一回りも二回りもガタイのいい男たちが投げ飛ばされていく。

「落ちて逃げ馬鹿野郎ども！ ちょっととは頭働かせろ！ ちっ……たかが女一人に情けねえにもほどがあるぜ」

傍観していた村瀬の怒鳴り声が響き渡った。

「女のくせになかなか腕つぶしに自信があるみてえだな。丸つきり馬鹿ってわけでもなさそうだ」

今度は村瀬自ら京香の前に進み出る。不良たちを束ねるだけあってその体格は優に学生離れしていた。

丸太ほどもある二の腕、開襟シャツをはち切らなばかりの頑丈な胸板、背丈など京香の頭二つ分は抜けている。その脇にはいまだに俺のものだといわんばかりに女生徒を抱え込んでいた。

「残念だが彼女を利用して無駄だ。彼女を庇いながらお前一人投げ飛ばすのなんて訳もない」

機先を制して京香はにべもなく構えを取る。無抵抗の人間を人質に取られようと、所詮はただの学生。退魔師として数々の修行を積んできた京香の敵ではなかった。

「ククク、お見通しってわけか。そうか……なら、あいつらはどうなるんだろうな？」

村瀬の視線が京香の後方へと向けられる。ハッとして振り返った先には予期しなかった光景があった。

「ぎ、京香ちゃん……っ」

遠巻きに眺めていた級友たちが、いつの間にか不良たちの腕の中に捕らえられている。

「やめろっ！ 彼女たちは関係ないだろっ！」

「それは俺が決めることだ。おっと、動くなよ京香ちゃん、大事なお友達が怪我するところなんて見たくねえだろ？ 妙な武術を心得てるのか知らんが、散々暴れてくれやがって……お前みたいな生意気な女にはちとぎつめのお灸を据えてやらねえとな」

「ぐっ……！ は、放せっ……！」

「ここぞとばかりに男二人が京香に飛びかかり、両脇から羽交い絞めにする。投げ飛ばされた不良たちもよろよろと起き上がり、怒りと欲望の籠もった視線をにやにやと投げかけてくる。

「たしかになあ、よく見りゃいい身体してやがる」

なかでも特に目をぎらつかせているのが村瀬本人だった。スカートの裾から伸びる白磁の太腿を無遠慮になぞり、はち切れんばかりに制服を押し上げる京香の胸をいやらしく撫で上げる。

（くそっ、くそっ……こんな最低のやつに……！）

退魔術を駆使すればどうにでもなる状況だが、一般人に対する使用は掟で固く禁止されている。京香にできるのは射殺さんばかりに村瀬を睨みつけることくらいだった。

「怖いねえ。噛みつかれないようにしねえとなあ」

にやにやと笑う村瀬の手が、むっちり肉付きのいい京香の太腿を慣れた手つきで何度も上下に擦り上げる。下衆な男に肌を触れられるなど、本来なら嫌悪感しか生まれなはずだった。

だが——級友たちが心配そうに京香を見守る中間が悪いことに今朝の疼きが京香の身体の中で芽吹き始めていた。

（う、うそだ……こんなの、なんとも……んんっ）

「ああん？ なんだ今の表情？ まさかとは思うがエロスイッチ入っちゃったか？」

「だ、黙れ！ 気持ち悪すぎて吐きそうになっただけだ……！」

無意識にもじもじと擦り合わせる太腿を見て、村瀬の顔が喜悅に歪む。もにゅもにゅと存分に太腿の柔らかさを堪能しながら、京香に抱きつくようにして背後に腕を回した。

「さあて、京香ちゃんの今日のパンツは何色か、お友達にチェックしてもらおうか」

「なあっ——!? や、やめる変態……っ！」

周囲の不良たちが歓声を上げて囃し立てる中、プリーツを摘まんだ村瀬の手がゆつくり上へと捲られていく。

内腿をきゅつと閉じて儂い抵抗をするも、それだけで村瀬の力に勝てるはずもなかった。

「おら、そこのお前。こいつのパンツが何色か言ってみろ」

「こッの……クズめ……！」

完全にスカートを捲り上げた村瀬が、京香の背後にいた女生徒の一人にそう訊ねる。

不良たちに睨まれて怯えつつも、それでも彼女は友達を裏切るまいと固く口を閉ざしていた。

「別に言わなくてもいいぜ？ それならそれで生徒全員が登校してくるまでこの女はパンツ丸見えでこのままだ」

「なっ!? そ、そんなのひどすぎる！」

「ならどうすればいいかわかるな？」

「う、うう……ごめんさい、京香ちゃん……。しろ……です……っ」

級友の絞り出すような言葉に、不良たちの真ん中でもがいていた京香の顔がたちまち耳の先まで真っ赤に染まっっていく。

「ぎやははは、お友達の前でパンツ見せびらかすのはどんな気分だ？」

（こ、この下衆男……！ 取り巻きがいないと、なにもできないくせにっ！）

頭が沸騰しそうな羞恥をこらえ、冷静になれと自分に言い聞かせる京香。村瀬は馬鹿みたいに有頂天になっている。他の不良どもは所詮は彼のいいなりだ。隙を突いて目の前のこの卑劣漢を一撃で伸してやればいいのだ。勝機はある——そう考えた矢先、

「うあつ——!?」

思わず悲鳴が飛び出し、京香の尻底がびくんと跳ね上がる。

「マジでいい身体してやがる。太腿もいいが、こつちもびちびちのゴム毬みてえな弾力だぜ」

なんの前触れもなく、村瀬の両手が京香の丸見えになったショーツごと桃尻を揉みしだいていた。遠慮など欠片もない、まるでそうする権利が自分にあって当然だと言わんばかりの乱暴な手つきで。

「なっ……!! こんなとこでなににして——!!」

あまりにも欲望に忠実な行動に、京香も唖然となる。もちもちとした尻肌深く手指を埋め込まれ、ショーツがぐしやぐしやの皺になるほど荒っぽく捏ね回されるのをただされるがままに受け入れてしまっていた。

(て、抵抗……しなきゃ……!)

なのに——。足腰は村瀬の尻揉みに合わせるようによりよるとタタラを踏む。

淫紋がいよいよ熱さを増して疼き始めていた。身体中の感覚が熱に浮かされたように覚束なくなっていく。

もにゅつもにゅつ、むにゅつ! むぎゅううつ!

「やめろっ! こんな、許さなっ——んううつ、お尻、揉むなあつ! やっ……ふああつ——!!」

疼きが増すにつれて、村瀬のセクハラショーもどんどんエスカレートしていく。

「京香とかいったな。気に入ったぜ……俺の女になれよ。そしたらさっきの無礼は水に流してやるぜ?」

「くっ……お前たちなんか、仲良くエロ本でも読んでいるのがお似合いだ……! あ、んくううっ!!」

村瀬の手が尻肉を鷲掴みにして、思い切り左右に引き延ばす。純白のショーツの裏側で、開けあげられた小さな窄まりがびくびくと痙攣するのが透けていた。

「お友達の前でケツ穴おっぴろげてやってもまだそ

んなことが言えるかねえ」

(調子に乗って……! こうなったら掟を破ってでもこいつを……!)

村瀬の指がショーツのサイドを摘み上げる。ずりりと剥ぎ取られた下着の奥から、完全に露出した京香の尻房が白日の下に晒される——誰もがそう思ったそのときだった。

「朝っぱらからなにやら騒がしいっすね先輩方」

聞きなれた声が京香の耳を打つ。と、同時にまるでもんどりうつようにして村瀬の身体が引き剥がされた。

「りよ、遼佑……!!」

どこからともなく現れた遼佑が、村瀬の手を振り上げていた。軽薄な口調とは裏腹に、その表情は微動だにしない。本気で怒ったときの顔だ。

「なんだてめえコラアツ!! 放しやがれ!」

彼より身長も肩幅もある村瀬が暴れ回っても、掴んだ手はビクともしない。逆に悲鳴を上げたのは村瀬の方だった。

「が、あああああつ!! い、痛てええつくソツ! な、なんだこいつ……!!」

「遼佑っ!」

退魔師が本気でやろうと思えば、一般人の手首を粉々に砕いてしまうことなど訳はない。京香の声に遼佑はしばらく村瀬を睨みつけていたが、やがては軽く溜息をついてその手を放した。

「こいつ俺の幼馴染みなんです。今回だけ勘弁してもらえませんか?」

あっけらかんとした言葉の裏には、たしかな実力差を感じさせる響きがあった。逆上して顔を赤く染め上げる村瀬にもそれとわかるほどの。苦々しく舌打ちをして背を向けるリーダーの後を、取り巻きの男たちがおどおどと追っていく。

「た、助けてくれて……ありがと……遼佑」

「おう、ちよつとは見直しただろ?」

にやつと子どもっぽく笑う遼佑の顔に、ドキリと胸が高鳴る。それに加えて昨夜の記憶まで甦ってきて、ますます赤くなる顔を俯ける。

「なんだか最近、いつも助けてもらってばかりな気がする……」

「なに言ってるんだ、こんなの助けたうちに入るかよ」

「うっ……そういうところが卑怯なんだ……」

「にしてもらしくねーな。どうした? いつものお前ならあんなやつ半殺しだろうに」

「う、うるさい……今日は少し、調子が悪かっただけで——ふあ……っ」

「京香……?」

「あ……な、なんでもない……っ」  
もみくちゃにされた制服を整え、京香は足早にその場を後にする。いまだお腹の奥に残るジクジクとした疼きを誤魔化すように……。

\* \* \*

「というわけでこの設問の解は以下のように——」

教壇に立つ数学教師がスラスラと連ねていく数式を、生徒全員が一斉にノートに書き写していく。

幾多のペンが軽快な筆音を走らせる中、みんなと同じように黒板を目で追いかける京香の表情には苦悶の色が浮かんでいた。

いつもなら説明されずとも理解できるはずの内容だというのに、視線は途中で止まり、また最初の行に戻ってはそれを繰り返す。

(気のせい、じゃない……だんだん疼きが……!)

遂にはノートの上にはたりとシャーペンを倒し、京香は口を固く結ぶ。ややもすれば、この場に似つかわしくない吐息が零れてしまっただけだった。

(疼きだけじゃなくて……あのときの……あいつに掴まれた感覚が……っ)

「ふ……ん、くう……っ」

千切るようにして呼吸を整える間にも、少女の尻は椅子の上で落ち着きなく左右に揺れる。

村瀬のいやらしい手指の感覚が尻肌の上をまさぐり、おなかの奥にジンジンとプラスチック音が溜め込まれていく。

「だめだ……これは少し……まずい、かも……」

今朝のように布団の上に横になることもできない今、このもどかしさを抑え込む方法が京香にはわからない。

ただ椅子の上に座って疼きが引いていくのを待つことが、地獄にも等しく思えた。

「……香……おい、京香さん？」

「へ、あ……？ な、なに？」

疼きに集中していて気がつかなかった。顔を上げるとひらひらと宙を踊るプリント用紙の奥から怪訝そうに遼佑がこちらを見つめている。

「お前が授業中に居眠りなんて珍しいな」

「誰がだ！ 遼佑じゃあるまいし！」

「異変を悟られまいと慌てて用紙をひったくる。」

「というかほんとに顔が赤いぞ。そーいやさつき調子悪いって言ったな……風邪か？」

「な、なんでもないって——！」

高まる疼きを抑え込もうと、机の下で制服の裾を握りしめる。と——不意に掲げられた遼佑の指先がぴたりと額に触れた。

「熱はないみたいだな——」

「やっ——！」

ドクンッと押し上げられるように心臓が脈打ち、もやもやとしたお腹の疼きが一瞬で波のように広がっていく。得体の知れない感覚に、気づけば力いっぱい遼佑の手を跳ね除けていた。

「痛ってえ——な、なんだよ……いきなり叩くことないだろ」

「あ……ごめん……。な、なんでもないんだ、本当

に。ちよつと考え事してただけで」

「まあ、熱はないみたいだけど……調子悪いんなら、ちゃんと保健室行って休めよな」

遼佑の後姿を見やりながら、京香はドキドキと高鳴る心音を鎮めようと唇を噛む。

（な、なに……これ……？）

むずむずと椅子の上でお尻が揺れる。もはやさっきまでの『疼き』というレベルとはわけが違う。お腹の奥から全身へ熱が放射されているようだ。

（遼佑の馬鹿！ こんな状態じゃとても授業なんて……！）

指先を噛んで必死にこらえる口元からも、熱のある妖しい息が零れる。恐る恐る、京香は下腹へと指先を伸ばす。

「ん、ふあつ——!？」

くちゅ……と、指先に信じられない感触があった。お腹の奥のむず痒さが甘い波紋を残して身体に溶け込むように消えていく。刹那の快感の後、またすぐに堪えきれない熱の波が襲いかかってきた。

（うそ……これって、まさか……）

俯いたまま震える指先でスカートの裾を掴み、ゆつくりと捲り上げる。自身の指先に感じた悪い予感

はすぐに現実のものとなった。

「うあつ」と小さな悲鳴が零れそうになるのをなんとか押し留める京香。濡れている——肉付きのいい太腿の間で、純白のショーツの中心が湿った光沢を孕んでわずかに変色している。

（こんなこと……あるはずが……でも、身体が勝手に……ん、くふう……）

指先は一度経験してしまった快感を求めてぶると震えながら再び股座へと降りていく。（もう少し……ほんの少しだけ……とにかく、この疼きを収めないと……）

遂には京香自身、そんな言い訳めいた考えをふわ

りと浮かべてしまう。そうなれば後はもうなし崩しだった。

スルツ——ぬち、ちゅつ、くちゅうつ……！

「ん、う……はっ……んんん……！」

片方の手を唇に充てて声を塞ぎ、もう片方の手を滑らかな下着の上に滑らせる。

ささやかな衣擦れの音と、粘い水音が机下の小さな空間で反響し、くちゅりと押し込まれた柔らかな布地に、じわりと濃密な染みが広がっていく。

（うああ……んくう……あ、ああ……）

こす、こす、と股座を撫でるたびに腰がびくりと跳ね、たまらず机の上に半身を預ける。ふと視線を上げれば目と鼻の先には遼佑の広い背中があった。

（遼佑のすぐ後ろで、こんな……！ ち、ちがうんだ……これは疼きを治めるため……）

徐々にはしたなく太腿が開いていき、椅子の上で擦りつけるように腰がぬこぬこと前後する。

（あ、ああ……ふあつ……!？ だ、だめつ——指くちゅくちゅつ……音、があ……）

既に机の上の京香の耳元にはハッキリとその淫音が聞こえてきている。

激しくなっていく指使いはもう自分ではどうしようもなくなっていた。これも淫紋の効果なのだろうか。自分の身体が抑制の効かない別ものになっていく感覚に、冷たい汗が背筋を伝う。

くちゅ、ぬちゅつ！ ちゅつ、ぷうつ……くちゅくちゅつ！

（くううんん……授業中なのに……こんなの、絶対ダメなのにいつ！ いつ……くううつ……んふあああ……!?!）

ぎゅうつと胸を鷲掴みにされたような快感が進った直後、カクツカクツとお尻が前後にわななく。

「ふっ——ぐ……う……はあ……はあ……はあ……」

肺の中の空気をすんでのところで堰き止め、少し

# 空からの訪問者



新米捜査員!  
麗子発動!!

## 二人の関係は!?

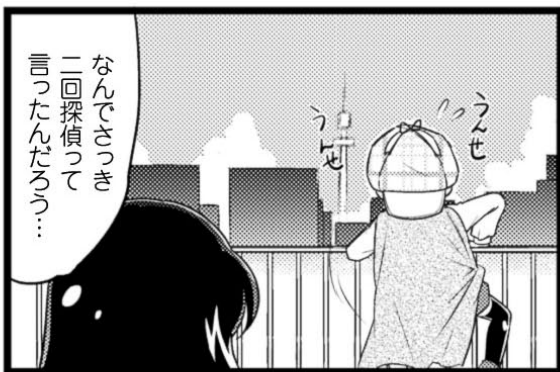
## 大事な事なので二回…



宇都宮麗子  
世間知らずで生懸命な新米刑事。い  
ろんなキウモノ捜査に参加する。



潤子先輩  
麗子の先輩刑事。キウモノ捜査を麗  
子に回す派本人。



騎士の国ストームランスに赴いたアレスたち。  
仲間となった女王リーネが、海賊や魔物の肉欲の餌食に!?



魔剣士  
**リーネ**  
乙女穢されし戦場

【第2話】 誇り高き剣の女王

原作 **まくらカバーソフト**  
さかいひとし きりしま  
小説 **酒井仁** 挿絵 **桐島サトシ**  
ILLUSTRATION



「真なる聖王の後継者候補」——  
ルートヴィッヒのもと集結した約五〇〇名の義勇兵と共に、若き將軍アレスは再び大陸の地を踏んだ。

義勇兵の士気は高いが、ハイランド王国軍に対抗するには戦力不足……そう判断したアレスは、騎士の国ストームランス公国に向かった。

だが、ストームランスのエイドリア王城に、あいにくリーネ女王は不在だった。

(いまのうちに兵たちの疲れを癒やしておいた方がいい。俺は……周囲の地形を確認しておくか)

ストームランスは騎士の国。たとえルートヴィッヒが正統な聖王後継者だとしても、リーネ女王が無条件で協力してくれる保証はない。

將軍として、辺りの地形を把握しておくに越したことはない。アレスは兵たちをウォードに任せ、川を遡っていくと湖が開けたところに出た。

「これは見事なものだ。マルティナさまとジュリアンさまが見たら喜ぶな」  
進軍に同行しているのは兵士だけではない。ルートヴィッヒの妻であるマルティナ、そして息子のジュリアン……島の娘、セリアも厳密には兵ではない。

もつとも、セリアの狩りの腕はたしかなので、戦力としては期待できる。

「む……？」  
不意に聞こえた水音に、アレスは緊

張する。魚……ではない、ぱしゃつ、ぱしゃつ！ と鋭く水面を切り裂く音に、聞こえる息遣いは女のもの。

(こんな森奥の湖で剣を振るう少女だと……？ うおおあああっ!!)

思わず叫びそうになったのも道理、浅瀬に立つて剣を握る少女は、実に妖艶な姿をしていたのだ。

身体のラインこそまだ発育途上だが、将来性を感じさせる膨らみ。頭の両脇で括った金髪が実に美しい。こんなところ誰かがいるとは思っていないのだらう、惜しげもなく乳房を晒している。

(し、下着一枚で剣の鍛錬？ 村娘にしては、顔立ちに気品がある)

湖の湖面にも劣らぬ見事な青の瞳に吸い込まれそうに見とれていると、うっかり小枝を踏んでしまった。

「だれっ！」

「し、しまっ……待ってくれ、別に覗いていたわけじゃ……わあっ」

びゅんっつ。少女とは思えない鋭い突き込みを、ぎりぎり身体を捻ってかわす。だが、下手に避けたのが少女の怒りに火を注いだのか、さらに二撃三撃を繰り返して来る。

(間違いない、これは我流の剣どころか、正統に学んだ剣筋！)

「卑劣な覗き魔に天誅！ 聖剣技セイクリッドフォール——ツツツ」

裂帛の気合と共に放たれた青白い剣光が、アレスの身体を打ちすえる。

「ぐああ……つつつつ……」

聖剣技、それは聖剣を持つ者だけが振るうことのできる伝説の剣技。まさかこんな小娘が……。

アレスが意識を取り戻したとき、既に少女の姿はそこになかった。

「つたく、情けない……」

まだ痛みの残る頭を抱えつつウォードらのもとに戻ると、アレスが戻る少し前にリーネ女王が城に戻ってきたらしい。ウォードがブルデイ島領主だとな名乗り、謁見にこぎつけたようだ。

ウォード、ルートヴィッヒ、そしてアレスの三名で謁見の間に通される。

「ストームランスの女王はまだ若い剣技に長けていると聞く。くれぐれも失礼のないようにな」

ウォードの言葉にふといやな予感を覚えるが、アレスは即否定する。

(大体なぜ、一国の女王が湖の畔でしかも裸で剣を振っているんだ)

そして、嫌な予感と言うのは往々にして的中するものである。

「き、キミは……！」

「アンタ、さっきの不埒者！」

思わず立ち上がりかけた少女だが、かろうじて体裁を整える。だが、ルートヴィッヒこそは聖王の後継者であるという説明を聞いている間中、美しき女王はずっとアレスを睨みつけていたのだった。

「お話はわかりました、ウォード卿。ルートヴィッヒさまが紛れもなく『聖王の紋章』を受け継いでいることも承知しました」

淡々と語るリーネに、アレスは逆に不安を覚える。

「ハイランドの不穏な動きについては、私も懸念を覚えていました。我がストームランス公国は喜んでルートヴィッヒ陛下に協力させていただくことを確約いたしましたしよ」

さすが騎士の国の女王、丁寧に会釈をするリーネに、アレスたちもホッと胸を撫で下ろす。だが次の瞬間、リーネは腰の長剣を抜き放った。

「なっ、い、いかがなされたリーネ女王陛下!!」

「協力は惜しみません。ですが、その者を軍師として迎えることには承服いたしかねますわ……いまここでその實力、見せていただきましょう!!」

謁見の間でアレスに剣を向けるリーネに驚き焦るウォードとは裏腹に、アレスはゆつくりと立ち上がり、自らも剣を抜く。

リーネに対し、無礼を働いている意識はない。なぜなら周囲の衛兵が誰一人驚いた様子がないからだ。

(これが騎士の国、剣の王国ストームランス……)

湖では不意を突かれたとはいえ、リーネの剣筋は本物だ。闘気を増すほどにアレスの頭は静かに冷えてくる。

「いくわよ、覗き魔男——っ」

その夜——ストームランスの騎士団長ランドルフと、リーネは酒を軽く酌み交わしていた。

「む……？」  
不意に聞こえた水音に、アレスは緊張する。魚……ではない、ぱしゃつ、ぱしゃつ！ と鋭く水面を切り裂く音に、聞こえる息遣いは女のもの。

眼帯で左目を隠した偉丈夫は、リーネの信頼厚き騎士である。

「ルートヴィッヒ閣下の存在もさることながら、あのアレスと言う男、なかなかのものでございましたな」  
「ふん……」

不機嫌そうに果実酒を煽る。  
謁見の間で行われた突然の決闘は、結果的にドロ。アレスの力強い剣の前にリーネは聖剣技を出す隙も見つけられないまま、ランドルフが裁定を下したのだ。

「実際に戦闘指揮を執るところを見ないと、なんとも言えないわ」

「しかしハイランドの実情がそのようになっているとは。いかにルートヴィッヒさまに聖王の紋章があるうと、下手を打てばハイランドの国力に飲み込まれますぞ」

それはリーネとてわかつている。だからこそ、ことは慎重に推し進めねばならないのだ。

（それに、あの子の軍議でルートヴィッヒさまは仰っていた。「後継者の紋章」を「聖王の紋章」にするには、ハイランドの首都ダイヤモンドシティを抜け、聖陵ホーリーヒルで儀式を行う必要があるって）

それにはまだまだ戦力不足は否めない。ストームランスとて、国内がすべて平定されているわけではないのだ。

結局、いい案も出ないまま、翌朝を迎えたりーネは、朝一番でアレスの訪問を受けることとなった。ムツとした

リーネには構わず、兵力増強の提案をするアレスに怪訝な目を向ける。

「ルートヴィッヒ陛下の檄文を各地の諸侯に送るですって？」

「はい、聖王なきいまの世が乱れていることに、不満や不安を覚えている諸侯は決して少なくはないはず。そうした者たちに、聖王の正統後継者が存在することを知らしめるのです」

なるほど、悪くないアイデアだとリーネは思い、さらに不機嫌になる。

本来、聖王でもないハイランド王グスタフがそれほどの横暴を繰り返しているのなら、グスタフにつくか、新たな聖王側につくかは諸侯の判断にゆだねられる。

「まあいいわ。それについてはルートヴィッヒさまとも協議を重ねましょう。それよりアレス將軍、ちょっと付きあいなさい」

そうしてリーネが連れてきたのは、兵士たちの訓練場。

「我がストームランスの兵たちはもちろん猛者ぞろいだけど、ハイランドと事を構えるには、後顧の憂いを除く必要があるわ。この国の西に位置するあごひげ岩……そこが海賊に占拠され、根城となっているの」

「海賊!?」  
「あなたには兵を率いて岩を奪還してもらおうわ。そのためにまず、もつと兵たちの腕を鍛えてもらう」

若き女王リーネは、こうと決めたら拔群の行動力を見せる人間のようだ。

さつそく兵たち相手に組み手を始めるリーネと共に、アレスもストームランスの兵たちと訓練を始める。

「えやああつ、とおおう！」  
「やるわねアレス！ ストームランス王家の剣さばきを見せてあげるわ!!」

いつしか……リーネは生き生きと剣を振るい、楽しげに兵たちをびしびしとしごき続ける。

昨日の一件には驚かされたが、こうしてみるとリーネの剣はまっすぐで清々しい。そう思わずにはいられないアレスであった。

2

「で……本当にここから海賊どもが逃げてくるのね」  
女剣士の言葉に、アレスは頷く。

あれより一〇日ほどが経つ。兵たちの練度も上がり、頃合いと見たリーネは、アレスと共に海賊を駆逐すべく、あごひげ岩に進軍した。

すぐにも攻め込もうとするリーネをアレスは制した。岩の門は強固で、正面から攻めるのは得策ではない。  
（岩の背後は堅牢な絶壁。なら連中はどこから物資を搬入している？）

数日間、周囲を調べた結果、断崖に近い場所に「抜け道」があるのが判明した。物資搬入口であると同時に、万一の場合の逃げ道としても使われるに違いない。

「いまごろ、セリアたち弓兵部隊が煙矢を岩内に打ち込んでいるはず。混乱

した海賊どもはこの抜け穴から逃げざるを得ない」  
「なるほど、敵の虚を突いて我らが岩内に乗り込むわけですな。さすがはアレス將軍」

力強く頷くストームランス兵たちに、リーネはどこか面白くなさそうだが、アレスの軍師としての才能は間違いないようだ。

「……来るぞ！」  
アレスの言葉に兵たちに緊張が走る。煙に追われて抜け穴から飛び出してきた海賊どもは、たちまち兵たちに打ち倒され捕縛される。そうして海賊の混乱に乗じて、兵たちが岩に次々と斬り込んでいく。

「あたしも攻め込みたかったのに……」  
「リーネはいわば最終ライン。ここで一人残らず海賊を食い止めるんだ」  
リーネはアレスと共に抜け穴の前で待機していた。海賊に援軍を呼ばれたら、作戦が台なしになる。

兵たちを鍛えるうち、いつしかアレスはリーネを呼び捨てにするほど打ち解けていた。

「油断は禁物！ てあああつ」  
「油断は禁物！ てあああつ」  
「油断は禁物！ てあああつ」

「油断は禁物！ てあああつ」  
「油断は禁物！ てあああつ」  
「油断は禁物！ てあああつ」

「油断は禁物！ てあああつ」  
「油断は禁物！ てあああつ」  
「油断は禁物！ てあああつ」

皆の正面では味方の鬨の音がいつそう大きくなっている。どうやら作戦はうまくいっているようだ。

だが、そのときである。

一際目立つ大男が抜け穴から姿を現したのだ。見るも巨大な戦斧、その風格にアレスは圧倒される。よもや海賊の頭だろうか。

「くっそおとおお、てめえらなんなんだ！ どけどけえっ、こうなったら俺だけでも逃げのびて……」

「あんたが海賊頭のブルベアーね。部下を見殺しにして逃げるつもり？」

リネは完全にブルベアーを舐めきっていた。たしかに剣技に関してだけなら、たかが海賊頭はリネに遠く及ばないだろう。

だからこそ、そこに油断があった。

「いくわよ、聖剣技……」

「よせリネ、いきなり大技は！」

「セイクリッドフォ——ルツツツ」

必殺の気合と共に放たれた聖剣技を、ブルベアーは真正面から受け止めた。少し後ずさっただけのブルベアーに、逆にリネがバランスを崩す。

「いかん………つっつ」

ぶおおおおんっ。幅広の斧が唸りを上げて少女に襲いかかる。考えるより先にアレスは飛び出していった。

「ぐあああああっ！」

まともに食らい、こそしなかつたが、強烈な衝撃でアレスは倒れ伏す。うつ伏せに地面に倒れ、起き上がれない。

「アレス！ アレスウウツ」

「へっへっ、女を庇って自分がやられちゃ世話はねえな。どうせこの皆はおしまいだ、てめえらをぶっ殺してさっさと逃げるぜ」

ゆっくりと戦斧を振り上げ、アレスにとどめを刺そうとする。

「ま、待ちなさい！ お、お願いだから待って……！」

聖剣技も通用せず、アレスは助けない。必死に訴える少女の姿に、ブルベアーは「にやり」と好色な笑みを浮かべ、じろじろとリネの身体を舐めるように眺める。

「ほう、小娘かと思つたら、けっこうな上玉じゃねえか……いいぜ、助けてやつても。じゃあ、その剣を置いてこの場で裸になりな、嬢ちゃん」

「えっ」

思いもかけぬブルベアーの言葉に、リネは目を丸くする。

（もしここでもう一度斬りかかっても、それが避けられたらアレスが……）

仕方なく剣を置いて、甲冑を外していくと、少女らしい柔らかかなラインが露わになっていく。

海賊頭の視線が柔肌に突き刺さるよう、不快感に鳥肌が立ちそうだ。

「ふん、乳はいま一つだがいいケツしてるじゃねえか。おら、とつと下も脱げよ。でないと……」

「い、いや……」

両手で胸は隠せるものの、このままスカートを脱げば下着が丸見えになってしまう。

思わず顔が熱くなるが、ブルベアーはそんなリネの反応そのものを楽しんでる。これみよがしにアレスの背中に斧を向けて見せる。

「早くしろってんだよ！」

「きやあつ」

大男の太い脚が少女を蹴り倒すと、仰向けに倒れた拍子にスカートの裾がまくれてしまう。

露わになった下肢の付け根を見てじゆるりと舌なめずりをすると、おもむろに少女の下腹部を踏みつけた。

「うぐう……つ」

戦闘に赴く際のリネは、鎧以上の防御力を持つ「強化服」を身につけている。特殊繊維が織り込まれたそれは軽くて動きやすく、対物理、対魔法攻撃力にも秀でているのだ。

乳房を覆う甲冑のように、リネ自らの意志でないと下着を脱がすことすら困難である。だが、海賊はあくまでリネを辱めるのが目的。

靴底を小刻みに振動させ、乙女の恥ずかしい部分に淫らな刺激を与え始めたのだ。いかに強化服越しとはいえ、振動は秘唇にまで到達する。

「や、やあつ、き、気持ち悪いっ」

「ぐひひひ、そこは女のいちばん感じやすいところなんだぜ。なあにそのうちに気持ちよくなってくるさ」

半裸で男に踏まれる屈辱に、リネ

の目尻にうっすら涙が浮かぶ。

こんなことをされて気持ちよくなるわけがない。だが、これまで略奪と陵

辱を繰り返してきた悪党は、女体について知りつくしていた。

為す術もなく身をよじり悶える美少女の哀れな姿に、ブルベアーの股間がむくむくと盛り上がっていく。

「女だてらに剣なんぞ振り回してるから、そういう目に遭うんだぜ。女なんてのは、男を悦ばせてればいいんだよ」

「あつ!!」

海賊の股間からよつきり生えた不気味な肉棒を見て、思わず目をそらす。それが勃起した男性器であるという知識くらいはあるが、もちろん本物を見るのは初めてだ。

そして次にブルベアーの取つた行動は、まったく予想外だった。どっかりと少女の小柄な身体にのしかかると、乳房を隠していた両手を左右に押し開いたのだ。

「いやあああああああつ」

赤黒い肉棒が乳房に近づいてくるのを見て、リネはパニックに陥る。つ

んと酸っぱい匂いが漂ってきたかと思うと、ブルベアーは恥知らずにも乳房の谷間に勃起ペニスを押しつけたのだ。

グローブのような大きな手が王女の胸の膨らみを挟み込み、ブルベアーは

かくかくと腰を振り始める。

「おおり、見た目よりもずつと柔らかいえじゃねか。すべすべたまんねえ」

自分が一体なにをされているのか、リネには理解できなかつた。

ただわかるのは、この不潔な男が不潔な部分を自分の乳房に擦りつけ、邪

悪な快楽にひたつていっているということ。

そして、いまのリーネにこの男に抵抗する術がないということ。

「いいねえ、小生意気な小娘が悔しさに顔を歪ませるさまは。まだまだじつくりいたぶってやる」

もはやブルベアーはこの場から逃げるといふ目的も忘れ、少女の肌の感触に酔いしれていた。醜く歪んだ唇の端から垂れ落ちた涎が少女の肌を汚し、腰の動きはますます激しくなる。

「やだなにすする気、もうやめ」

不意に、海賊の動きが止まった。

不気味な肉棒が大きく跳ね上がったと思つた次の瞬間、なにか熱い液体のようなものが噴き出して、少女の顔にまき散らされたのだ。

「ひ……………う……………っ？」

最初、尿をかけられたのかと思つた。だがぶちまけられたそれはねっとり粘つく、リーネの額や頬、美しい髪にへばりついて垂れ落ちもしない。

(なにこれ、く、臭いっ……………)

「お、おおう……………別嬪さんが俺のザーメンまみれになつちまつたぜ」

(ザ……………ザーメ……………?)

ブルベアーは、ショックのあまりぐったりとなつた少女の上から腰を上げる。そしてスカートをめくり上げるや、股間に唇を押し当てたのだ。

「！」

もはやリーネには抵抗の声を上げる気力もない。大男は両肩に少女の下肢を乗せ、下着の上から股間にびたりと

吸いつく。そして「びちゃびちゃ」と音を立ててねぶり出したのだ。

「むぶふううう、小娘にしちゃいいまんこの香りだ。だがこいつは生娘の匂いだな。たつぷりほぐさねえと」

びちゃびちゃ……………べちよべちよ……………

遠くに砦攻防の音が聞こえる中、野獣が乙女を貪る音がただ響く。

心は嫌悪でいっぱいのはずなのに、下半身には力が入らず、ただされるがままに股間をねぶり回されている。しかも——しかも自分のために負傷した男がすぐそばにいてというのに。

ブルベアーから目を背けると、偶然にもアレスの姿が見えた。よほどの痛手を負つたのだろう。まだ立てないでいるようだ。

いやいつそ気絶でもしていてくれれば……………だが青年將軍は苦しげに呻き、どうにか立ち上がろうとしている。

(もうやめてアレス！ こいつは躊躇なくあなたを殺してしまふ。もしそんなことになったら、あたしは……………)

ほろり、目尻に熱いものが浮かんたのは、単に自分を哀れんだからではない。自分のせいでアレスが傷ついたこと、自分の慢心が憎かつたからだ。

「ひひひ、ずいぶん大人しくなったじやねえか。これだけほぐしておけば、生娘でも俺のデカマラが入るだろう」

そう言つて顔を上げた海賊の唇から、

たらりと唾液の糸が垂れる。

認めたくないことだが、成熟の途上にある乙女の肉体は、卑劣な悪漢の執

拗な愛撫に晒され続け、あろうことか甘い蜜を分泌させていたのだ。

海賊の舌が別の生き物のように巧みにうごめき、布越しに花弁をなぞるたびにお腹の奥が熱くなる。

神経の密集地帯を吸い上げられると思わず「ああっ」と声が出そうになる。

「そろそろ、この邪魔な布切れを脱ぎたくなつてきたんじゃないか？」

ブルベアーの股間で、あの肉竿が完全復活していた。リーネの上半身に汚液をぶちまけた凶器は、次は乙女の純潔を奪わんと、臍に届きそうなほど反り返つていたのだ。

通常なら強化服の下着はそう簡単に脱がせることはできない。しかし、リーネが海賊に屈した場合とは別だ。

「ま、まさか……………それを、あたしの中に」

「心配するな、裂けやしねえぞ。最初

はちよいと痛いかもしれないがな。そのうちひいひいよがつて、自分から腰を振り出すようになるぜ」

海賊の言葉がなにを意味するのか、リーネはようやく理解し、戦慄した。

彼はあの極太の肉凶器をリーネの股間にねじ込み、そこにあの臭くて白い体液をぶちまけるつもりだ。性交、交尾、子作り……………いかに初心な乙女とはいえ、それが意味するところを知つて、

全身に鳥肌が立った。

「い、いやよ……………そんなの無理、そんなことしたら赤ちゃんできちゃう」

「俺さまの子種は濃いいからな。一発

で孕むだろうよ。一発で済ませる気はねえぜ。てめえの腹がパンパンになるまで、何度でも出してやらあ」

なんともおぞましいことを口にする海賊に、リーネは蒼白になる。そんな少女をさらに追い詰めようというのか、大男は少女の両足首を掴むと、やおら立ち上がった。

V字開脚させられた状態では下着も丸見え。若き女騎士はあられもない姿をアレスの前にさらけ出してしまふ。

「や、やめ……………うぐっ」

「あの兄ちゃんはお前の男か？ 好きな男の前で、惨めに処女膜をぶち破られるところをたつぷりと拝ませてやるな。これがお前のヴァージンの最期の姿だぜ！」

げはははと下品な笑いを上げながら、ブルベアーは無骨な指を強化服の下着に手をかける。

(もうダメ……………もう、なにかもおしまい……………)

すべての望みを失つた少女が、絶望に目を背ける。魔法繊維を織り込んだ下着はリーネの絶望の心に反応し、たちまち防御力を失つていく。

「おい、その海賊!!」

ブルベアーの肉棒がリーネの処女膜を突き破ろうとしたその瞬間。

凜とした青年の声が海賊の背中から浴びせられ、ブルベアーは驚愕のあまり

振り向いた視線の先にあるのは、先ほどまで痛手に倒れ伏していたはずの



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**